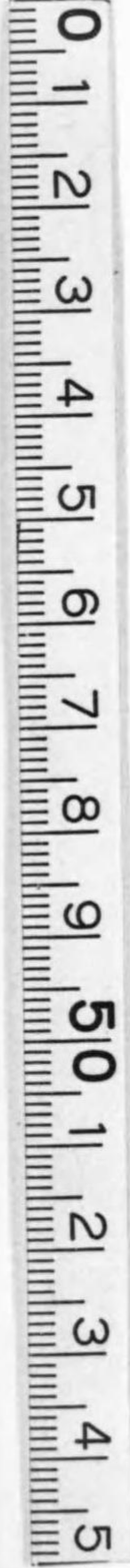


910.4-1237



1200500754693



始



29F12

Q10.4
I.23.



五子山房力著

大日本古事記
傳家



皇統社

983
57

序

一、簡単にありのまゝを記して、序とする。

一、本書は友人伊福部隆彦君の勧めにより、大正十三年頃から、舊稿で、まだ纏めずにおいたものを取集めたものである。而して新しい大東亞戦に何等かの關聯をもつものにして、そこに職域奉公の微志をあらはしたいと思ひつゝ、その心組で、纂輯をも試み、またおふけなき名稱をも撰んだのであつた。

一、集めたる拙文十五篇、その執筆の機縁はまち／＼で、或は新聞の讀切物として寄稿したものもあつた。或は國文學研究の諸雜誌に掲載したものもあつた。或は中學程度の講義録に連載したものもあつた。或は名著現代語譯の解題として書いたものもあつた。殊に大甘で甚だ相應はしからぬのは、拙纂國語讀本の教師用に載せたもので、その老婆心切の低級さは我れながら極りのわるい心地がするけれども、こんな

ものもたまにはと考へて、思ひ切つて載せることにした。……

一、古典の意義と趣味とは廣大無邊である。而して我が古典の廣大無邊なる意義趣味は國運の開展するにつれて、常に思ひ設けぬ様相を示顯するやうに見える。本書は著者が、我が古典の時々見せた新しい様相に打たれて、幾度か首を垂れ掌を合はせた歎稱歎異の情を披瀝した幼い記録である。

昭和十七年八月一日……著者……

……

大日本古典の偉容 目次

第十一 祝詞祈年祭の高遠なる意義……………二一

——古典に於ける皇道弘布の宣言——

第十二 神功皇后の三韓遠征（日本紀）……………二九

——布哇馬來の電撃を思はしむる——

第十三 和泉式部日記の本文意義趣味考……………三九

第十四 問答物語の始祖大鏡……………七〇

第十五 王朝文學に於ける見殘されたる表現美……………七五

第十六 鎌倉の軍記に於ける新しき文體の創始及び完成……………八三

第十七 太平記再讀重愛の心緒を述ぶ……………一九七

第十八 謠曲 隅田川……………二二三

——その本文、解釋及び批評——……………二二三

| | | |
|-----|----------------------------|----|
| 第九 | 謠曲羽衣 | 二七 |
| 第八 | —その本文、解釋及び批評— | 三三 |
| 第十 | 「羽衣」によりて試みに謠曲に於ける「カ、ル」の意義、 | 三九 |
| 第六 | 役目及び趣味を説く | 三五 |
| 第十一 | 松島より平泉へ（松尾芭蕉、奥の細道） | 三九 |
| 第四 | —その本文、解釋及び批評— | 三九 |
| 第十二 | 幻住庵の記（松尾芭蕉） | 三九 |
| | —その本文、解釋及び批評— | 三九 |
| 第十三 | 老の姿はかはるとも（近松、國姓爺合戦） | 四四 |
| 第十四 | 眞書太閤記とは何ぞ | 四八 |
| 第十五 | 椿説弓張月を読む | 五二 |

目次 終古典の偉容 目次

大日本古典の偉容

内容十五章

何しろ昨今の大非常時である。朝鮮から滿洲から支那全土へと、仁義の皇化が次ぎ／＼に推し及ぼされて、王道樂土が年毎に月毎に日毎に廣がつて行くといふ大時代の年頭を飾る我が大學新聞の新年號に書くのだ。同じ事なら、此の目前の大事件に關係のある事を書いて見たい。同時に成るべくは自分の専門の畑の中から、まだ人の言はぬやうな重大な思想を擇り出して書いて見たいなどと、負ふけない事を考へて居る中に、ふと浮かんだのは、古い祝詞の「祈年祭」の一節である。

「祈年祭」は神々に年穀の豊熟を祈る詞であるが、その中に「辭別」と云つて、特に天照大御神に申上げる詞の中に、次ぎのやうな文句がある。「大神の見そなはず四方の國々は、天の蔽ふ限り、地のつゞく限り、青空が高く棚引き、白雲が大地にかぶさつて居る限り、海上では棹櫂を干さずに漕ぎ進んで、もう進めぬといふ行き止まりまで、海面一ばいに隙間もなく船を浮かべ、陸上では馬の背の荷を結び堅めて岩が根木の根を踏みくぼまして、馬の爪がもう利かぬといふ處まで、長い道中隙間もなく駄馬の列を立てつゞけて、せゝこましい小國は廣々と取り廣げ、險阻

な物騒な國々をば平和安穩の國となし、而して王化に潤はぬ遠國をば、幾十筋の太い綱を打ちかけて引き寄せるやうに御寄せ下さる。これ皆大神様のお蔭であります」といふ一節がある。私はこれを讀んで、そゞろに皇軍百萬海を渡つて、揚子江、黄河、太湖、八達嶺、居庸關、無數のトーチカ、クリークを踏み躪り飛び越えて進み行く、陸、海、空三軍の、大理想を念じつゝ、慘として驅らざる雄姿を思ひ浮かべる。同時に吾々の祖先が、千幾百年前において、今日吾々のやりつゝある事、やらうと努めつゝある事を、文字の上では、より偉大に、より壯烈に宣言して居るのを驚歎するのであるが、こゝに一つの不審は、この海、陸、船、馬に關する數行の意義をば、朝貢の船舶駄馬の連續する事と取るべきか、或は皇化を普及し、民禍を芟除し、理想を弘布する。我が宣傳使の海陸兩路における大行列と見るべきかといふ點である。その要點なる原文を讀み下し式に書き改めると、

青海原は棹櫂干さず、舟の艦の至り留まる極み、大海に船滿てつづけて、陸より往く道は、荷の緒結び堅めて、磐板木根履みさくみて、馬の爪の至り留まる限り長道間なく立てつづけて、狹き國は廣く、峻しき國は平けく、遠き國は八十綱うち掛けて引き寄せることの如く、皇大御神の寄さしまつり給へば……

右の通りである。

此の節の意義について、從來は賀茂真淵が「祝詞考」において「青海原云々、これは海路より貢奉るをいふ」「自陸往道者云々、これは陸路より租調等を貢奉る體を云ふ」と解釋したのを始めとして、中頃の鈴木重胤から最近大正昭和の國史國文の諸家に至るまで、悉くこの意味に取つて居るが、又私自身も以前はその意味に取つてゐて、已に一度その通り小著にも書いたのであるが、ひそかに思ふに、これは朝貢の船や馬が遠近の領國から來ることではなくして、皇化宣傳の御使が勢揃ひして出かけて行くことであらう。向うから來るのではなくして此方から往くのであればこそ、「舟の艦の至り留まる極み」、「馬の爪の至り留まる限り」とは云つたのであらう。「陸より來る道」と云はずして「陸より往く道」とは云つたのであらう。また船を満てつゞけ馬を立てつゞけて、狭き國を廣くし、峻しき國を平かにすると言ひつゞくる以上は、どうしても一種の理想を持つ團體の積極的遠征の意味すべき筈で、小弱國がお辭儀をして強大國の主權者に献ぐる朝貢の船や馬に取つて、狭き國を廣くし、峻しき國を平らけくするといふのは、何の意義をも成さぬことである。かたゞこれはどうしても皇化宣傳使が、仁義平和の大道を高く掲げて、有形的

には、狭き國、險阻な國を廣く平坦にし、精神的には惡政惡俗に苦しむ國々を善導して、道ある國とするといふ意味に取るべきであらう、と私は思ふのである。

「かやうな事は、一見文法や古文辭に囚はれた好事家の暇つぶしのやうにも見えるが、しかし考へ様によつては、古文を正しく解釋するのは、非常に大切な仕事で、殊に肇國當初に國民の大理想の宣せられた偉大なる文章の意味を、左と解くべきか、右と釋くべきか、消極的に解釋すべきか、積極的に解釋すべきか、坐つてゐてお土産を貰ふ事と取るべきか、難路を切り開きつゝ、進んで尊い贈物を憐れな人々に與へる事と取るべきかは、國文學に遊ぶ小さき學徒としてのみならず、日本國民としても輕視し小視すべき事ではあるまいと思ふ。

三

私は如上の所見を十餘年前（大正十三年）に取纏めて、小さい論文を書いたことがある。その小篇を陸軍幼年學校が友人本庄圭一君を介して、その教科書に採録することを所望され、私は欣諾し、これが始めて同校の讀本に掲げられることとなつたが、當時私はこれを悦ぶと同時に、一種の奇異なる感じのするのを禁ずることが出来なかつた。その中に上海事變が起こつて、新に滿洲

國が成立した。私はこれを見て、千數百年前に創作された「祈年祭」の辭別の尊い暗示が、昭和の國民を奮ひ起たしめたのではないかと疑つた。その中に今度は、支那事變が突發して、皇化宣傳の使命を帯びた勇士達が、現に海川を渡り、野山を踏みしだき、大空をとよもして、北支、南支、中支に仁義平和の道を布き傳へつゝある。私は之れを見て、肇國の太古に種を蒔かれて、祝詞の一節に文學の花と咲いた大理想が、昭和の現代に立派に結實したのである。あの或人々からは天地間第一の大文章とも稱せられた「祈年祭」の辭別が、全國の幾千、幾萬、時としては十餘萬柱の神々の社で朗誦される中に、冥々の間に國民の心感孚して、この吾等が眼前の大結果を結實させる事とはなつたのであると信ずるやうになつた。抑々あの大祝詞は、何により、誰れが思ひつき、誰れが筆を執つて、あの莊嚴雄大なる詞章を成したのであらうか。これは今日から測り知るべからざる事であるが、とにかく太古にあの大可能を暗示して後昆を激勵した大文學があり、最近吾等の時代において、祝詞の古文が誇張された空想妄想でなかつた事を證明した生々しい事實があり、古今相照らして皇國日本の偉大を證明して居るのは、實に愉快なることである。

再び言ふ

天の蔽ふ限り、地のつゞく限り、海では神楫の利く限り、海上一ぱいに船を浮べ、陸では馬の爪の利く限り

り、長い道中隙間もなく駄馬の列をひき連ねて、皇化の宣傳使を差立て、狭き國々を廣くし、険しい物騒な國々を平和安樂にして、仁義の皇道に潤はしめ得ることは、伊勢にまします大神様のお蔭であります。

などは、天壤無窮の神勅に次いで、吾々の合掌しつゝ、歡喜踴躍して、その實現大成に努力すべき事ではなへか。(昭和十三年一月六日稿)

私は最近に出来た文章、例へば現代文士の筆に成つた支那事變の一節を掲げて、此の講義の結びにしようと考へてゐた。そして其の準備として、その方面のおもなる數篇をあさつて見たが、適當な文章の無いのに困つて居る中に、突然今度の大東亞戦争が勃發し、昭和十六年十二月八日及び十日の、あのハワイの眞珠灣及びマレー沖の米英軍に對する初一撃の快報に驚かされた。われらの驚きは大きかつた。同時にわれらの喜びは限りなき安心と希望とに満たされた廣大無邊なものであつたが、此の驚きと喜びとに面接した後に考へると、重慶政府の軍隊相手の戦争記は、俄に貫祿を失つたやうに感ぜられ、従つて此の講義の最後を飾るには相應はしくないやうな氣がして來た。そこで考へ直して、いろ／＼調べて見た結果、これこそと思つたのが、『日本紀』に於ける神功皇后の新羅征伐の記事である。それは無論今度の太平洋戦に比べて、非常に地域が狭く、仕掛が小さいけれども、神明の加護により、天地自然の協力により、君臣一致の努力によつて、敵國を威壓した趣は、たとへば弘安の蒙古撃攘と太閤の大明征伐と、今度のハワイ、マレーの電撃とを一つに合はせた様なところがあり、之れを記述した文章にも、神々しい、蒼古とも神

秘ともいふべき趣味と威力とがあつて、見やうによつては、今度の大東亞戦争の大序幕戦と對照せしむるに、必ずしも不足のないものであらうとも思はれる。で、左に前後の部分を講者の筆で筋書風に約説して、主要部をば『日本紀』の本文を、そのまゝに掲げることにする。

事は仲哀天皇御即位八年の秋九月の事である。天皇は熊襲を征伐しようとして、筑紫に御進幸あらせられたが、賊徒征伐の軍議を凝らさせらるゝ折に、意外の神託があつた。讀み下し式に書き改めると、かうである。

天皇何ぞ熊襲の服はざるを憂ひ給ふ。これ背肉の空國なり。豈に兵を擧げて伐つに足らんや。この國に愈りて寶の國あり。譬へば美女の眉引の如く、向つ國なり。眼の炎く金銀彩色、多に其の國に在り。これを考案新羅國と謂ふ。若しよく吾れを祭り給はゞ、則ち又血らずして、その國必ず服ひなむ。また熊襲も服ひなむ。

上文の意味は「天皇何とて熊襲の歸服せぬ事を御心配遊ばしますぞ。あれは鳥獸の肉に譬へると、背中のやうな肉の少ない空ツぼの國で御座います。何のわざ／＼兵を擧げて征伐するに及びませう。あの國に優つた寶の國が、海の向うに御座います。それは譬へば顔よき少女の眉を引いたやうな美しい國で、目ぶしいやうな金銀珠玉が數知れずあります。國の名を新羅と

申しまするが、熊襲の歸服しないのも、原因はその國の後援がある爲めで、その國を御征伐になれば、熊襲の如きは自然に歸服致しまする」といふのである。天皇は此の神託に御従ひ遊ばさずして、遂に檀日の宮にして崩御遊ばされた。

神功皇后は天皇の喪を秘し、武内宿禰等と共に、神託に従ひ、海を渡つて新羅を討たうと御考へ遊ばされた。で、先づ再び神託を乞うて、託れる神の御名を御尋ねなされると、天照大御神様の御心を始めとして、底筒男、中筒男、上筒男、その他幾柱かの神達であつた。皇后は神託の教に従つて、先づ熊襲を討たせられると、強敵が片端から歸服した。敵の中に羽白熊鷲といふ者があつた。『紀』には、其の人となり強健、また身に翼あり、能く飛びて高く翔る。是を以て皇命に従はず」と書いてある。その強賊すら、皇后が向はせられると、一舉にして滅ぼされた。

かくして神功皇后はいよいよ新羅征伐の御決心を遊ばされた。そして熊襲征伐から還らせられると、檀日の浦に行かせられ、御髪を解き、海に臨んで誓はせられた。

自分は神祇の御教を受け、皇祖の御加護を頼み奉りつゝ、是れから大海を渡つて、躬ら西の國を征たうとする所である。今吾が髪を海水に入れてすゝぐであらう。事若し成るべくは幸先を見せて、吾が髪二つに分かれよかし。

と云つて、御髪を海水に入れてすゝがせられると、御髪が自然と、あざやかに左右に分かれた。皇后はそのまゝ、御頭の左右に角髪に結はせられて後、群臣に仰せられるには、

抑も兵を動かすのは國家の大事で、安危成敗のわかるるところである。今遠征の師を出だすに臨んで、若し事を群臣に委ねるならば、事成らざるの曉、罪は群臣に歸するであらう。これは甚だ痛ましい事である。自分は婦女の身で、不肖ではあるが、暫らく男装して、雄略を振ひ起こし、上は天神地祇の冥助を蒙り、下は汝等の協力によりつゝ、激浪怒濤を冒して寶の國に向ふことにする。もし事成らば汝等群臣と功を共にするであらう。事もし成らずば、自分唯だ一人罪にあたるであらうぞ。此の意を含んで軍議を凝らせ、と仰せられた。群臣は聲をそろへて、

皇后天下の爲めに計ります。宗廟社稷を安んじ給ふ所以なり。且つ罪臣下に及ばず。頓首して詔をうけ奉る。

とお答へした。

それから秋の九月になつて、皇后は諸國に令して船を集め、軍兵を練らうとなされたが、軍卒が容易に集まらなかつた。皇后は「これは屹度神様の御心であらうと仰しやつて、大三輪社を祭

らせられると、軍衆が自然に集まつた。やがて萬端の支度が整つたので、最後に吾瓮の海人、鳥摩呂といふ者を西の海に出して、國が有るか否かを見させられたが、還つて来て、「國はとんと見えませぬ」と申上げた。今度は磯鹿の島の海人名草といふ者を遣はされたが、數日を経て還つて来て、

西北の方遙かに山が見えて、雲を帯びて横さまにつゞいて居ります。おほかた國があるの
いで御座りませう。

と申上げた。かくして皇后はいよく吉日を卜して征途に就かせらるゝこととなつた。

これからが本文のまゝで、讀み下し式にすると、かうである。

二

時に皇后親ら斧鉞を執りたまひて、三軍に令して曰はく、金鼓節なく、旌旗錯亂
るゝ時は、即ち士卒整はじ。財を貪りて多欲し、私を憶ひて内に顧みせば、必ず
敵の爲めに虜られなむ。其の敵少なくとも、な輕りそ。敵強くとも、な屈ぢそ。尅
暴がむをば、な聽しそ。自らに服はむをば、な殺しそ。遂に戦ひ勝つ者は必ず賞あ

らむ。逃げば自ら罪あらむと。既にして神誨へたまふことあり、曰はく、和魂は玉
身に服ひて壽命を守らむ、荒魂は先鋒として、師の船を導かむと。即ち神の教を得
て拜禮ひ給ふ。因つて依網吾彦男垂見を以て祭の神主となす。

時に適ま皇后の開胎に當たれり。皇后則ち石を取りて御裳の腰に挿みて、祈ひて
曰はく、事竟りて還らむ日に、玆土に産れ給へと。其の石今伊都の縣の道の邊に在
り。既にして即ち荒魂を招きて軍の先鋒を爲し、和魂を請きて王船の鎮めと爲す。

冬十月己亥朔辛丑、和珥の津より發ちたまふ。時に飛廉風を起こし、陽侯浪を擧
げ、海の中の大魚悉に浮かびて船を挾む。即ち大きな風順吹きて、帆船波の隨
に、櫓楫を勞はらずして便ち新羅に到る。時に隨船潮浪遠く國の中に逮ぶ。新羅王
是に於いて戰々慄々きてせんすべを知らず。則ち諸人を集へて曰はく、新羅國を建
て、より以來、未だ嘗て海水の國に凌ることを聞かず、若し天運盡きて國海となる
かと。是の言未だ訖はらざる間に、船師海に滿ちて、旌旗日に耀き、鼓吹聲を起こ
して、山川悉に振ふ。新羅王遙かに望みて以爲へらく、非常の兵、將に己が國を

滅ぼさんとすと怖ぢて心まどひぬ。乃今醒めて曰はく、吾れ聞く東に神の國あり、日本と謂ふ。また聖の王あり、天皇と謂ふと。必ず其の國の神兵ならむ、豈に兵を擧げて距ぐべけむやといひて、即ち素旆をあげて自ら服ひ、素組して自ら面縛はれ、圖籍を封め、王の船の前に降りて、因りて以て叩頭て曰はく、今より以後、長く乾坤と與に飼部となり、船柁を乾さずして春秋に馬の梳及び馬の鞭を献らむ。また海の遠きに煩かずして、年毎に男女の調を貢らむと。則ち重ねて誓ひて曰はく、東にいづる日の、更に西より出づるは且らく除く、鴨綠江返りて逆まに流れ、及河の石昇りて星辰とならざるに、春秋の朝を闕き、梳鞭の貢を廢めば、天神地祇共に討へ給へと申す。時に或人の曰はく、新羅王を誅さむと欲すと。こゝに皇后の曰はく、初め神の教を承けて將に金銀の國を授からんとす、又三軍に號令して、自ら服はむを勿殺しそと曰へり。今既に財の國を獲つ、また人自ら降服ひぬ。之れを殺すは不祥しとのたまひて、乃ち其の縛を解きて、飼部となし、遂に其の國中に入りまして重寶の、府庫を封め、圖籍文書を收む。即ち皇后の杖つきませる矛を以て、新

羅王の門に樹て、後葉の印となす。故其の矛今も猶ほ新羅王の門に樹てり。爰に新羅王波沙寐錦、即ち微叱已知波珍干岐を以て質として、仍ち金銀彩色及び綾羅縑絹を貢し八十艘船に載せて、官軍に従はしむ。是を以て新羅王常に八十艘の貢を以て、日本國に貢る、それ是の緣なり。

語釋 『日本紀』は『日本書紀』ともいひ、また『ヤマトヅミ』とも云つた。その成立が『古事記』と共に、奈良朝の初めにあり、まだ假名といふものの無かつた時代に、漢字だけで書いたので、實際どう讀んだのか、又どう讀むべきかが、實は明らかにわからないのである。思ふに之れに對する後世の讀み方がいろ／＼に傳へられて居ると同じやうに、成立當時にも、のみならず編者自身もいろ／＼に讀んで、例へば「天神地祇」を、或時はテンシンチギと讀み、或時はアマツカミ、クニツカミと讀み、又「旌旗、鼓吹」を、或時はセイキ、クスキと讀み、或時はハタ、ツバミ、フエと讀み、また「飛廉」、「陽侯」を、或時はヒレン、ヤウヨウと讀み、或時はカゼノカミ、ウミノカミとも讀んだのであらう。こゝに引いた所も大部分その通りで、はつきりとはわからぬが、大體の言傳によつたものと心得ていたゞきたい。○親ら斧鉞を執りたまひ

「斧鉞は「をの」と「まさかり」、もと三軍統卒權の印として君王より將軍に賜はつたものであるが、それを王者たる皇后御自ら御執りになつたから、特に「親ら」と云つたのである。「親ら」は貴人御みづからといふ意。「自ら」とは違つて、それ自身敬語になつて居るので、手紙の封書の表書に「親覽」、「親展」など書くのは、皆貴人、長上に對して、御自身御披き下さいといふ意。目下への手紙に書くものでないことは、これでわかる。○三軍上軍、中軍、下軍の意、昔支那の軍法では、普通全軍を三分したところから云つたので、後世の全軍といふほどの意に用ゐられてゐる。○金鼓節なく……金鼓は軍隊に節制あらしめ、兼ねて勇氣をつける爲めの樂器。少し後に「鼓吹」（昔はクスギと讀んだ）とあるが、「吹」は口で吹く樂器で、ラツバ、笛、尺八などの凡てを云ふ。「金」は金屬製の樂器、「鼓」は獸皮で製した樂器である。この大意は鉦や太鼓の奏し方がめちやくで規律が無く、旗、差物が誰れのか、どの隊のか、味方のか、敵のか紛らしいやうでは、士卒の隊伍が亂れて、全軍節制を失ふであらうから、よく注意せよ。それから金銀財寶に目が眩み、自分の事ばかりを心に懸けて、振り返り振り返り氣を取られて居るやうでは、敵に乗せられて、或は殺され、或はつかまるであらうから、脇目もふらず、突進し、勇進せよ、といふのである。○奸暴奸は婦人に關する情慾の罪、暴

は兵士以外の敵國の士民、今の謂はゆる非戦闘員に亂暴すること。○まつらふ奉るの延音で歸服すること。○逃げば原文には「背走」と書いて「にげる」と讀ませてある。背の方へ走るので、即ち逃げるの意になるのである。○和魂、荒魂「にぎ」は荒の反對で、柔和の意。人には誰れにも柔和な靜かな優しい方面と、猛しい勇ましい、勇武、剛壯、奮激、突進的なる方面とがある。その如く神様も、この二種の魂を御備へ遊ばされたとして、吾等の先祖達はそのおやさしい方の御精神を和御魂といひ、お勇ましい方面のを荒御魂と云つた。そして人間の境遇の場合々々によつて、それ／＼の神の御魂の御加護、或は御乗り憑りを御願したものであつた。こゝは住吉明神の御託宣のことで、神様が、わが柔和な魂では、皇后の御身の御安泰をお守り申上げるであらう。猛しい方の魂では、日本軍の先鋒に立つて、彼等を導き、彼等に武勇の心を起こさせて、その武運の長久を謀るであらうと仰せられた。此の御託宣を聞かせられた神功皇后が、非常に御悦びになつて、早速御禮の拜禮を遊ばされ、また出陣から凱旋まで、軍中に在りながら、明神を齋き奉る神聖な神様奉仕の役人として、依網の垂見を御命じなされたといふのである。

開胎ウムガツキと讀む。ウミヅキ即ち臨月、産月を意味する古語で、またウミガツキとも云

つた。文字の「開胎」は胎児が母體を開いて生れ出づる意味である。○祈いのちひいのちイノルの古語。○招まねき、請まねぎまね「をく」はまねくの意。「ねぐ」はネガフの約で、願ねがひ請まねずるの意。どちらも神の來臨を願ふ意であるが、詞に變化あらしめようとて、別にしたのである。こゝに「王船」とあり、前に「王身」とあつたのは、王者御乗用の船、王者の御身體といふので、神功皇后を申し奉つたのである。○和わ瑠るの津つ對馬國上縣郡の港、鰐うの浦、鰐うの津ともいふ。○飛塵、陽侯やうこう前者は風の神、後者は海の神、共に支那の古事を踏まへたのである。今となつてはつまらぬ故事の引用のやうであるが、漢文を崇拜してゐた當時に於いては、作者得意の文飾であつたのであらう。○海の中の大魚たいぎよ悉しつにしつ「古事記」には「海原之魚、不問おほニ大小おほ一悉おほ負おほニ御船おほ而おほ渡おほ」とある。「記」の方は種類と數の豊富なることを主として書いたのであらう。之れに對して、「紀」の方は印象の鮮かさ、見た目の賑にぎかさを主としたので、二者それ／＼の味であるが、鰐うや鱒ますや秋刀魚あきづななどの小魚は略して、鯨くじら、鮫さま、鮪うなぎなどの大物だけを出した方が利くやうに思はれる。○大風順吹たいふうじゆんぷい「オホキナル風オヒカゼニ吹キテ」と讀んでゐるが、實に面白い。○帆船はんぱん「帆を掛け荷を積み込んだ」といふ形容詞だけを殘して、あとにつゞく「船」といふ語を省略した語。即ち兵士や荷物を滿載し、帆を孕ませた澤山の船が、櫓ろを勞せず、大魚に負は

れ、順風に導かれて、疾風のやうに進んだといふこと。「勞らうはらず」は苦勞なくの意。○隨船潮浪ずいせんしゆくろう遠く國の中に遠とほぶとほこゝを「古事記」には、故その御船の波瀾、新羅の國に押騰りて既に國の半まで到りき」と書いてある。これも面白いが、「紀」の「船に隨ふ潮浪」と書いてフナナミと讀ませたのも、なか／＼面白い。即ち船に隨したがつて來た浪が新羅の國の半分位迄滿ち溢れたといふのである。○天運盡きててんうんじんきてこゝを「世のかぎりつきて」と讀んだのもある。面白いけれども、どうであらうか。要するに、國の存在すべき命數が盡きて、もう滅びるのかといふ意である。○乃今醒めて曰はくなほいまさめていはくすぐに、ふつと目が覺めたやうに氣がついたといふこと。○豈に兵を擧げて距ぐべけむやとなほいまさめていはくよい覺悟である。ルーズゲルトやチャーチル等に此の覺悟がつかぬらしい。そして非理不正不義の嘘八百を捏造し言ひふらして神兵を讒誣しては抵抗しようとする、かたはら痛いことである。○素旆あげてすへいあげて降る者が白旗を擧げるのは、東洋に於いても大分古い仕來であつたと見える。○素組すくみ以面縛ももづ「白きつなして自らとらはる」と讀んである。「素組」は白い組紐を頸くびに繫かけて、首くびを縊くる決死の意志を表はしたので、「面縛」は手を後ろに縛り、面で乞降謝罪の意をあらはす意である。○圖籍ずてき國の表象としての地圖と戶籍。○叩頭くわつとう「のむ」は祈り願ふ意味の古語。○飼部かひべとなり、馬の梳く及び馬の鞭むちを獻らむかたげ臣從

するといふことの象徴的表現。即ち御家來となり、御馬の別當でもして御奉公致しますると、賤しきについて謙つて云つたので、その馬飼の詞の縁から、あらゆる貢物の代表的象徴として、馬の櫛と鞭とを献じますると云つた、舉隅的、兼誇張的譬喩の味である。○海の遠きに煩かず||海路の遠隔などいふことを更に苦勞と思はずといふ意。○男女の貢||學術工藝などに秀でた男女を差上げるといふこと。○東より出づる日||有るべからざる事の例を引いたので、東から出た太陽が再び西から出るといふやうな事は、先づしばらく差措いて、新羅第一の大河鴨綠江が逆まに流れ、河原の石ころが天に昇つて星と輝くことがあらばとにかく、さる事も無きに御約束の貢物を怠るに於いては、天地神明の殿しい御罰を蒙りますと云つて誓つたといふこと。「鴨綠江」は原文に「阿利那禮河」と書いてある。朱子の語にも「中國有三大水、曰黃河、曰長江、曰鴨綠江」とあつて、曾ては黃河、揚子江と相並んで天下の三大河と云はれたものであるといふ。「ア」は朝鮮語の鴨のこと、「リ」は綠色、「ナレ」は河、此の河の流れが鴨の頭のやうに緑で美しいからの唱へであると云はれる。「星辰」をアマツミカボシと讀ませであるが、ミカボシは御殿星の約で、天空にいかめしく燦爛と輝いてる星といふ義である。○不祥||めでたからず、よくないといふこと。○干岐を以て實とし||干岐は王族の義。

ムガハリは身代である。○繅絹||堅織の絹の義で、綾織などに對して平絹をいふ。

右で語釋がすんだので、左にざつと現代語譯を試みようと思ふ。

通譯 神託に従ひ、いよく新羅御親征の御決心がついたので、皇后御親ら斧鉞を執つて、統帥の權を握らせられ、三軍に令を下して仰しやるには、合圖の軍樂に節制がなく、旗差物が取り違へられることの無きやうに致せ。それでは士卒の心が散り亂れて軍容が整はぬであらうぞ。また金銀財寶に目をくれ、私事を顧みるやうでは、敵に乗せられて、討死や捕はれの憂目をも見るであらう。敵が少なくとも侮るな。敵が強くとも畏るゝな。婦女や良民に對する、たはげ、あばれの行爲は假借なく取締れ。進んで歸順する者を殺してはならぬぞ。戦ひぬいて勝つた者には、恩賞があるであらう。敵に後ろを見せる者は罪されるであらうと。その中に住吉明神の御託宣があつて、それは「わが和魂は皇后の御身を守護して御無事御安泰を計りませう。荒魂は先鋒となつて、御軍船の御案内を致します」といふのであつた。皇后は御出陣の門出に此の神託を得たことを悦ばせられて、拜禮して神恩を謝し、早速依網の垂見といふ者に明神奉齋の尊き役目を仰せつけられた。

時は丁度皇后に取つて御大切の御臨月に當たらせられた。皇后は即ち石を取り、御裳の腰に挿んで、「大事の遠征、事終はつて目出たく凱旋するであらう其の日を待つて、茲土で御生れ遊ばせ」と祈らせられたが、その石が今現に伊都の縣の道の邊に鎮座してある。皇后はやがて荒魂を招いて御軍の先鋒とし、和魂を請じて御座船の御守りと遊ばれた。

冬十月皇后はいよく對馬の鰐の津から御出發あそばされた。すると、天神地祇悉くの御助けがあつたのであらう。發たせられると同時に、風の神は風を起こし、海の神は浪を擧げる。そこへ海中の大魚が、鯛も、鮪も、海豚も、鯨も、鯨も、悉く浮かび出て来て、御軍船を負うた。同時に順風の大風が負ひ風に吹いて来て、大荷を積んだ帆掛船が、櫓櫓も使はずひた進みに進んで、やがて新羅の濱に着いた。同時に船に隨いて来た大浪が陸の上に衝きのぼつて、國の大半を水浸しにした。びつくりした新羅王は、唯だぶるくと顛へるばかりで、とかくの思案も浮かばず、早速群臣を集めて評議した。「わが新羅の建國以來、海水が國土に登り寄せたといふことは、未だ曾て聞かぬところである。これは、ひよつとすると、國の命数が盡きて國土が海となつて了つたのではなからうか」と、言ふか言はぬに、海一ばいの軍艦が、大旗小旗を日に輝かし、笛太鼓の聲山川を轟かして、目の前に現はれた。新羅王はこれを見て、「これは意外の大軍である。嗚

呼わが國はすぐに滅ぼされるであらう」と云つて、驚き怖れたが、夢の醒めたやうに、ふと思ひついたのは日本の事であつた。「聞けば東海に日本といふ神國があり、天皇と申す聖人の君王が其の國を治しめすといふことである。これは必ず其の國の神兵であらう。とても普通の軍立などで拒げることはない」と云つて、やがて白旗を揚げて、進んで歸順の意を表はし、白き組紐を頸に掛け、兩の腕を後手に縛り、地圖戸籍を整へ持ち、御座船の前に額づいて降參の儀を申し入れた。まづ叩頭をして言うたには、「今より以來、天地のあらん限り、日本の朝廷に臣事へて、御馬飼となり、春秋毎に、馬の梳鞭その他の貢物を献りませう。また遠き海路を厭ふことなく、年毎に、一藝に長じた男女を奉りませう。東に出づる日輪の、再び西より出づる事はしばらく措き、あの鴨緑の大河が逆まに流れ、河原の石礫が天空に昇つて、きら／＼と耀く星となる世の來ぬ中に、もし參朝の禮を缺き、梳鞭の貢物を怠ることがありましたならば、天神國地祇の殿しき御罰を蒙るで御座りませうと云つた。その時皇后の左右に、いつそ新羅王を誅してはと献策した者もあつたが、皇后は諾かせられなかつた。「われは初めに神の御教を承け、これに従つて、今目の前に寶の國を授からうとして居るのである。また已に全軍に令して、進んで歸順する者を殺す勿れと言つて居るではないか。財の國はもう手に入つて居る。又人が自ら進んで降つて居るの

に、之れを殺すといふ法はない」と仰せあつて、やがて其の縛を解いて御馬飼部の臣下とし、その後國府に入つて寶庫を封じ、地圖、戶籍、その他の重要文書を收めさせられた。そして大事完了の紀念として、その杖つかせられた矛をおごそかに新羅王の門に立てさせられた。その御矛が今も猶ほ新羅王の門に立つて居る。

右の現代語譯の後に、數行を追加して新羅併合が、どうして三韓併合となつたかを、同じく『日本紀』によつて語るであらう。さて高麗、百濟二國の王は、新羅が地圖戶籍を納めて日本に降つたといふ噂を聞いた。そして密かに物見を出して、日本の軍勢を窺はせたが、神兵の威容に感じて、とても勝てぬといふことを悟り、王等自ら陣營の外に来て降參を乞うた。そして叩頭して、憫みを乞うて、「今より以後、西蕃と稱へ、永く朝貢を絶やしません」と御誓ひして許された。これが謂はゆる三つのからくに、即ち「三韓」である。

かやうに原文を掲げ、現代語譯を載せて、さて反覆して讀んで見ると、その意氣、調子、威力

及び氣持よき進行の味はひが、いかにも今度の十二月八日十日の對米英戰爭の壯快無比なる序幕戦に似て居るやうに思はれる。海に向ひから遙かに熊襲の尻押をして、久しく我れを惱ました新羅である。その爲めに、我が將卒の惱まされたのみならず、畏れ多くも仲哀天皇までが、その爲めに不慮の御難にかゝらせられた新羅である。而して金銀彩色に富んで、富むがまゝに海に向ひにまで手を伸ばして、餘計な外交上のわざくれをした新羅である。而してその新羅が、皇軍一たび海を渡れば、周章狼狽してせむすべを知らず、素組面縛して降を乞うたのである。何と是れが數十年威張りくさつて横車を押しつけて來たアメリカ、イギリスが、皇國の海空陸三軍に急襲されて、眞珠灣、マレー沖に敗れ、手もなく假面を剝がれて、榮華の惡夢をさまされたのに似て居るではないか。

今度の快舉を思はせて更に面白いのは、神功皇后の御船出から新羅御着陸までの尊い神祕である。御出陣の間に住吉の御託宣があつて、「兵士等には必殺必勝の氣力を添へよう、聖體の御安泰は金輪際御護り申上げますといふお誓ひがある。早速明神に奉仕する神官を定めさせられる。やがて船が港を出ると、海中の大魚が擧つて浮いて來て舟を負ふ。そこへ神の氣息の大風が順風に吹いて來て、櫓を勞せずして、瞬くひまに、海を蔽うた鐵艦を對岸の半島に着

評論もむづかしいが、本文の本義を合理的に落ちつかせるのも、決して容易の事ではない。もし謂はゆる「本義」の中に、本文の面オモテに、背後に、傍らに、奥底に、浮動し、變遷し、搖曳して、あやを添へ、しなを興へ、隈を取り、力を成す趣味陰影までを加へるならば、本文解釋の困難は更に幾層倍するであらう。吾々は、空に冲るが如き雋鋭奇拔なる評論に見惚れた興味が、その本文の解釋を見るに及んで、春の洙雪の如く消え去るのに逢ふことが度々ある。流麗、明爽、雄健、洒脱、高致、逸響などと稱揚せられた文章が、實際は、佞屈、晦澁、弛緩、俗悪なるを見ること度々ある。支那の修辭學者は讀書上の重要な教訓として、讀むべき書と閱すべき書とを區別すべき事を説いた。「讀む」とは一字一句を漏らさずに辿つて微細に詮索究明するの意である。「閱する」とは一氣に誦み流して大意を看取るに止めるの謂ひである。私は新舊いづれの文學に對しても、物に應じて此の二つの差別待遇を施す必要があると思ふ。而して讀むべき文學に對しては語毎句毎に歩みをとめて、特に正しく詳しく本義を究明する必要があると思ふ。而してまた此の本義の詮索究明が、其の價値に於いて決して藝術的評論や、文化史的批評や、精神分析的

研究や、異本の系統調べや、發生開展の考察やに劣らぬものであると思ふ。

私は今『和泉式部日記』の本文に對して此の種の穿鑿を試みようとするのである。私が『和泉式部日記』を選んだのは、此の日記が理解し難いとされる王朝文學の中でも、特に理解し難きもの一つとされて居る爲め、最近までは殆んど全く解釋の手が加へられてゐなかつた爲め、最近に至り、わづかに手を加へられたものの、それに對してかなりの不満足を感じて居る爲めである。無論此の古典から一小部分を取り出でての試みには過ぎないが、之れによつて、多少なりとも此の日記及び他の王朝假名文學の本文の特色を暗示することが出来れば有難い仕合せである。

私は、本誌（綜合世界文學研究）に於いて斯様な試みをするのは、趣味本位の藝術講話會に於いて、事務會計の報告をするやうなものであるを事を知つて居る。知りながら、之れを試みるのは、以上の理由あるが爲めで、結果は定めて自己流の癖くせ々しい、見窄らしいものになるであらうが、好みを同じうする讀者諸子の一覽にあづかることが出来れば、近頃辱いことに思ふ。

二

私は直ちに本論に入る。『和泉式部日記』の冒頭の一節、最初の歌から二三行前のところに、左

の一節がある。

「参るや」と問はせ給ふ。「参り侍り」と申し侍りつれば、「これ参らせよ、いかゞ見たまふ」とて、橋の花を取り出でたれば、昔の人のといはれて、「みるまわりなむ、いかゞ聞こえさせむ」といへば、言葉に聞こえさせんもかたはら痛うて、何かは、あだ／＼しくも聞こえさせ給はぬに、はかなき事と思ひて、かゝる香によそふるよりは郭公きかばや同じ聲やまさると。

和泉式部は長保四年六月十三日を以て、愛人彈正宮爲尊親王の喪に逢つた。男二十五歳、女二十九歳の時である。翌五年四月十日過ぎの或る日、彼女は不意に、故宮に仕へた童の訪問を受けた。童は故親王の弟宮、二十三歳なる帥宮敦道親王の意をもたらし求愛の使に立つたので、宮は花を着けた橘の一枝を託し、之れを式部に手渡しして、其の心を問うて來いといはれたのであつた。此の一節は其の消息を現はしたので、大意は、

「宮様（帥宮、敦道親王）が、「お前は和泉の處へ行くかい？」と仰しやるんですよ。「ハイ参ります。」と、かう申上げますと、「では、之れを持つて行つて、和泉に渡ししておくれ。これを見て、どう思ひなされるかと云つてね。」と、かう仰しやつて、花のついた橘の一枝を御渡しになりました。これで御座います。」と云つて、取り出した。私は「昔の人の袖の香ぞするといふぢやないか。無論、故の宮様がたまらなく思はれるわ」といふと、「ではお暇して宮様へ参りませう。何と御返事を申上げませうか」といふので、口頭の御

挨拶も不しつけではあり、何構ふものか、宮様は別に浮氣な御方といふ噂も御ちりにならないのだから、つまらない腰折を御目に懸けても差支はあるまいと、かう思つて、「かゝる香に」の一首をしたゝめて、差出した。

と、かういふのであらう。誠に解りにくい文章で、委しくいへば全體に文句があるのであるが、目の前の問題は、點を打つた「いかゞ見たまふ」とて、橘の花を取り出でたれば」のところ、ことを與謝野晶子さんの新譯には、

「この花を帥の宮様へ差上げてね、どう思召すかを伺つて来て下さいな。」和泉は一枝の橘の花を意に渡した。

と譯してゐる。文脈からは、いかさまさうも取られさうであるが、これでは事實の主客が顛倒するので、たしかにさういふ意味ではあるまい。京都の王朝文學叢書には、

「これをさし上げて、どう思召すか伺つて來い、との仰せでございました。」と言つて、橘の花を出した。と譯してあり、竹野長次氏の新釋には、

「これを差上げる、先方ではどう御覽になるか、その様子を伺つてお出で。」かう仰つしやいました。童はかう言つて橘を取出した。

と書いてある。事實はいかにも、後の二譯の通りであらうが、しかしながら原文の

これ參らせよ、いかゞ見給ふとて、橘の花を取り出でたれば、
 が、そのまゝでは、いかにしても後の二譯のやうな意味には取られまいと思ふ。私もこの後の二
 つとほゞ同じ意味に譯したのであるが、これが本義だとすると、本文に如何なる解釋を施す事
 よつて、之れを合理化することが出来るであらうか。言ひ換へれば、如何なる道理の根據を與へ
 ることによつて、此の解釋を正當と見ることが出来るであらうか。私はこれは必ず、筆者が、隣
 接した行の同じ文字を書き落したので、謂はゆるハプログラフィ (haplography)、「隣接同語の紛
 れ移り」とでも譯すべきか)の結果であらうと思ふ。察するに、原文は大體次ぎのやうな句並び
 で、またこのやうな字並びであつたのであらう。

いかゞ見給ふとて、取らせ

たまへるとて、橘の花を取

り出でたれば、……

か、或は

いかゞ見たまふとて、橘の

花を取らせたまへるとて、

取り出でたれば、……

か、恐らく此の二案のうちの内づれかで、決なく、「とて」より「とて」に目移りがして、中間の
 「取らせ給へる」を書き落したのか、或は「取」から「取」に飛んで、中間の「らせ給へるとて」
 を書き落したのかであらう。而して此の中間の一句が失はれた爲めに、動作の所屬があちこちに
 解されるやうになつたのであらう。異本にこの「これ參らせよ、いかゞ見給ふ」を、「これもて
 參りて、いかゞ見給ふとて奉らせよ」としたのがあり、また「橘の花」をたゞ「橘」としたのも
 あるが、大體の關係には少しの變化もない。また「みる參りなむ」を「みに參りなむ」とし、或
 は唯だ「參りなむ」とした異本もあるが、無ければそれだけ、もしあれば「みる」「みに」は、多
 分「さば」の寫しちがひで、「さらば」の意であらうと愚考する。

【附言】 此の小論を草したのは、昭和六年の十月であつたが、その翌々昭和八年になつて、
 岩波書店發行の雑誌『文學』が、その附録として、十月號及び十一月號にわたり、三條西家
 所藏の『異本和泉式部日記』の本文全部を掲載した。そして其の異本には、この部分が左の
 通りになつてゐる。

常に參るやと問はせおはしまして、參り侍りと申し候ひつれば、これもてまゐりて、いかゞ見給ふとて、
 たてまつらせよと、のたまはせづるとて、橘の花を取り出でたれば……

これが恐らく原文であらう、これならば、立派に辻褄が合つて居り、そしてさすがに愚按よりは自然で優つて居る。要するに、流布の諸本は「と」から「と」に飛び移つて、大切な中間の「のたまはせつる」を書き落したのであつた。

三

少し進んで、第四番目の歌にかういふのがある。
今日のまの心にかへて思ひやれながめつゝのみ過ぐす月日を。

橘の御便りがあつた翌日、宮から「うち出でもありにしものをなか／＼に苦しきまでも歎く今日かな。」といふ歌を贈られたのに對する、式部からの返歌であるが、これを京都本には、今日のお心に較べて、わたしの思ひをお察し下さいませ。わたしは此の月日物思ひに沈んでばかり暮らして來ました。

と解釋してあり、竹野氏には、

「苦しきまでも歎く今日かな」と仰つしやつた、その今日の間の宮様の御心にくらべて推量して下さい、物思ひに沈んでばかり月日を送つてゐる私の心を。

と註してあるが、おそらくさういふ事ではあるまい、又それだけの事ではあるまいと思ふ。この

「今日の間」は、多分、

君は昨日から御たよりを下さり始めて、まだ唯だの一日ではありませんか。その今日、一日の間の待遠しさ苦しさに比べて、此の一年の長い間、故宮様を偲び奉つてゐる私のつらさを察して下さい。

といふのであらう。

又二三枚進んだ處に、

いふかひなき事どもを契り給ひて、明けぬれば、(帥宮)歸り給ひぬ。「今の間いかゞと、怪しくこそ」とて、戀といへば世のつねのとや思ふらん今朝の心はたくひだになし。

といふ一鎖がある。宮が始めて式部を訪うて歸られた朝の、謂はゆる後朝の文であるが、この散文の部分、與謝野さんには、

今あなたはどう思つて居る。私は感傷的な不思議な気分になつて居る。

と譯してあり、京都本には、

今あなたは、どう思つてゐます。私は不思議なまでに、あなたの事が思はれてならない。

と譯してあり、そして竹野氏には、

さい、當つての現在、どうして居られる事かと、奇態に氣にかゝる。

と註してある。委しく批評する餘裕を持たぬが、おそらくさういふ意味ではあるまい、少なくとも

も是れだけの意味ではないのであらう。これは恐らく、
今別れて来てゐながら、その今、の間に、もう堪らなく戀しくなるとは、どうしたことかと、自分で自分の心が怪しまれるのです。

又暫らくして、半ば以上進んだ處に、

(宮は)殊に頼もしき人もなきなんぬりかしと、心苦しう覺えて、「今の間いかゞ。」と宣はせたる返事。
今朝の間に今はひぬらむ夢ばかりぬると見えつる手枕の袖。

といふ一節がある。こゝを與謝野さんのは、

宮から今朝の気分はどうかと、直ぐ尋ねておよこしになつた、その御返事を和泉は……

と譯してある。京都本には、

「今朝の気分はいかゞ。」と、早速宮から尋ねてお遣しになつた。

「暫しの間あなたのお情を享けて寝ましたから、いつも涙にぬれてゐた手枕の袖が、今朝は乾いて居ります」と、式部はお返事申し上げた。

と譯してあり、而して竹野氏には、

「さしあつての現在は、どうしていらつしやるか。「今の間」はさしあつた意と、もう暫の間の意とある。

と註してある。けれども、作者式部の本意は、従つて此の文章自體の本義は、恐らく此の三者のいづれでもあるまい。これは多分次ぎのやうな意味であらう。

宮は、式部の今の様子を見ると、彼女には特に頼みになる人なども無いと見えると、氣の毒に思召されて、お歸りになるとやがて、「今別かれて来たばかりだのに、私はもう堪らなく戀しいのだ。君は此の今の間をどんな心で過ぐして居られるぞ。」と仰しやつて下さつた。その御返事に、彼女は

「……など、うまい事を仰しやるが、今別かれたといふ今の間に、もう乾いて了つたことでせうよ、ホンの一寸寝たばかり、ホンの一寸濡れたと、それもたゞ見えたばかりの、君の手枕の御袖は！」と申上げた。

一體此の時代に用ゐられた「今の間」「今日の間」「今朝の間」といふ形式の語は、王朝時代の戀する男女の特別な心境を現はす特別な陰かげを持つてゐたので、それは今別かれて来たばかりの、その今の間に、もう堪らなく戀しいといふのであつた。讀者は『源氏物語』の夕顔の巻に、

かゝる筋は、まめ人の亂るゝ折もあるを、いと目やすくしづめ給ひて、人のとがめ聞こゆべき振舞はし給はさりつるを、怪しきまで今朝のほど晝間の隔ても覺束なくなど、思ひ煩はれ給へば、かつはいと物狂ほし……といふ一節のあるのを記憶せられるであらう。これは「源氏が、今迄の戀關係は、ちつと休へて、

人目につくやうな振舞はされなかつたが、その我慢強い源氏が、今度の夕顔に對してのみは、自分ながら變だと思ふ位、今朝別かれて来たばかりの、その今朝の間、暮るればやがて逢はれるといふ、其の晝の間の隔てまでが、待ち遠しくヤキモキするので……といふ意味であるが、和泉の「今の間」「今朝の間」「今日の間」も、全くこれと同じ意味で、戀に活き、戀に遊び、戀に死ぬる王朝人が、愛人に離れた一刻を千秋と見做した特別心境を象徴する意味深き語であつたのである。

四

私は次に詞や、引用文などの切り方、つけ方の味はひの微妙なる事について一言したいと思ふ。符牒でいふと、詞の符號なるク、ー、テ、ー、シ、ン、・、マ、ー、ク、^レ、^レ、^レ、^レ、^レ等の切り方が、文章の意義や趣味の上に多大の影響を及ぼすといふのであるが、私は平生、句點も、讀點も、「^レ」も、「^レ」も、コムマも、ピリオドも、!も、?も、のみならず濁音符や別行法すらも無い同様であつた王朝文の解釋には、此の點に關し餘程特別の注意を要すると考へて居るのである。

此の日記の冒頭から二三枚進んだあたりで、宮が始めて式部を訪はれた處である。宮は初め妻戸の外に圓座えんざを敷いて案内されたが、月の光のまぶしいのかこつけて、式部の居る室の内に入らうとなされた。そこを、本文には、かう書いて居る。

西の妻戸に圓座えんざさし出でて、入れ奉るに、世の人のいへばおぼゆるにやあらむ。まことになべての御様にはあらず、いとなまめかし。これも心づかひせられて、物など聞てゆる程に、月さし出でぬ。「いとあかし、古めかしう奥まりたる身なれば、かゝる所などに居ならぬを、いとはしたなき心地もするかな。そのおはすらむ所にすゑたまへ……」

要點は、宮の詞を「古めかしう」からにするか、或は、一句手前の「いとあかし」からにするかといふ所にあるが、私が見た十幾種の活字本は、悉く「いとあかし」を地の文として、「古めかしう」からを詞として居る。そして例へば、與謝野さんには、その前後を、かう譯して居る。

話の長く續いて居るうちに月が上つた。あたりが眩い程明るくなつた。
「私のやうな無勢力な、蔭の者のやうな人間は、こんな場所に居ることが晴れがましくてならない。室内に入れて貰へないでせうか……」

京都本には、
物越しにゐる身も、何となう氣が引けるやうな感じで、お話を承つてゐる間に、月があらはれた。あたりが眩い位に明るく。

「私のやうな舊式で内氣な人間は、こんな所に坐つた経験もなく、何もなく落付かない感じがします。室内へ入れて貰へないでせうか。……」
とある。竹野氏のも大體此の通りであるが、私は前後の調子から推して、こゝはどうしても「いとあかし」からが、宮の詞になるべき所であると思ふ。それは一つは、月の明るいのを口實にして、室の内へ入らうといふ巧みの詞だからで、一つは此の一句をきつかけにして、文の勢を成さうといふ所だからである。此の前後は恐らく、かういふ調子のところであらう。

……其の異性の心を惹きつける美しさと言つたら、並大抵のものではない。これも一つ心配の種となつて、はにかみく御話の御相手をして居る中に、やがて月がさし上つて來た。すると宮は、「……これは眩しい！ 私は時代後れの、座敷の奥に引込んでゐる身だから、かういふ月のさし込む端近な所などには居たことが無いのだが……。どうも極りが悪くて困る。そのあなたの居られる處へ坐らして下さいな。」
文法や事實の上からは、どう取つても差支のない所ではあるが、私は前後のかゝりや趣味の上から見て、どうしても「いとあかし」を、宮の詞の發語にしなければならぬ所だと思ふのである。

幾枚か進んで、宮が始めて夜更に式部を連れ出して、密かに我が邸内の一棟に誘はれたところ

に、かういふ一鎖がある。

車をさし寄せ給ひて、たゞ乗せに寄せ給へば、我れにもあらず乗りても、人もこそ聞けと思ふく行けば、いたう夜も更けにければ、知る人もなし。やをら人もなき廊のあるにさし寄せて、下りさせ給ひぬ。「月もいと明ければ、「下りぬ」と忍びて宣へば、あさましきやうなれば下りぬ。

問題は「月も」からを宮の詞とすべきか、「月もいと明ければ」を地にして、「下りぬ」だけを詞とすべきかといふ點であるが、在來の諸本は、私の見た限りでは、悉く「月もいと明ければ下りぬ」の全體を宮の詞として居る。與謝野さんにはかうある。

兩側の部屋部屋に人の住んで居ない廊へ、わざと宮は車をお附けさせになつた。

「月が明るくて危いことなんかは無いからお降りよ。」

と宮がお言ひになつたので、和泉は我れと我がすることを腑に落ちないやうに思ひながら、車から降りた。京都本にはかうある。

宮家の門内でも、誰れ一人咎める者は無かつた。靜かに人氣もない廊下へ車を寄せさせて、宮は先づ御降りになつた。

月も大變明るいからお降りよ。

と宮がお言ひになつたので、式部はわれと我が仕業に呆れながら車を降りた。

「月もいと明ければ」といふのは、「明るくつて危くないから」といふことか、「明るくつて人目につくとよくないから」といふことか、いづれにしても、或る理窟はつくであらうが、私はやはり、どうしても「月もいと明ければ」を地と見て、「下りね」だけを宮の詞にしたいと思ふ。察するに是れは最後の「下りぬ」に對して、初めに三つの理由を列擧したので、(一)唯ださへ恥かしくて、あたりが憚られる處へ、月迄がひどく明るいで、(二)そこへ宮様が忍び聲で「サア早く下りなさい」と仰しやるし、(三)ほんとにぐづ／＼してゐるのも見つともないから、そこで下りたといふのであらう。私は殊に「月も」の「も」が、唯ださへ恥かしい處へ月も、ひどく明るいので」といふ意味を利かせたので、此の一字が此の一句の地の文たることを證據立てゝゐるやうに思ふ。即ち大體の意味は、

誰れもゐない廊がある、そこへ車を寄せさせて、御自身が先づ御下りになつた。と見ると、唯ださへあたりが憚られる處へ、月までが明皎々と照らしてゐる。そこへ宮様が「サア早く下りなさい」と仰しやるし、このまゝかうしてゐるのも見つともないので、下りた。

と、かういふのであらう。尙ほ「あさましきやうなれば」は、應永本に「さまあしきやうなれば」とある。これはやはり「さまあしき」で、「見つともない」、「ザマでない」の意であらう。

五

この日記の中には、多人數の交互に言ひ合ふ詞を、何氣なく書きつゞけたのがあつたやうに見える。そしてそれを意義の連絡した一人の詞として見る爲めに、無理が出来、面白くもなくなるのがあるやうに思はれる。最後に近い部分で、式部がいよ／＼宮家に引き取られて、世間の陰口を想像してゐるところに、かういふ一節がある。

さりぬべき人々ゐて行く。例の所にはあらで、いとよくして、忍びて人ども具して居よとせられたり。さればよと思ひて、何ごとかは、わざとしたてむ。いかでかは参らまし、いつまゐりしぞと、なか／＼人も思へかしと思ひて、明けぬれば櫛の箱など取りにやる。

問題は「何事かは」以下「人も思へかし」までが、一人の詞か、或は數人の詞かといふにある。とにかく頗るわかりにくい文章であるが、與謝野さんには、簡單化してかう譯してある。

和泉は斯うして迎へられたことを結句幸であると思つて、仕度などをこと／＼しくして参ることも、人に反感を起させることであるから、何時來たのかと却てその方で人に驚かれることになるのがいと喜んだ。翌日は櫛の箱などをそつと自宅へ取りにやつた。

京都本には、かう譯してある。

いつもは、かうした仰せは無いのであるから、若しや此のまゝお傍へ置かれるのではないか、と式部は思つた。そして侍女の一人に同行を命じた。行つた處は以前泊つた御殿でないが、設備が餘程調つてゐて、侍女の幾人かを置いて靜に住むのに差支が無いやうにしてあつた。やはり其のお積りであつたのだ。態々大層な支度などする必要も無く、どうして参らうかと心配する事もいらす、何時來たのかと、却つて人に驚かれる事になつて都合が好かつた、と彼女は思つた。翌朝、櫛の箱などを自宅へ取りに遣つた。

竹野氏には、かう書いてある。

式部は「果して豫想通りであつた」と考へた。「此處に参つたからとて、何も殊更美しく飾り立てる必要もない」とも考へた。また「宮の常御出でになる御座所までは上れはしない。それに何時参つたのかと、却つて人も吃驚するだらう」なども考へた。夜が明けたから、櫛笥などを家に取りにやつた。

本文が随分やゝこしく入り組んで居り、それに文句の所屬が不明で、我が事にも人の事にも、彼れの事にも是れの事にも、取れば取られさうに出來てゐる。私は以上の三譯文のいづれが是で、いづれが非であるかを知らない。唯だ私自身の意見を率直に述べると、「何ごとかは」から「いつ参りしぞ」までは、式部が俄に宮家に引取られた事に對する世間の噂を想像したので、幾人かの陰口を列擧したのであらう。又更に細かい勝手な想像を許されるならば、甲乙丙丁四人の詞を、のべつに書きつゞけたのであらう。第一の「何事かは」は「何事かは起これる」の略で、一人の

女が、

何だ／＼？ 何事が出來たんだ？

と尋ねたのであらう。第二の「わざと仕立てむ」は「何だ、和泉が宮家へ行つた？ そんな馬鹿な事があるものか。宮家へ行くなら、わざと仕立て、（仕立てるは供揃行列などを取揃へる事）大びらに乗込むサ！」といふので、

行くなら、わざと仕立てて、堂々と乗り込まうよ。

と、反對の意見を挿んだといふのであらう。第三の「いかでかは参らまし」は、

あの女、どうして行くもんか！

と、第二への合鍵を打つたのであらう。最後の第四は、宮家への参入が、いよ／＼争へなくなつたので、

何、行つたつて？ では、何時行つたんだい？

と云つたのであらう。私は文句の切れ目／＼の味、テニヲハの働き、撮要の面白さ、漸層の呼吸などから考へて、どうしても斯うだと思ふのであるが、敷衍して譯して見ると、かういふ趣なのであらう。

和泉は仰せに從つて、然るべき腰許達を連れてお供した。さて宮家に着いて見ると、いつもの所ではなく、立派な室がきれいに整へられてある。そして宮様は「窮窟だらうが、暫らく我慢して、女達と一しよに居て下さい」と仰しつた。女は豫期の通りだと思つて、かうなつたら魂を据ゑるのだ。世間ではいろ／＼と自分の噂をして居るであらう。例へば、

甲「何事が出来たんだい？」

乙「嘘をいへ。行くなら、わざと仕立て、堂々と乗り込むさ。」

丙「行く筈はないよ。行くもんか！」

丁「いよ／＼だつて？ ぢやあ、何時行つたんだい？」

などいふであらう。月並な噂をされるよりは、却つて吃驚して、いろ／＼氣を廻すのを見る方が面白いなどと思ふやうになり、いよ／＼永住と度胸をすゑて、明けると、家の方へ櫛笥などを取りに遣つた。

といふ意味であらう。私はかう考へて、バンクチューエーション皆無の世に於いて、この女さすがに味をやつたものと愛でて居るのである。

更に最後に近い部分になつて、宮の北の方が式部の闖入に興奮され、いよ／＼御里歸りの覺悟を極めて、手廻り道具の取片つけなどに着手される。居合はせた侍女達が、その傍で悪口憎言の

限りを盡くして焼きつける所を、本文にかう書いてゐる。

さるべき物など取りしたゝめ給ひて、むづかしき所など、取り拂はせ給ふ。「しばし彼處にあらむ。かくてあれば、味氣なく此方にもえさし出で給はぬも、苦しう覺え給ふらむに。」と宣ふに、人々「いで様あしきや。世の中の人のあさみ聞こえさすることよ。参りけるも、おはしましてこそは迎へさせおはしませぬ。すべて、いと目もあやにこそ侍るなれ。かの局に侍るなるべし。晝も三度四度おはしますなり。いとよし、暫し懸らし聞こえ給へ。あまり物聞こえさせおはしませぬ。など、憎みあへるに、御心にもいとむづかしう思しめす。

要點は「いでさまあしきや」以下「おはしませぬ」までで、之れを連続した一人の詞と見るべきか、ちぎれ／＼な數人の詞の列記と見るべきかといふのであるが、こゝを興謝野さんには、かう譯してある。

夫人は家を出て行く仕度を初めた。留守の間に見苦しく思はれるやうな處も皆よく整理させた。

「私は暫らく姉さんの處へ行つて來よう。かうして暮して居ることは、私にも辛いことだし、宮様にしても私が居るとお思ひになると、この御殿の方へ出にくく思召すのもお氣の毒だから。」

と夫人は侍女に云つて居た。

「眞實に人の口の上る種ばかりをお作り遊ばす宮様で御座いますね。あの女が初めて参りました時も、宮様

がわざ／＼御自身でお迎へにおいで遊ばしたさうで御座いますよ。この頃は晝間もあの女の部屋へ三度四度とおいでになるさうで御座います。あなた様が女御様の方へおいで遊ばすのはお宜しいことで御座いますよ。なるべくもう宮様へお話をなさいませすにおいで遊ばしませ。

などと侍女の一人は云つた。皆これに劣らないことを思つて和泉を憎んで居るのである。

京都本には侍女の憎言の部分を、かう譯してある。

「眞實に世間の人の悪口の種ばかりお作り遊ばす宮様でございますね。あの女が参りました時も、宮様が御自身でお迎へにおいで遊ばしたのですつて。眞實に見てゐられた様子ではございませんよ。あの御殿に居るのでございませう。此の頃は晝間でも三度も四度も御いでになるさうで御座います。奥様が女御様の處へ御いで遊ばすのは、およろしい事でございませす。ちと懲らして御あげ遊ばせ。あまり宮様へ物を仰つしやらない方がよろしうございませすよ。」

などと、侍女達は皆女を憎み切つてゐるので、宮はそれを耳にせられては、非常に不愉快にお思ひになつた。竹野氏のもほゞ之れと同様である。かう見わたすと、初めの一つは此の長い憎言を侍女の一人の詞と見、後の二つは侍女達の詞と見るといふ相違はありながら、全部を一つの連續したる言立と見るのは三者に通じて同一であるが、私は之れを連續せざる數人の憎言を列記したものでなければならぬと思ひ、又もし許されるならば六人の突發的憎言を、然るべく、面白く、撮要して、順

序立てしたものであると思ふ。委しくいへば第一侍女の詞は「いでさま悪しきや。世の中の人のあさみ聞こえさすることよ。」で、その意味は、

一。ほんとに人目のわるい事ですね。世間の人がお下げすみ申して居る事と云つたら、ありませんよ。

といふことであらう。第二侍女の詞は「参りけるも、おはしましてこそは迎へさせおはしましけれ。」で、意味は

二。彼女が参つたのも、御自身お出かけの上に御迎へなすつたといふではありませんか。

といふのであらう。第三侍女の詞は「すべて目もあやにこそ侍るなれ。」で、

三。一から十まで目ざはりな事だらけで、とても見ては居られません。

といふのであらう。第四侍女の詞は「かの局に侍るなるべし。晝も三度四度おはしますなり。で、譯すれば、

四。あのお室に居くさるんでせう。あそこへ宮様が夜は勿論、晝間でさへ、三度も四度も入らつしやるんですわ。

といふことであらう。第五侍女の詞は「しばし懲らしきこえ給へ」で、

五。えい／＼、結構ですとも。暫らくさうして、油を取つて御あげなさいよ。

といふこと。而して残れる最後の第六侍女の詞の「あまり物きこえさせおはしませず。」は、
六、向うへ入らしつても、あんまりお便りなどなさるんでは御座いませんよ。
といふ事であらう。即ち前からつゞけて譯すると、

北の方は姉君の女御様に御迎への車を乞はれて、携へ行くべき品々の御用意があり、また立つた跡を濁さじとて、むさくろしい處々を取り片つけなされた。そして侍女達に、

「暫らくお姉様の處へ行つて居ることにしませう。このまゝ此處にゐては、私も堪らず、又宮も私が居るのに、その妻の居る室へ出かけられぬといふのも、御心苦しいでせうからね。」

と云はれると、侍女達も口々に、

甲「ほんとに人目のわるいことで御座いますわ。世間の人が、好い笑ひ草にして、陰口を申して居ると云つたら、ありませんよ。」

乙「和泉が上つたのも、御自身御出かけなすつて、御迎へなすつたといふではありませんか。」

丙「一から十まで見て居られぬ事だらけですわ。」

丁「あの御室に居るんでせう。晝間でさへ三度も四度も入らつしやるといふんですからね。」

戊「えゝゝゝ、結構ですとも。暫らく置いてけ堀にして、目に物を見せて御あけなさいまし。」

己「それに向うへ入らしても、あんまりお便りなど、なさるんぢやありませんよ。」

と、女憎さに口々に言ひ合ふと、北の方も忌々しく、御心がむしやくしやなさるのであつた。

といふ事になるのである。思ふに詞の前後に「人々——にくみ合へるに」とある地の文は、作者の此の意圖を暗示して居るのであらう。もとより理窟は如何やうにも附け得るので、絶對的確證は出来ぬけれども、意義文脈の順路に續かずして、附くが如く離るゝが如きところ、句毎に終止切れになつてゐて、しかも句尾に感投、驚異、嗤笑、願望の變化のある趣などを見ると、數人の離れ／＼な突發的惡口の列記と見るのが、最も自然で、合理的で、又趣味的であると考へる。

とにかく私は、句讀の標識、バンクチュエーションの殆んど無かつた時代に出来た、べた續けの古典を読む場合に、作者の本意を付度して、作者自身がさう讀んだであらうやうに、自然に句讀を切ることに、殊に詞の切れ目、境目の標識「しゝゝ」を正しく附ける事が、古典本具の意義を確め、趣味を汲み取る上において非常に大切な事と思ふのであるが、序に世間周知の他の古典から、一つの例を引いて、此の論に對する裏書の一つにしたいと思ふ。「土佐日記」の終はりに近い二月五日の條に、恐らく「土佐日記」の中で最も秀でた名文と思はれる左の一節がある。

かくいひて、眺めつゞくる間に、ゆくりなく風吹きて、漕げども漕げども、後へ退きにしぞきて、ほと／＼

しくうちはめつべし。楫取のいはく、この住吉の明神は、いはいの神ぞかし。ほしき物ぞおはすらん。とは今めくものか。さて幣を奉り給へ。」といふ。いふに従ひて、幣たいまつる。かく奉れども、もはら風やまで、いや吹きに、いや立ちに、風浪の危ければ、楫取またいはく、幣には御心のいかねば、御船もゆかぬなり。なほうれしと思ひたぶべき物たいまつりたべといふ。また言ふに従ひて、いかゞはせむとて、眼もこそ二つあれ、唯だ一つある鏡をたいまつるとて、海にうちはめつれば、くち惜し。

大意は、やうやく好き日の風間を待ちつけて、濱邊なる松原の景色などに見とれつゝ、住吉のあたりを漕ぎ行くほどに、不意に浪風が立つて、今にも沈みさうになつて來た。楫取が「此處の明神様は、例の物がほしくなると浪風を立て、船を威して供物をはたるといふ、恐ろしい靈の神様ですよ。幣でも奉納なされ。」といふ。で、すぐに幣を奉つたが、さつぱり利目がなく、一倍と浪風が荒くなるので、また楫取の勧めに従つて、今度は眼よりも大事な鏡を投げ込むと、現金に浪風が鎮まつた。といふのであるが、問題は「この住吉の明神は」から「さて幣を奉り給へ」迄で、尙ほ限つていふと、「とは今めくものか扱」を地の文と見るべきか、詞と見るべきかといふことである。而して在來の註譯家、口語譯家は、悉く之れを地の文と見て、例へば

楫取がいふには「この住吉の明神は、いつもよくある事で、欲しいものがあると、風波をおこして船を遮りとどめられる神である。今もかく海が荒れるのは、この神のほしがりなざる物がおありなざるのでせう。」と

いつたが、して見ると、神も當世の慾深い人情に似て、物を欲しがりなざると見えるわい。さて「幣をおあげなさいませ。」といふ楫取の言葉に従つて幣を奉つた。(吉川秀雄氏の評釋による)。

といふ風に解釋してゐるが、私は之れを詞と見て、こゝに三個のクォーテーションが、掛合式に並べられたのだと思つて居る。思ふに是れは謠曲ならば「ロンギ」、歌舞伎ならば「わたり臺詞」ともいふべきもので、主格抜きにして、手短に問答を掛合はしたのであらう。委しくいへば、第一のクォーテーションは楫取の詞の「ほしき物おはすらん」迄で、「こゝの住吉様は、ソレ例の物がほしくなると浪風を立て、舟をゆするといふ恐ろしい靈神でいらつしやいますぜ。これは屹度何か欲しい物がおありなのでせう。」といふ意味である。第二のクォーテーションは「とは今めくものか!」で、楫取を受けた貫之の詞、たとへば舊劇の渡り臺詞の受詞によくある「トハまた何故に」といふやうな味で、「トハ、また當世風に食りなざるものだね」といふ臺詞であらう。「ものか」は「ものかな」の意である。それから第三のクォーテーションは「さて幣を奉り給へ」の船頭の詞、「今めくものか」を毛抜き合はせに受けた早業の妙臺詞で、「エ、だから御幣を御上げなさいと云ふんですよ。」といふ意であらう。つゞけて譯して見ると、まづかうで、

不意に疾風が吹き起こつて、漕いでもく舟はうしろに退くばかり、すんでのこと、波間にのめり込まうと

する。と、船頭がいふのに、

「この明神様は、例のソレ、欲しい物があると、浪風を立て、舟をゆする、えれい神様ですぜ。こりや吃度何か欲しい物がおありなさるのでせう。」

「とは又神様も、當世風にほりなさるんだな。」

「だから申すので、すぐ御幣を御上げなさいまし。」

といふ。云ふがまゝに、早速御幣を差上げた。

云はゞ、パンクチー、イーション皆無の時代に於いて、べた續けの字組みの間に、對話曲折の妙味を含めたもの、芝居、演劇といふものの無い時代に於いて、叙事的散文の間に戯曲的の味を見せたもので、私は『土佐日記』の中に散見する此の種の曲味を見て、此の老爺が鳥羽僧正が繪筆のユーモアを、素白の文字の間に見せて居ることを感じて居るのである。

六

今度は少し非難の氣味であるが、折々妥當性を缺いた文句を見る残念さについて一言して見たと思ふ。妥當性を缺くとは、例へば春を書いて春らしくなく、秋を書いて秋らしくなく、晝の事として書いた事が晝らしく思はれず、夜の事として書いた事が夜らしく思はれぬといやうなこ

とで、これは王朝文學に於ける通有の缺點ともいほうか、私は『源氏物語』などに於いても、しばしば之れを見出だして嘆惜の情を感じて居るものである。

和泉式部日記の凡そ三分の一ぱり進んだ所に、

九月十日餘りばかりの有明の月に、御目さまして、いみじく久しうもなりにけるかな。

といふ一章がある。此の一章の大意は、宮はこの有明月にそゝのかされて、式部を御訪ねなされたが、幾ら叩かせても起きないので、待ちくたびれて御歸りになつた。そして歸るとすぐに、

秋の夜の有明の月の入るまでにやすらひかねて歸りにしかな。

といふ即興の御便りを寄せられた。此の夜式部は目を覺まして物思ひに耽つてゐたので、戸を叩く音をも聞いてゐるが、家人が隙取つて開けぬ中に御歸りになつたのであつた。それから、そのまま起き出でて、此の曉起きの心境を一種の感想文に纏めたのであつたが、丁度書き終はつた所へ、宮から前の御たよりがあつたので、咄嗟の思ひつきに、その書き了はつた感想文の草稿を、其のまゝ封じて御返事にかへた。

といふ一章で、難解ながら此の日記の中の第一の読みどころ、また數多き王朝文學の中でも屈指の一部に推さるべき所であるが、問題は先づ此の初めの「十日あまりばかり」である。十日餘

りといへば、いづれは十日過ぎ十五日以前であらう、十五日を過ぎては、もう「十日あまり」とは云はれまいと思はれるが、十日あまり頃には有明の月が無いといふことである。「有明の月」はいふ迄もなく月が有りながら夜が明けれること、夜が明けて後に月の影の見えてゐる事であるが、二三年前の暦を見ると、陰暦九月十一日の月の出沒は

月出 午後二時二十六分
月没 午前零時四十二分

になつてゐる。無論十二日、十三日と望月に近づくに従つて、段々出沒の時刻は後れて行くが、いづれにしても十五日前に有明月のあらう筈がない。で、恐らく是れは二十日餘りの誤りであらうと思はれるが、とにかく此の作者にはⅡのみならず王朝の作者の多くにもⅡかういふ觀念の空疎な嫌ひがある。此の章の末段、大例の手紙にかへた感想文の終はりの部分に、

妻戸押しあくれば、大空に西に傾きたる月の影、遠く澄みわたりて見ゆるに、霧りわたりたる空の氣色、鐘の音、鳥の聲、一つに響きあひて、更に過ぎにし方、今行末の事ども、かゝる折はあらじと、袖の色さへ哀れに珍らかなり。

といふ一節があるが、吾等は、遠く澄み渡りたる月影と、霧りわたりたる空とを、いかにして合

理的に共在さすべできあらうか。しかも、双方に「わたる」とあつて、「わたる」は端から端まで全部同一の現象に満たさるゝ意味であるのを、どうしようか。この處、應永本には「大空に西に傾きたる月影細うすみて見ゆるに」とあるが、細い月影が澄んで見えては、「霧りわたりたる空」との對照が更に不合理になるであらう。また月の細いことは、いよくその夜の二十日過ぎなることを證據だてるであらう。無論王朝文學の抽象美は特殊の秀でた美であるが、私は此の朝の代表作家達に、かういふ方面について、もう少し目をあいて貰ひたかつたと思ふ。

私は前にはからず『源氏物語』に言ひ及んだが、序にあの物語から、類似の一事項を擧げて見たい。須磨の卷の初め、源氏が門出の少し前、左大臣を訪ねて名残を惜しみ、一夜を明かして歸るさの情景を寫した處に、

明けぬれば夜深う出で給ふに、有明の月いとをかしう、花の木どもやう／＼盛り過ぎて、わづかなる木蔭のいと面白き庭に、薄く霧りわたりたる、そこはかとなく霞みあひて、秋の夜の哀れに多く立ちまされり。

といふ一節がある。名高い『源氏』の叙景の中でも、殊に名高い美しい調子の文句で、『細流抄』などが「三月末の景氣たぐひなし」などと、手放しの讃辭を獻げて居るところであるが、こゝで問題は「明けぬれば」と「夜深う」と「有明の月」とである。「明けぬれば」は、明けて了つたこと

である。明けて了へば夜深くはないであらう。また夜深き時刻に有明の月は仰がれぬであらう。此の矛盾が冒頭に背中合はせの共在をなして居る上に、少し進んで、姑の大宮からの挨拶には、「いと夜深う出でさせ給ふなるも、様かはりたる心地のみし侍るかな。」と、念入りに「いと」までを添へて深夜を強調してあるかと思ふと、やがて立ち出づる所には、

入方の月いと明きに、いとどなまめかしう清らにて、物をおぼいたるさま、虎狼だに泣きぬべし。

と、今度は「入方の月」に「いと」を添へて、しかもその月を皎々たる光を放つてゐるかのやうに書いてある。一體この須磨行きは「三月二十日餘りの程」とあつて、その二三日前に左大臣を音づれたとあるから、大體十八九日頃のつもりであらうが、陰曆三月十八日の月の出沒は、前と同じ二三年前の曆によると、月出午後九時三十九分、月没午前六時四十分とあるから、有明の月の立派に有る日並ではあるが、但し入方時分の月は、もう日の出の遙か後で、「いと明らか」どころか、すつかり其の光を失つて、唯だ白い月の形を留めるのみになつて居るであらう。かう考へると、此の一鎖の叙景には、時刻の妥當性といふものが全く無くなるわけで、私は「源氏物語」が非凡異常なる妥當性を持つてゐる一面に、斯様な手落のあることを非常に遺憾に思つてゐるのである。

【附言】

これを書いてから二年目、三條西家本を手にして、私は早速この「九月十日あまり」

(應永本には「十よ日許の」とある)の處を調べて見たが、此の異本には「九月廿日あまりばかりの」とあるのを見て、いよ／＼「十日あまり」が、後人筆寫の誤りであることをたしかめた。

七

此の日記の初めの部分で、式部が始めて宮に逢ひ、翌朝宮から後朝の歌を貰つたのに對して、御返事を上げたところに、次ぎの一節がある。

世の常の事ともさらにおもほえず始めて物をおもふ身なれば。
と聞こえても、なほいと怪しかりける身かな。「こはいかなる事ぞ。」と、あはれに故宮のさばかり宣ひしものを。と、悲しう思ひ亂るゝ程に、例の童來たり。

大意は、「君は、私が昨夜の逢瀬を世の常の平凡な戀と思ふだらうと仰しやつたが、私には世間並の戀などは、更に／＼思はれません。君に逢つて始めて物思といふ心持、男の床しいといふ味を知つたのですからね」などと、御返歌は申上げたが、それにしても我れながら不思議な身上ではある。これは何とした事であらう。故宮様(去年亡くなられた愛人爲尊親王)が、あれ程親切

にして下さつたものを、それを忘れずながら、現在その弟御の宮様と斯様な契りを結ぶとは」と、堪らなく悲しくなつて思ひ亂れて居る所へ、例のお取持をした童が來た。といふのであるが、問題はこの

「さばかり宜ひしものを」と、悲しう思ひ亂る。

と、クォーテーションを分けて、分けられた各々を二重に「と」で受けた事である。本來これは一筋に書きつゞけて然るべき處であり、後世ならば、

「さばかり宜ひしものを」と、悲しう思ひ亂る。

と、當然中止の區切なしに書きつゞくる處であるが、それを中断して、其の各々を「と」で受けたのは、各々に歸重キウジュウを持たせる爲めの一種の修辭現象で、これは大體平安朝を一期として廢止されたものであつた。尤も此の修辭の簡単な形式は大昔にもあつたし、今もある。例へば『萬葉集』なる山上憶良の

世の中を憂しとやさしと思へども飛び立ちかねつ鳥にしあらねば。

の類で、これも、世の中を「憂し恥しと思へども」と一氣に言ひ下してよい所を、「憂し」「恥し」

の各々を粒立つくだたせて重くしようといふ所から、各々に獨立性を與へて、その各々をわざと「と」で受けたのであるが、平安朝の散文に於ける前記の「こは如何なる事ぞ」と、「宜ひしものを」と、の分離した反覆は、つまり之れを延長して長町場に試みたのであつた（と私は考へてゐる）。此の一種の修辭へ之れに對して私はまだ適當な術語を見出だし得ず、今の所、或は「隔離引用」といひ、或ひは英語で *separative quotation of respective emphasis* などと勝手に造語して居る）は平安朝の假名文學に屢々用ゐられ、『源氏物語』などには殊に多く用ゐられて居るものであるが、賀茂、本居兩大人その他の先覺者達は、概ねその中間の「と」文字一つを「衍」として、寫し違ひ、或は取り紛れと考へて居たらしい。しかし是れは「衍」でもなく、誤寫でもない、立派な一種の修辭で、時には此の「と」文字が三度も四度も繰返して用ゐられたのであつた。私は此の物語から、序にもう一つ、類似の例を引くであらう。それは前に舉げた「九月十日餘り」の條の一部で、

秋の夜の有明の月の入るまでにやすらひかねて歸りにしかな。
いでや、げにかに口惜しきものと思されつらむと思ふよりも、なほ折節過ぐし給はずかし」と、「まことに哀れなる空の氣色を見給ひける」と思ふに、いとをかしうて、この手習のやうに書きたるものをぞ、御返

しのやうに引き結びて奉る。

已に前に荒筋を書いた話の一部であるが、大意は、

この御歌を見て、有明の月も見ず、門を叩かれても起き出でず、いかに言ひ甲斐のない女と思はれたことであらうと、恥かしく思つたが、我が恥かしさよりも先づ、あゝさすが風流な宮様ではある。折を過ぐさず此の御歌を下さるとは」と、「いかさま、あの有明月のえならぬ氣色を、しみじみ御覽になつたものと見える。」と思ふと、堪らなく面白く床しくなつて、此の手習のやうな書きすさびの感想文をば、御返事らしく結び文の形にして御送りした。

といふのであるが、「過ぐし給はずかし」と、「見給ひける」と、は、後世ならば、中間の「と」を挿まずして、一氣につゞける處を、わざと中斷し、隔置し、獨立性を與へて、一種の文致を見せたのである。

私は序に同じ時代の他の作から、更に一二の類例を引くであらう。「落窪物語」の、阿漕がその夫帶刀の薄情をむづかる所に、

「妬き事添ひて、「相おぼさよりける人に見えけること」と、「いとつらい」と思ひたれば、心苦しうて……とあるが、大意は夫の帶刀がいろく言つてからかふので、妬き忌々しさが段々に加はつて來て、「私はこれほど思つてゐるのに、そんな水臭い人と契へたのはつらい悔しい」と思ひ沈んでゐる

ので、帶刀も心苦しくなつて……といふので、本來は、「見えけること」、「いとつらい」と、一氣につゞくべきところを、

女房を思つてくれないやうな人に見えたのは」と。
私や、とてもつらい悲しい」と。

と分けて書いて、趣味を添へたのである。

『堤中納言物語』の第二篇「このついで」の第一話の末に、左の一節がある。

習ひにければ、例のいたう慕ふが哀れに覺えて、暫し立ちとまりて、さらばいさとて、かき抱きて出でけるを、いと心苦しげに見送りて、前なる火取を手まさぐりにして、
子だにかくあくがれ出でば薫物のひとりやいとと思ひこがれむ。

と、忍びやかにいふを、屏風のうしろにて聞きて、いみじう哀れに覺えければ、兒をかへして、そのまゝになむぬられにし」と、「いかばかり哀れと思ふらむ」と、「おぼろげならじ」と言ひしかど、誰れとも言はず、いみじく笑ひまぎらはしてこそ止みにしか。

專の仔細は、春の一日、高貴の御前で、薫物の御遊びのあつた折に、中將の君といふが、前なる御火取を撫でつゝ、この御火取に聯想して思ひ出す哀れな話がありますと云つて、語り出でた

物語：それは、或公達に、忍び／＼に通ふ愛人があつて、可愛ゆい子供まで生ませたが、本妻を憚つて、つい絶間がちになる。それにもかゝはらず、その幼い子が、行けば必ず後を慕ふので、本邸へ連れて來ることも度々あつたが、或時女を訪ねると、またその子供が後を追つた。可愛ゆくつてたまらない。「さア行かう、行きませう」と云つて、かき抱いて出かけようとする、女は悲しげに見送つて、目の前なる火取を弄びながら、

あなたから置き去りにされる上に、可愛ゆい子まで取り上げられては、私やこれ此の空薫物の、ひとり残つて、また其の上に、思ひこがれて死ぬのでせうか。

と、忍び聲に口ずさむと、男は屏風の後ろで聞いてゐたが、哀れさにすっかり打たれて、子供を返し、自分もそのまゝ落ちついて泊られたと申す。まあ、どんなに可愛ゆく氣の毒に思つたこと、でせう。並大抵ではなかつたでせうね。」と云つたが、しかしその公達の名をば誰れとも明かさず、大笑ひに笑つて、此の話を切り上げましたよ。といふのである。即ち此の三段切りのクォーテーション（ ）は、普通ならば切れ目なしにつゞくべき所を、わざと二度の中仕切を置いて、その各々に耽味猥猥の餘裕を興へたのである。此の部分に就いては、「ゐられにしと。」の「と」を例の衍と見た註釋家もあり、又京都本の現代譯には、「この話を聞いた私は「男はどんなに同情

した事でせう」「愛情も一通りではあるまい」などと、誘ひをかけて見ましたが、それきりでこれが誰れの事ともいはず、笑ひにまぎらしてしまひました。」としてあるが、私は此の三つの「と」は、悉く立派な修辭の工夫で、いづれも「衍」ではなく、又此のクォーテーションに挟まれた三つの詞は、悉く同一人宰相の君の詞であると考へてゐるのである。

尙ほ序に「大神宮儀式帳」に、

度會わたひの國は、朝日の來向ふ國、夕日の來向ふ國、浪の音聞かぬ國、風の音聞かぬ國と、弓矢鞘の音聞かぬ國と、大御心鎮まります國と、悦び給ひて、大宮定め奉りき。

とあるが、これも中仕切のクォーテーションを三つ重ねた珍しい方の例である。

八

以上、私は『和泉式部日記』の本文の中、特殊の意義を含み、若しくは一種の疑義を孕んで居るやうな文句について、一應の説明を試みた。或は辻褄の合はない文句に、合理的の説明を興へようとして。或は表面さあらぬ振して、時代に特殊なる生活背景を持つてゐる文句の意味を解釋しようとして。或は句讀の標識の殆んど無かつた世に於いて、藝術的なる話し方、讀み方を暗示

した文句のあしらひに就いて。或は時處位の妥當性を缺いた文句の點檢について。或は昔は行はれたが、今は影を収めた廢語格、廢句法の特殊の味はひについて、此の理解し難い短篇の日記の中から、成るべく代表資格のあるものを選び出でて、大體の説明を試みた。而して其等の題材は、いづれも極めて短い語句章段で、その説明は概してテクニクに關する機械的のものであつたが、私は最後に二三の纏まつた章段を引き、之れを有機的の一團と見て、少しく此の作者が文學者としての技倆を垣間見たいと思ふ。

『和泉式部日記』一卷は、頭尾に通じて實に難解なる文句に満たされてゐる。文學、史學の高級なる觀察は暫らく措いて、單に文句文章だけについて見ても、忠實に片端から埒明けようと思ふ讀者は、必ず此の日記の文章のぼんやりさ、やゝこしきさ、だらしなさ、くどさ、ぢれつたさに呆れるであらう。或人は、なぜ現はさうと思ふ内容を、もう少しピタリと的確に現はせないのか、なぜもう少し、よく續くやうに、穴が明かぬやうに、襤褸が下らぬやうに、纏まるやうに書けないのか、なぜもう少し讀む者の心理を汲み取つて解りよくすることが出来ないのかと、忌々しくも感ずるであらう。此の日記は今日の吾々から見ると、事實、かやうに感ぜられるやうに出來て居り、中には作者の文章力、文學力の疑はれるやうな個所も無いではないが、その中にほんの少々

ながら、きりつと纏まつて、いかにも美しく面白く書き上げられてゐる所がある。全體を此の調子でやつてくれれば、此の方面に於いても、清紫兩女と雄を競はれたであらうにと惜しまれるやうな所がある。私は最後に、そのやうな部分の二三を取り出だし、敷衍的現代語譯を試みつゝ、その理由を説明したいと思ふ。

その一つは消息の文である。此の日記の最後に近き部分に、宮の北の方と、その姉君女御との間に取り交はれた短い贈答の手紙がある。女御のは、式部の闖入によつて悲惨な運命の下におかれた妹君を慰められたもの、左の通りで、

いかにぞ。この頃人のいふ事あり。まことか。我れさへなむ人氣なう覺ゆる。夜の間にも渡りたまへかし。

そして是れが全文である。地の文章が、ぬらくらと蔓草のやうに繋がり絡まつて居るのに反し、非常に句讀短かで齒切れがよく、その上改まつた前後の挨拶詞もなくして、云はゞ日常談話の詞そのまゝを、少し磨いて壓縮したといふ趣のものであるが、その心で譯して見ると、まづかういふ調子であらう。

どうして入らつしやる？ 昨今世間が宮についていろ／＼噂して居りますね。あれは眞實ですか？ お前は嘘かし、私でさへ、すつかり面目をつぶされた氣持ですよ。貴は人目がある。夜分にでも入らつしやいな。

譯するといひ伸び過ぎるが、意味が解つてから後に原文を読んで見ると、簡潔で、要を得て、情がうつつて、實に妙を極めて居ると思ふ。これに對する北の方（即ち帥宮妃）からの御返事は、左の通りである。

承りぬ。いつも思ふさまならぬ世の中の、この頃は見苦しき事さへ侍りてなむ。あからさまに参り侍りて、宮達をも見参らせて、心も慰め侍らむとなむ思ひ給ふるを、迎へに賜はせよ。これよりはよも。耳にも聞き入れじと思ひ給へてなむ。

これも是れで全文であるが、敷衍譯を試みると、

うれしくいたゞきました。前々から始終恵まれぬ生活を送つて居りますが、此頃はまして、餘處から下司女を入れて、それに見かへられるなどいふ事がありましたね。ほんとに堪りません。一寸なりとも伺つて、可愛ゆい若宮様達にも御目にかゝり、此のふさいだ心を慰めたいと思ひますが、迎への御車を下さいませんか。こちらから仕立て、参るといふわけには逆も、私の頼みなど、耳に入れて下さるやうな人ではないと思ふものですからね。

此の作の最後の斷り書きに、北の方や女御殿の御手紙ぶりは、他の部分とちがつた「あら／＼書き」で、そのまゝの寫實ではないといふ風の事を云つて居る所を見ると、此の二篇の尺牘は、多分和泉式部が創作に成つたのであらう。とにかく、ソツのない、非常に冴えた、氣の利いた、

活きたもので、全體が此の調子で行つたならばと思はれるやうなものであると、私は思ふ。

九

もう一つ引きたいと思ふのは、例の感想文の草稿を返書にかへて送つた一段の次ぎにある一章で、大要は、九月の末に、宮から御手紙があつて、懇ろにしてゐた女が今度遠方へ行く事になつた。その女にお名残の歌を送りたいと思ふのだが、代作を頼む。と云つて御遣はしになつた。折角の仰せをお断りもしかねて御目に懸けた、といふので、それについて、しやれた歌の贈答のあつた交渉を書いたものである。左に全文を載せる。

かくて晦日（つひひ）がたにぞ御文ある。日頃の覺束なさなどいひて、

怪しき事なれど、忍びて物いひつる人なむ、遠く行くなるを、哀れといひつべからむ事一ついはむとなむ思ふ。それより宣ふ事のみなむ、さは覺ゆるを、一つ。

とのたまへり。あな、したり顔と思へど、さはえ聞こえじと申さむも、いとさかしければ、

宣はせむ事は、いかでか。

とばかりにて、

惜しまるゝ涙にかけはとまらなむ心も知らず秋は行くとも。

このふざけた調子の面白さを御覽なさい。「ふざけた」といふと下品に聞こえるが、それがいかにも上品で、ゆつたりして、どん底から相愛して居りながら、しかもそれに執着せず、悠揚と戀愛の大海に棹さして、平地波瀾の藝術把翫に餘裕を楽しんで居るのですからね。私は此の日記に現はれた和泉式部の愛をば、盲目の愛、玩弄の愛、平地波瀾の愛、忘一切他の愛、男女の相惹く性質動作を藝術的にあやなした珍らしき愛であると思ひ、而して此の點に於いて、此の作をば、此の時代に現はれた他のいづれの作よりも立派に、時代思潮の最高頂を寫し出だして居ると思ふものであるが、此の一章の如きも、はかなきさびの一ふしながら、これらの意義を豊かに含蓄し美しく説明して居るやうに思はれる。戀に活き、戀に遊び、藝術に活き、藝術に遊んで、そこに悠揚典雅の夢幻世界を創造する。これが善い方面から見た平安王朝の理想の姿であるが、此の一章の如きは、まさしく時代の此の姿を小規模に見せたもので、同時に此の時代思想の權化たる彼女の生活の代表部分を最も美しく見せたものである。同時にまた、此の文字少なくて餘意に富んだ枯れた文致、裏に婀娜濃艶の限りを覗かせて、表に少線白描の簡素味を見せた趣、省略に無理がなくして、要點を力強く引き立たせ、散文と歌との掛合に不即不離なる巧緻の限りを見せた手振等に於いて、もし此の種の斷章を集めて相應の數に纏めることが出来たならば、堂々と

『枕の草子』の向うを張ることが出来たであらうにと、惜しましめるものである。

10

以上、私は『和泉式部日記』の本文の意義及び趣味について大體の考を述べた。最後に此の日記全體に關する考を、極めて簡單に述べて、此の稿を終へたいと思ふ。

王朝女流日記の代表的なるものは『かげろふ日記』『和泉式部日記』『枕の草子』『紫式部日記』及び『更級日記』の五篇である。この五篇の作者が、いづれも平安朝の女らしくして、而もそれ／＼に特色のある姿を作の中に見せて居るのが面白く、又五人してほゞ平安朝の女性愛戀の世界の全面を寫して居るのは更に面白いことであるが、その各々の特色を一口にいへば、『かげろふ日記』は唐げられた女の姿を最も明らかに寫したものであらう。消極的に泣く女の心を寫した點に於いて代表的と見るべきものであらう。『和泉式部日記』は放たれた女の姿を最も明らかに見せたものであり、同時に積極的に求むる、狂はんばかりに求むる女の心を寫した點に於いて代表的と見るべきものであらう。また『紫式部日記』はあきらめた女の靜かに眺むる心を寫したものであり、『枕の草子』は醒めたる女の冷やかに皮肉に物見する心を寫したものである。和泉を熱情の女

「大鏡」について吾々の考ふべき事は澤山あるであらう。例へば、「誰れが書いたか」「何時書いたか」「いか様に書いたか」「他の同類の作に對していかなる地位を占めて居るか」「どんな批評解釋が加へられて居るか」といふやうな事は、それ／＼悉く興味ある研究の一面を成すべき事であるが、私は文學的に見、また文學史的に見て、「大鏡」の價值興味の中心は、問答體といふ様式を中心としての記述描寫にあると思ふので、まづ此の方面を、比較的委しく説いて、それから他に及ぼしたいと思ふ。そして序に、大鏡の鑿みに倣つた同種の文學なる「今鏡」「水鏡」「増鏡」との比較論をも試みたいと思ふ。

「大鏡」は京都紫野の雲林院（りんいん）に於ける百數十歳なる二人の翁と二十歳ばかりなる一人の侍との對話問答に假託して、文徳天皇より後一條天皇に至る、十四代、百七十六年間の歴史を述べたものであるが、其の特別價值といふやうなものを考へて見ると、私はまづ第一は「古事記」の魂を復活させた點にあると思ふ。「古事記」の魂とは、其の國の歴史を國語で書き、其の時代の歴史を時代語で書く事をいふのである。「古事記」は古傳説の可なりに忠實なる記載で、太古の語を以て

太古の日本民族の心持を其のまゝに寫したものである。無論神代以來久しい間の事蹟が辛うじて跡を留めた、あの三卷の古典に對して、小別けされた時代々々を、其の時代々々の語で寫す事は望むべからざる事であるが、しかしながら「古事記」の精神は必ず此處にあつたのであらう。また引用挿入された歌謠や人物の詞などの中に、其の精神の幾分かは現はれてゐるやうに見える。これが「日本紀」になると、大分様子が變はつて來た。「日本紀」は新しい材料を追加する事によつて、歴史としての精しさを加へ、漢文體を採用する事によつて、文章としての一種の重々しさを加へたが、之れと共に國民の魂がそのまゝ、國語に現はされるといふ第一義底の歴史の生命と風味とを失つた。「日本紀」の流れを汲んで「日本紀」に及ばなかつた。そして殊に無味乾燥な史料のころ／＼並べに満足した「續日本紀」「日本後紀」「續日本後紀」「文徳實錄」「三代實錄」などが、此の精神風味を全く失つたのはいふまでもない事である。「大鏡」は王朝の語を以て王朝の歴史を書いたもので、此の點に於いては、「榮華物語」と相並んで、遙かに四百年前の「古事記」と呼應して居るものであるが、「榮華」が平安朝最盛期の、女性的な優美一方の雅語を以て、之れに適した方面の事柄のみを寫したのに比べると、「大鏡」の用語が新しくして種類に富み、そして其等の語を巧みに驅使して、各方面の事柄を生き／＼と寫して居るのは、遙かに多く此の資格

に富んで居ることを示すもので、若し『榮華』を以て『古事記』の魂の二、三分を得たものとするれば、『大鏡』は其の四、五分をも、或は七、八分をも得たものといふべきであらう。

『大鏡』の特別價値の第二は、入興可讀の連續的風味を備へた事である。興味を以て先きから先きへと續け讀みの出来るやうに書いて居る事である。我が國の古史の中で、この入興連續の風味を最も多く備へたのは、やはり祖史たる『古事記』であつた。『古事記』に比べると、『日本紀』には大分機械的臚列の傾向が見えて來たが、『紀』以外の五國史に至つては、全く史實を機械的にころ／＼並べたもので、讀むべき歴史といふよりは、寧ろめくるべき史實集となつた。彼等の書き列べ振は、例へばこんな風に、

何年秋何月甲子、大極殿で御即位式が行はれた。○何月何日、云々の宣命を賜はつた。○何月何日、何々と改元された。○何月何日、新羅が朝貢した。○何月何日、諸々の神社に馬を獻じて雨を祈つた。○何月何日、陸奥國から黄金を獻上した。○何月何日、何國の某といふ孝子を賞された。○何月何日、役小角を伊豆に流された。○何月何日、伊豫國から白燕を獻上した。○何月何日、道照和尚が遷化した。○何月何日、遣唐使を派遣された。○何月何日、賄賂を取るなどいふ御觸れが出た。○何月何日、富士山が噴火して、新に河口、精進、本栖等の湖水が出來た。○何年の十一月朔に雷鳴した。○何月何日、大赦によつて某の罪を赦した。○何月何日、佛塔百萬を作つて諸國の寺々に分けた。○何月、駿河國が飢乏たので賑濟した。○何月何

日、鴨河原で鬻腰五千五百餘頭を焼いて供養した。

と、まづこの通りで、その間には連絡した文學的の風味の殆んど無いものであつたが、此の種の漢文式國史編纂の暫らく中絶した後に出でて、第一には、面白い趣向を立て、讀者の興味を惹いた多くの假名物語の影響を受け、第二には、『榮華物語』——趣向があつて連續はさせるが、文章は『源氏』其の他の假名物語の模倣であり、内容と作の態度とは、單調で、不見識で、或はひたすら權門を稱頌し、或は他人の文をそのまま挿入する事などを敢てした『榮華物語』——の類に不満を感じ、第三には、支那の歴史編纂法を參酌し、最後には、芝居がかりの新式な對話法で全體を纏めた上に、猿樂風味の可笑しさを添へて、讀者をちつとも饜かせずに最後まで引張らうといふ、是れが恐らく作者の意中で、かくして六國史はもとより、『榮華』の上を越し、或點では『古事記』の上をも越して、あのやうに一貫した魂で統一された入興可讀の面白い歴史が出來た。それが『大鏡』であつたのである。

『大鏡』の特別價値の第三は、支那の歴史編纂法を應用した事である。第四は劇的對話の趣向による統一である。第五は謂はゆる猿樂魂の加味である。第六は比較的公平で、氣骨があり同情のある事である。第七は記事が正直で瑕瑜共に擧ぐる事である。第八は文章に無類の特色があつ

て、變化に富み、美も力もある事である。思ふに是等は皆「大鏡」特有の價値で、前代並びに同時代の文學及び歴史に對して誇るべきものであるが、其の最大特色はやはり問答對話の劇的様式にあつたので、これあるが爲めに、「大鏡」は其の方面に於ける空前絶後の作として、國文學史上に一種特異の高い地位を占めるのであらう。

二

たゞの對話問答は、社會的事實としては人類と共に在り、書記された文章としては極初の文學からさらにあつたので、少しも珍とするに足るものではないが、直言し平叙すべき事物を問答對話の形式に書くことになると、其處に一種特別の趣致が生じて來るので、之れを問答體、Dialogueなどと稱して、一種の修辭的形式と見るやうになつたのである。例へば、韓退之の「進學解」が國子先生と諸生との議論に託して先王の道を説けるが如き、曲亭馬琴が「八犬傳」の回外剩筆に於いて、翁と回國頭陀との問答に託して、小説の本領を説けるが如き、或は「法華經」が釋迦自身と文殊、舍利弗等との間に於ける問答の形式にして甚深微妙なる大乘の法を説けるが如き、即ちそれで、いづれも、此の法の効果を面白く見せたものであるが、我が國の古文學の中で、此の法

を最初に、而して最も巧みに、最も大仕掛に用ゐたのは、恐らく「大鏡」であらう。「大鏡」の特異なる趣味の大部分は此の問答體から生れたので、「水鏡」「今鏡」「増鏡」等の作家が、競つて其の響みに倣つたのも、畢竟此の特殊なる趣致に心を惹かれた爲めに外ならぬが、一體「大鏡」の作者が、此の問答物語の考案をば、何處から得て來たのであらうか。内國或は外國の作物に已に現はれた先例に倣つたのであらうか。前代の作物の中に含まれた種子に目をつけ、之れを拾ひ取り育て上げて物にしたのであらうか。それともまた全く「大鏡」の作者自身の創案に成つたのであらうか。私は久しく此の問題に疑ひを挟んでゐたが、思ふに「大鏡」の作者は前代の作物に先例の雛形を見出したのではあるまい。それは一つは、日本にも、支那にも「大鏡」の時代以前にあのやうな形式の作物が無かつたらうと思はれるからで、一つは「大鏡」のあの出來具合に、何となく初度の試みらしい、うぶな整はぬ所があるからである。尤も、法華經などのやうな經文や、論語、孟子、莊子、列子などに見るやうな對話篇式の書き方が、作者の心を惹いたことはあつたであらうし、また殿上や街頭に於ける公卿や民衆の實際の談話應答振が、彼れに一種の興味を感じさせた事もあつたであらうが、しかしながら、それらが直接に「大鏡」の作者が新案の種になつたとは思はれぬ。かう考へると、あの様式は、或は全く「大鏡」の作者の創案に成つたものか

も知れないが、こゝに一つの疑問は、『大鏡』のこの新案と『源氏物語』の帚木卷に於ける「雨夜の品定め」との関係である。云ふまでもなく「雨の夜品定め」は作者の女人觀の概説とも見るべきもので、抽象的論説の形式にもすればされべきものであるが、それをば御物忌に籠つた源氏の居室に於ける四人の人物——源氏、頭中將、左馬頭、藤式部丞——の對話問答として寫したのは、一種の問答法、ダイアローグと見るべきもので、『大鏡』が十四代百七十六年間の史實を、雲林院の菩提講に於ける五人——大宅世繼、夏山繁樹、繁樹の妻、若侍、作者——の間に於ける對話問答として現はしたのと非常によく似て居るといふことが出来るであらう。のみならず『源氏』と『大鏡』との文句の中には、彼れ是れ照らし合はせて、非常に縁の深さうに思はれるものが二三ある。例へば、『大鏡』の劈頭の序言の中に、

かくて講師かうし待つほどに、我れも人も久しうつれななるに、この翁おきなものいふやう、世繼「いでさうしきに、いざたまへ。昔の物語して、このおはさふ人々に、さは、古の世はかくこそはありけれ、と聞かせ奉らん。」といふめれば、今一人「しかく、いと興ある事なり。いでおぼえ給へ。時々さるべき事のさしいらへ、繁樹もうちおぼえ侍らむかし。」といひて、言はむ／＼と思ひたる氣色けしきども、いつしかと聞かまほしく、奥ゆかしき心地するに、そこらの人多かりしかど、物はか／＼しく聞きわき耳とゞむるもあらめど、人目にあらはれては、この侍ぞ、よく聞かむとあど打つめりし。世繼がいふやう「世はいかに興あるものぞや、さ

りとも翁こそ少々の事はおぼえ侍らめ、昔賢かしこしき帝の御政の折は、國のうちに年老いたる翁おきなやあると召したづねて、古のおきての有様を尋ね問はせ給ひてこそは、奏する事をも聞し召し合はせて、世の政は行はせ給ひけれ。されば年老いたる身は、いとかしこきものに侍り。若き人達おぼしな侮りそ。」とて、黒梯くろはしの骨の九つあるに、黄なる紙はりたる扇をさし隠して、氣色けしきだち笑ふほど、さすがにをかし。世繼「まめやかに世繼が申さむと思ふ事は、他事たごころかは。只今の入道殿下の御有様の、世にすぐれておはします事を、道俗男女の御前にて申さむと思ふが、いと事多くなりて、あまたの帝みかど、后きさき、また大臣、公卿の御上をつゞくべきなり。その中に幸人さいじんにおはします此の御有様申さむと思ふほどに、世の中の事の隠れなく顯はるべきなり。傳つたに承れば、法華經一部を説き奉らむとてこそ、まづ餘經をば説き給ひけれ。それを名づけて五時教とはいふにこそはあんなれ。しかの如くに、入道殿の御榮を申さむと思ふほどに、餘經の説かるゝといひつべし。」などいふも、わざ／＼しう事やしう聞こゆれど、いでやさりと何ばかりの事をかと思ふに、いみじうこそ言ひつけ侍りしか。

右の引用文の最後は、藤原道長が榮華生活の記録づれに、如來が金口所説の五時教や法華經を持ち出すのは事々しいといふのであるが、『源氏物語』の「雨夜の品定め」には、左馬頭が女人觀を一通り述べて、これから自分の色道經驗を物語らうといふ所に、かう書いて居る。

「はかなき事だにかくこそ侍れ。まして人の心の、時にあたりて氣色けしきばめらむ見る目の情をば、え類たぐひむまじ

く覺え侍り。その初めの事、好きくしくとも申し侍らむ」とて、近く居寄れば、君も目さまし給ふ。中將
いみじく信じて、頬杖をつきてむかひ居たまへり。法の師の世の道理説き聞かせむ所の心地するも、かつはを
かしけれど、かゝる片は睦言もえ忍びといめすなむありける。

かい摘めば、左馬頭は一種の權威を以て、堂々と自分の色道經驗を語り出した。あたりの光景
が緊張して來たのを感じて、源氏の君も目をさまされる。頭中將の如きは、すつかり信心を起こ
して膝すりよせる。一座の様子が何となく、高德の聖者が尊い説法の筵のやうに思はれるのを
かしい……といふので、前に舉げた『大鏡』の文意に非常によく似たところがある。無論『源氏』
の文は『大鏡』の文そのまゝではないが、二者の間に何等かの因縁があつて、此の品定めが『大
鏡』の作者に、少なくとも一種の暗示を與へたやうに思はれるのは、私の僻目であらうか。

また『大鏡』が、帝王の本紀を終へて、藤原氏の列傳に移らうといふ處に、かういふ事が書い
てある。

世繼、「よしなし言よりは、まめやかなる事を申し出でむ。よくく誰れもく聞し召せ。今日の講師の説
法は、菩提のためとおぼし。また翁らが説く事は、日本紀を聞くとおぼすばかりぞかし。」といへば、僧徒け
に説教説法多く承れど、かく珍しき事のためふ人は更におはせぬなり」とて、年老いたる尼法師ども、額に
手をあて、信をなして聞きおたり。

世繼が話す藤原氏の榮華物語をば、尼法師等が高僧の説法に對する如く信心をなして聞いて居
たといふのは、或は頭中將が左馬頭の色道話をいみじく信じて聞いてゐたといふ『源氏』の文か
ら暗示を受けたのではなからうか。「信じて」「信をなして」といふ特別の類似した語が使はれて
居る所を見ると、少なくとも二者の間に一脈の血縁があつたのではないかと思はれる。また『日
本紀』の事については、『源氏』の「螢の巻」に、例の

(物語は) 神代より世にある事を記しおきけるなんなり。日本紀などはたゞ片そぼぞかし。

といふ一節があつて、『源氏の作者』が、はかなき小説物語に日本紀以上の價值を置いた事を示し
て居るが、世繼が、我が説話を無上正覺を得させるための高僧の説法に比し、更に我が説話を日
本紀のつもりで聞けと宣言するあたりは、いかにも、『螢の巻』の此の句から暗示を得て書いたや
うに思はれる。無論『大鏡』の作者は獨創に富んだ人であり、そして『源氏』に類似した文句を
書いた場合に於いても、暗示を得たことの明らかな證據になるやうな痕跡を見せて居るのではな
いから、何とも斷言することは出來ぬが、私は是等の資料によつて、何となく二者の間に一種の
連絡があつたやうに思ふのである。

三

『大鏡』の作者が『源氏物語』に種子を見出だし、若しくは暗示を得て、新案の劇的問答法を建立したか、或は全く獨自一個の工夫によつて此の新式を創建したか、これは容易に決定し難い問題であるが、とにかく此の劇的問答法が『大鏡』の興味を中心であり、作者が第一の手柄であるのは争はれぬことである。然らば作者は、この新案をば、作の上に於いていかほどの程度に具體化し得たか。これが吾等の第二に考ふべき問題であらう。

便宜の爲めにまづ結論からいふと、私は『大鏡』の作者の此の新案は、可なり立派に物にされて居ると思ふ。少なくとも同種類の他の作とは比較にならぬ程立派に仕上げられて居ると思ふ。私の考によれば、問答物語の立派に成立つために必要な條件が二つある。第一は時・所・位の自然といふ事である。第二は問答物語らしい條件の具備といふ事である。時・所・位の自然といふのは、其の物語が如何なる場合に、如何なる場所に於いて、何人を相手に、如何程の時間の中に行はれたかといふ事を考へて、いかに自然に實らしく鹽梅する事である。例へば、それが古社寺の境内の老杉の下に於ける、田舎人を相手としての半日の談話であるか。或は雨夜のつれづれに數遊

の學徒が燈火を圍みつゝ、曉かけての物語であるか。或は靈場めぐりの行者を相手に、海邊山路を拾ひつゝ、數日にわたつての談話であるか。或は都會の疫癘を山間の幽邃境に避けた知識者同志の間の、十日二十日にわたる消閑の爲めの講話であるか。これらのいづれなるかによつて、其の談話の程度や長さや調子や模様やを加減する必要のあるのは言ふまでもないことであらう。此の點から見て、『大鏡』の説法の場所や、機會や、話手や、聽衆や、乃至説話の模様等は、殆んど申分のないまでに相應はしく自然に出來てゐると云つてもよい。時は祈禱佛教が全盛で、名高い説教僧の輩出した頃である。そして其等の寺院僧侶が、いづれも御堂關白の庇護の下に榮えて居た折である。かやうに世間一般が佛を禮し道長一家を仰いで居る時に於いて、讚佛乘の説教の始まる前に、繫ぎの序品として、藤氏讚頌の短講話を試みるといふのは、非常に奇抜であると同時に、非常に相應はしい自然な趣向であらう。が、一つをかしいのは、其の時間と内容の長さとの不調和である。時間は説經が始まる迄の小閑である。此の、挨拶や無駄話さへも長くは續けられぬ程の短時間に於いて、十四代、百七十六年間の歴史、分厚の八卷を成したる一部の大歴史を講ずるといふのは、譬へば十日物語を半日ですまし、千一夜物語を一日二日にあてるやうなもので、初めから無理な話であるが、作者は屢々其の事に心づいたと見えて、時としては讀者に自分

の趣向の不自然なる事を示唆するかの如く、「事多くて講師おはしなば、ことさめ侍りて口惜し」とか、「講師おはしましにたりと、立ち騒ぎ罵りし程に」など言つて居りながら、斯様な不自然を敢てしたのは、どうしたものであらうか。私は此の點一つだけでも改めて、自然に實らしくすれば、文學としての『大鏡』の價値は幾段と優つたであらうものと、常に惜しく思ふのである。けれども、是れは望蜀の欲を云つたので、之れを同種類の他の三鏡等に比べて見ると、さすがに『大鏡』の優れて居ることがわかる。『水鏡』は七十三歳の老尼が、二月初午の日に泊瀬に詣でて、御通夜のつれづれに、傍らに居る三十四五歳の修行者に談話を求めた。そして修行者が一昨年の葛城登山の折、神代以來葛城山を栖として今まで世の有様を見聞して來た老神人から聞いた神代以來仁明天皇の嘉祥三年までの歴史を、後夜から曉にかけて物語るのを聞いたといふ趣向になつて居る。是れは時間は春の夜半で、『大鏡』より多少長くなつては居るが、無理と不自然とは『大鏡』と全く同じ事で、其の上に七十歳の老尼が、若い修行者に古い歴史の物語を聞いたといひ、其の若い修行者が神代から今まで生きて居る老翁に聞いた話を受賣したといひ、後夜も過ぎて、通夜の人々の眠つた後に、老尼と若い修行者とが、話手一人聽手一人の長物語を曉方までつゞけたといひ、その受賣話をその老尼が、我れ一人やは見むとて書きつけたといふが如きは、

更に無理不自然の上塗ともいふべきであらう。季節を「二月初午」と限つたのは、其の場合を具體化する上から見て、一つの進歩であらうけれども、長物語をするのに春の短夜を選んだのは、やはり一つの失敗と見るべきであらう。

『今鏡』は三月の十日餘り、ある人が數多の仲間と泊瀬詣でをして、それから大和めぐりの幾日かをつゞけたが、或日木蔭に休んでゐる處へ、百歳に餘る老婆が來合はせたので、昔物語を要めて、後一條天皇の萬壽二年から高倉天皇の嘉應二年に至る百四十六年間の歴史を聞いて日暮に及んだといふ趣向になつて居る。是れは季節も相應で面白く、花の木蔭の物語なども一寸面白い趣向であるが、老婆一人の歴史談といふ事が不相應で落ちつかない上に、其の長い眞面目な史談を、地べたの腰掛話につゞけさせるといふのは、不自然であるのみならず、殘酷の感じすらも起こさせる傾きがあつて、とても『大鏡』が、嬰鏢たる老翁二人が談話の主役となり、歴史好きの若侍が合榎打兼質問係となり、そして別に注意深き趣味家文章家の筆者が居るといふのとは、比較にならぬ程拙いものである。

『増鏡』は或人が釋迦涅槃會の二月十五日に、嵯峨の清涼寺に詣でて、百歳に餘つた老尼の昔話を聞いたといふ趣向になつて居るが、しかし唯だそれだけで、他には問答物語らしい趣が殆ん

ど無い。思ふに『増鏡』の作者の頭は頗る無統一の浮草質で、最初の序文では、『大鏡』を真似て、古名刹に於ける老人の昔物語といふ趣向を立て、は居るが、本部に入ると早速「おどろの下」「新島もり」などいふ風流な見出などを設けて、すつかり『榮華物語』の追隨者となりすまし、そのまゝ直筆平叙のたゞの歴史を書きつゞけて、問答物語としての最後のとめ——冒頭に呼應すべき結論——をすらも、すつかり忘れて了つて居る。私は『増鏡』に對して、王朝ぶりの流麗な文致の優れて居ることを認め、また當時の武士氣質の凝つて成つたやうな、すばらしく強い名文の介在することをも認めるが、文藝的作品としての趣向の上から見ると、頭があつて尻尾のない作、中間の分裂した作、氣が多くして力の足らぬ作、二元を兼ね備へんとして縫合の出来なかつた劣悪な作であると考へる。

『梅松論』は、二月二十五日を結願の當日として、北野の毘沙門堂に參籠した或人が、念佛の際に、北條氏が亡びて足利家の興つた消息を委しく知りたいたが、「誰れにても御語り候へかし」と云つて參籠の人々に求め、多智多藝なる某の法印が之れに應じて物語つたといふ趣向である。しかし是れは唯だそれだけで、尤も『増鏡』とは違つて、冒頭に應ずる最後のとめだけはつけて居るが、文章もまづく、問答物語としての特別味も一向無く、要するに文學としては特にいふに足

らぬのもである。

かう並べて見ると。この新體を創めた『大鏡』が、さすがに時所位の自然といふが如き外側の形式方面に於いても、際立つて優れて居るとがわかるであらう。時は佛教全盛時代の萬壽二年である。場所は藤原氏の保護によつて榮えて居る紫野の雲林院である。そして此の佛と藤原氏とを等分に尊崇して居る大衆に向つて、讚佛乘の説教の始まる前に、入道道長の榮華を中心とした藤氏の興隆及び榮華の百七十六年史を述べるのである。語り手の第一の主役は百五十歳の大宅世繼である。輔佐役は百四十歳の夏山繁樹である。そこへ聞き上手、話させ上手の若侍が、巧みに合槌を打ちつゝ、刺戟係を承つて居る。好事の趣味家、文章家で天性の記者型に出來てゐる作者が、眼を光らし、聞き耳を立てて、話の模様をば一寸も見遣がすまい。聞き落すまいと注意して居る。そこに女性の花形として、老繁樹の若い妻が愛嬌の種を蒔きつゝ、一方に控へて居る。そして十四代二世紀にわたる歴史が、是等の五人と會衆との劇的言動と面白く織りませられつゝ、賑やかに着々と繰りひろげられて行く。そして最後には講師の姿が見えたので、惜しき史談を切り上げるといふキリの大團圓が立派につけられてゐる。かう考へると、説教の前座の短時間に百七十六年間の藤原氏榮華史を片づけるといふ無理不自然だけは、玉に疵で情ないが、時所位の各方

面に於ける仕組や配り方は、實に申分のないばかりに立派に出来てゐるといふべきであらう、少なくとも他の三鏡などが足許にも寄りつけぬほど立派に出来てゐるといふべきであらう。

けれども斯様な成功は「大鏡」に取つて物の數でもない。「大鏡」の最大成功は、恐らく問答物語の實を立派に挙げた點にあるであらう。形式内容の兩面にわたつて、開卷第一から最後までを問答物語らしく仕立てた點にあるであらう。あらゆる局面のあらゆる記叙描寫に通じて、問答物語の精神の隅々まで行きわたつた有機的統一のある創作を建立した點にあるであらう。そしてそれが前に謂はゆる「問答物語らしい條件の具備」といふ第二の條件である。

四

「問答物語らしい條件の具備」とは、問答物語をして立派な問答物語たらしめるには、問答物語に必要ないろ／＼の條件が備はつてゐて、此の特殊精神が、作の全部に、その脈絡、關節、神經の端々にまで行き互らねばならぬといふのである。例へば其の條件の第一は話場の幻影の永續といふことであらう。話場の永續とは。假定された説話の場所が、物語の終はるまで、永續的に讀者の心に想ひ浮べられて居ることである。已に紫野の雲林院の佛殿に於ける問答物語であると

きまれば、其の佛殿の光景が物語の最後まで、讀者の心眼から離れぬやうにすることである。これは觀劇の場合に於いて、舞臺の上に演ぜられる事件が、いかに千變萬化しても、其の舞臺が一寸も觀衆の目から離れてはならぬやうなもので、若し其の内容が話場と絶縁された遊離的の叙述となるならば、それは作者の企圖が無視され、忘却され、若しくは拋棄されたもので、作者の未熟、不注意を意味し、同時に作に取つての一種の破滅を意味するものとなるであらう。

問答物語に要する條件の第二は叙述の問答化といふ事であらう。叙述の問答化とは、凡べての記叙描寫を問答本位にする事である。委しくいへば、讀者に、幾人かの説話者が舞臺の上で對話應答してゐるのだといふ事を思はせるやうにし、言ひかへれば、一人の見聞所感を其のまゝ平叙したものではないといふ事を味はせ、せるやうに、用語をも、文章をも加減せねばならぬといふ事である。そも／＼對話の味は問答物語の中心興味の一つとなるべきものである。若し問答物語に問答對話の味がないならば、それは劇詩が普通の叙事文となつたやうなもので、其の結果は問答物語としての存在の意義を失ふことになるであらう。

問答物語に要する條件の第三は説話者の相伴活動であらう。説話者の相伴活動とは、説話によつて、本筋たる物語の内容を展開して行く間に、説話者自身の言語、行動、面目を自然に織り込

んで行く事である。「大鏡」に例を取れば、忠平、兼家、道隆、伊周、道長等の傳記を述べて行く間に、世繼や繁樹や若侍の言語行動を相應はしく織り交せて行くといふ意味で、無論それは作の興味を加へるやうに、本筋の叙述を引き立てるやうに、そして少なくとも蛇足の目障りにならぬ限りに於いてすべきであるが、もし此の説話者自身の言語行動の相伴ふことがないならば、其の作は問答物語としての存在の意義を全く失ふべきわけである。「大鏡」が問答物語として優越の地位を占めるのは、第一に此の相伴の活動があるからで、これには八卷隨所に説話者が飛び出して興味を添へて居るが、他の「水鏡」「今鏡」「増鏡」の類は、唯だ冒頭と結尾とに、これは某の寺、某の堂に於ける老翁老尼の物語だといふ事を断つて居るだけで、あとは殆んど全部一本調子の素語になつて居る。それは譬へば「神皇正統記」や「日本外史」の首尾に、これは百歳の老翁の一夕話であるといふ断書を附け加へたやうなもので、云はゞ雁首と吸口とを問答式にしただけの煙管式問答物語ともいふべきものである。殊に「増鏡」の如きは、雁首のみがあつて吸口がないといふ不具の作になつて居るが、これでは序文で高唱した問答物語の趣味が一向發揮されぬことになる^{こと}と云はねばならぬ。

問答物語に要する條件の第四は、本筋と添物との調和である。本筋とは作の中に語り傳へられる本尊たる内容の事である。添物とは其の内容の發表に伴ふ話手聽手の言語動作及びいろ／＼の環象の事である。而して二者の調和とは、本筋と添物とがしつくりと調和して、添物が本筋に馴染み、また添物が本筋の主位を犯さずして、あくまでも本筋を引き立てる役目に始終するといふ意味であるが、此の事が問答物語の成功に必要なことは改めていふまでもないことであらう。以上、問答物語の成立に必要な條件を、更に取りすべていふと、第一は、或特別の場所で或特別の人々が説話をして居るといふ事が、作の中に明らかに現はされて、結尾まで讀者に記憶されることである。第二は、添物が本筋に親しみ馴染むと同時に、常に従位を守つて本筋を引き立てる事である。是等の要件が満たされて、始めて立派な問答物語が出来るのであるが、我が古典に於ける問答物語の中で、此の要求を満たし、此の標準に合して居るものは、恐らく唯だ一篇の「大鏡」があるのみであらう。

五

「大鏡」の大を知るには、先づ他の三鏡の小なる事を知らねばならぬ。「水鏡」「今鏡」及び「増鏡」は、前にも云つた通り、唯だ頭尾の兩端に於いて問答物語の形式を見せただけで、中間の本

部をば、殆んど全く唯だの素語りすかたりで打ち通した一本調子の歴史である。讀者は、冒頭の序段に於いて、これが或る靈場で話された老翁老尼の物語であるといふ事を示されるだけで、本文に入つては、談話者聽聞者の片影をも見せられず、舞臺の靈場をも、談話者の老人をも、聽衆をも、すっかり忘れて、百數十年乃至數百年に亙る長い史談を聞かされた後、最後に至り、思ひ出したやうに、再び、これは或る場所に於ける老翁老尼の物語であると注意されて、ハハアさうであつたかと驚くといふ風の物語である。用語、文章に於いても對話問答の特殊の味ひが殆んど無く、唯だ前後の序と跋とに於ける押賣の斷書ことわりがきによつて、或る靈場に於ける或る人の談話なる事を知らさせるといふ風の物語である。殊に「増鏡」の如きに至つては、清涼寺と百餘歳の老尼とをば、序文に於いて見せただけ、あとはすつかり平叙の歴史にして、好い氣持で引き上げるといふ、木に竹を接いだやうな、鶴式、カイミイラ式の歴史である。そも「水鏡」「今鏡」「増鏡」の作者は、あれほど史實にも通じ、あれほどの文才がありながら、そして前に問答物語の殆んどあらゆる資格を具備した「大鏡」といふ立派な御手本を持ちながら、どうしてかういふ不思議な作を出す事を敢てしたのであらうか、敢てしながら怪しまなかつたのであらうか。察するに、彼等は靈場に於ける老人の物語に託する歴史といふ「大鏡」の新趣向の珍らしさに打たれただけで、

更に其の内容の實質風味に留意しなかつたのであらう。而して前後の兩端に於いてのみ、切貼したやうに其の趣向の斷書ことわりがきを添へて、いしくも「大鏡」を摸し得たと思つたのであらう。試みに彼等の書振の一例を挙げると、かうである。

「水鏡」は、序文で、一人の修行者が神代以來葛城山に栖む老翁の談話を受賣するといふことを斷つて、すぐに本文に入つて居るが、本文に入つてからは、其の修行者の話が、筆記帳でも讀むかのやうに連綿とつゞくだけで、談話らしい味はひは更に無い。聽手が口を挿むこともなければ、話手が本筋を離れた愛嬌話をするといふやうな事も殆んど無い。談話式の挿話としては、聖徳太子の勝鬘經の講義を、老翁自身も聞いたといふ事を述べて、

太子は師子の床に昇つて三日講じたまひき。その有様僧の如くになむ御座し、目出たかりし御事なりき。翁は聽聞して侍りき。はての夜とぞ覺え侍る、蓮の花の三尺ばかりながるが空より降りたりし。有難かりき事ぞかし。

といふやうな、ほんの二つ二つがあるだけで、そして最後に、

此申事は翁が見聞きし分計りの事なれば、此の外に大切なる事共も、如何に多く落ち侍りぬらむとて、此の仙人の翁は、もとの道の谷の方へ歸り罷り侍りき。今かく語り申すも、尙ほ仙人の申す事にたくらべ

といふ風の、拙い文章の簡単な断書ことわりがきを添へただけである。作中の文章全體に對話問答式の味はひの殆んど全く無い事は、無い例を引くことも出来ないから、具體的の説明は見合はせるが、問答物語としての『水鏡』の價値は、これで大體察せられるであらう。

『今鏡』も、序文に於いて、これは木の下蔭もとかげの團居だまがひに於ける老嫗の物語である事を、簡單に示して後、すぐ本文に入つて居るが、全體に通じて、對話口語の味はひといふものが殆んど無い。説話者の口述以外に、聽聞者から喙を容れたのは、當代史のあらましが濟んで、これから昔話に移らうといふ九の巻の始めに、

「今の世の事は人にぞ問ひ奉るべきを、よしなき事申し侍るになむ、」などいへば、「さらば昔語りも猶ほいかなる事が聞き給ひし。語り給へ。」といふに、「おのづから見聞き侍りし事も、事のつゞきにこそ思ひ出で侍れ。」

云々といふのがあるばかり、それも「今日の事は今の新しい人達に御尋ね申すべきところを、つまらぬ事を、長々と申し述べて恐れ入ります。」と老嫗がいふので、「それでは昔話のどういふのを御聞きになりました。それを御話し下さい。」と云つた、といふだけのものであり、本文に相應

し本筋を助けるといふやうな有機的の味はひの更に無いものであるが、其の外には、最後に萬葉集や源氏物語に關する附録話の出た折に、二三のつまらない對話があるばかりである。本筋を離れた説話者自身の詞としても、

世繼は入道太政大臣みよとくの御榮え申さんとて、其の御事細かに申したれば、その後より申すべけれど、水上あらはれぬは流れの覺束なければ、まづ入道おとゞの御有様おろく／＼申し侍るべき也。

といふ程度のもので、有つても益なく、無くしても損の無い詞を加へたに過ぎぬ。説話者自身や聽聞者のこんな風の挿詞が、それも全篇に、數ヶ所見えただけで、あとは全部ひたおしの唯だの歴史になつてゐるのであるから、『今鏡』もまた、老人の昔語りといふ趣向を『大鏡』に借りて、之れを頭尾に据ゑたばかりで、問答物語の實をば更に備へてゐなかつたと云つてよい。

『増鏡』が、序を『大鏡』にし、本文を『榮華』にした不思議な作である事は、前にも述べたが、本文の中で對話式の影を見せたといふのは、第十三の末なる

「遠き人の御事は、今は何の苦しからんぞとて、少しづつ申すなり。」とうち笑ふもはしたなし。「いづら此頃は誰れか悪しくおはする。」と問へば、「いな／＼それはそら恐ろし。」とて頭をふるも、さすがをかしの一個處だけで、あとは全部ひた押しひたおしの平叙の歴史になつて居る。同じく問答物語の實を備へて

るない事は、いふまでもない。

右は走讀の際の氣づきであるから、或は見落しもあるであらう。けれども『大鏡』以外の三鏡及び『大鏡』に趣向を取つた其の他の問答物語が、『大鏡』の形を摸しただけで、精神を傳へ得なかつた事、頭尾の斷書^{ことわりがき}を大鏡式にしただけで、中味をば『大鏡』とは似ても似つかぬ平叙の歴史にしたことは、疑ひのない事である。思ふに、三鏡其の他の作者等は、其の作が或る場所に於いて、或る話手から或る聽手に傳へられたまゝを書いた物語であるといふ事を、序に於いて麗々と斷りながら、本文に入つては、すつかり忘れ去つて了つたのであらう。彼等が本筋の記述には、話された場所の記憶がなく、その文章には殆んど對話の特殊味がなく、また本筋に馴染んだ説話者聽聞者の活動がない。たゞの歴史として有るがまゝに平叙するならば、これでもよからうが、折角問答物語の趣向を宣言しながら、此の有様は、餘りに情ない事ではなからうか。

六

轉じて『大鏡』を見ると、吾等は全く新しい世界に來た心地がする。吾等はまづ對話の特殊味の巧みに發揮されたのに驚き、次ぎには、人物を遊ばせぬ手腕に驚き、而してまた説話者が本筋

の歴史と馴染ませつゝ、問答對話の特殊の態度を最初から最後まで押通した周到なる注意に驚く。私はさきに『水鏡』『今鏡』『増鏡』等に於いては、長い本文の中で、主なる説話者以外の人物の物言ふのが一二回に過ぎぬと云つたが、『大鏡』では、本文に入つて後、主なる説話者以外の人物の物言ふのが三十餘回に及んで居る。そしてそれが八卷全部の處々に程よく頒布されて居り、又それが概ね面白く活かして使つてある。他の三鏡に於いては、説話者が史談の本筋を離れて遊びの愛嬌をいふのが、一二回乃至數回に過ぎぬが、『大鏡』に於いては、それが無數と云つてもよい位に數多たび繰り返され、而してそれが本筋の史談に馴染んで、本筋を面白く活かして居る。吾等はまづ本文について『大鏡』の對話の調子を窺ふために、序文の一節を引くであらう。

誰れも少しよろしき者どもは、見おこせ居よりなどしけり。年二十ばかりなりける生侍^{なまざむらい}めきたる者の、せちに近く寄りて、侍「いでいと興ある事いふ老者^{らうじゃ}たちよな。更にこそ信ぜられね」といへば、翁二人見かはしてあざわらふ。繁樹と名のるが方さまへ見やりて、侍「ぬしは幾歳といふ事覺えずといふぬり。△この翁どもは覺え給ふや。」と問へば、「更にもあらず、一百五十歳にぞ今年はなり侍りぬる。されば繁樹は百四十は及びてさぶらふらぬど、やさしく申すなり。己れは水尾の帝^{みづの}の讓位^{じやうゐ}おはします年の正月^{しつぎ}の望^{もち}の日生まれて侍れば、十三代にあひ奉りて侍るなり。けしうはさぶらはぬ年なりな。まことと人々おぼさじ、されど父が

生學生カマダシヤウに使はれ奉りて、下蕩なれども都ばこりといふ事侍れば、目を見給へて、産衣に書きおきて侍りける。いまだ侍り。丙申ヒノチノシの年に侍り。」といふも、げにと聞ゆ。

大要を譯すると、大宅の世繼、夏山の繁樹といふ二人の翁が、百數十年前の事を眼前まのあた見たやうな話をして居るので、一座の中の、少し物のわかるやうな人達は、或は其の方をうち見やり、或は近く居寄りなどしたのであつた。其の中に二十歳はたちばかりの生侍らしい者が一人、近々と寄り添つて、「どれ／＼、これはえらい面白い事をいふ御年寄達ですな。しかし逆も信じられませんよ。」といふと、二人の翁は顔見合はせて「あツはツは」と馬鹿にしたやうに笑つて居る。侍が、繁樹と名乗つた翁の方へ向つて、「おぬしは幾歳いくつといふ事を知らないといふんですね。」ト云つて、今度は世繼の方へ向き直つて、「こちらの御爺さんは知つて居られますか。」と尋ねると、「おんでもない事。今年で一百と五十歳になりましたよ。だから繁樹は、もう百四十にはなつて居りませうが、穠むらかに、まづ知らないと申したのでせう。自分は清和天皇の御讓位遊ばす年の正月の十五日に生まれましたから、もう御代みよ十三代にお逢ひ申して居ります。まづ悪くはない年といふものですな。ほんととは誰れも思はれますまい。しかし私の父は大學寮のデモ學生で、卑しい身分ではありませんが、「都誇りみやこほりは下司げしでも字を知ると、諺にもある通りで、文字が見えましてな、私の生

年月日を、ちやんと産衣ウツキに書いておいてくれましたよ。まだ持つて居りますわ。丙申の歳で御座ります。」といふのも、尤もらしく聞こえる。

言葉が古いので一寸耳遠い嫌ひはあるが、いかにも面白く活かして書いてある。そして此の短い文章の中に於いて、澤山の參聽者一同が聽耳きみみを立て、居る事、物識の話上手の老翁二人が古代な話をして居るところへ、聽き上手の若侍がすり寄つて、その話を釣り出さうとしてゐる事、それから注意深き才筆の記者が、傍らにそれを「いかさま／＼」と興がつて聞いて居る事などが、巧みに指示されて居る。それからやがて現はれる文句に、

かくて講師かうし待つほどに、我れも人も久しうつれ／＼なるに、この翁どものいふやう……
など書いてあり、或は終りに近い部分に、

たゞし、さまでのわきまへおはせぬ若き人々は、そら物語する翁かな、と思すもあらむ。我が心に覺えて、一言ひとこともむなしき事加へて侍らば、この御寺みでらの三寶、今日の座の戒和尚じやうに請じやうぜられ給ふ佛菩薩ぶつぼさつを證あかしとし奉らむ。中にも、若わかうより、十戒の中に妄語をば保ちて侍る身なればこそ、命をば保たれて候へ。今日この御寺の、むねとそれを授け給ふ講の庭にしも參りて、あやまち申すべきならず。……」とうち言ひて、したり顔に扇うち使ひつゝ、見かはしたるけしき、ことわりに、何事よりも、公私こうしうらやましくこそ侍りしか。

など書いてあるのを見ても、『大鏡』の作者が、常に説話の行はれる舞臺を忘れずして、巧みに周囲の光景を描きつゝ、そして機轉の猿樂を演じつゝ、その説話を活かさうとしたことが解る。細かい用語について見ても、繁樹が年を「百四十」と云つたのに對して、自分の年を「一百五十歳」と云つたのは、「一」の字を加へることによつて、老人が物々しき物言ひをする調子を出さうとしたのであらう。また

けしうは侍らぬ年なりな。

などいふのも、老人の語氣を寫し出だす爲めの特別用語であらう。私は、初め『大鏡』に、此の句を始め、

これはあるべきことかはな。

いかに悔しくおぼしけむな。

古今にも侍ることどもぞかいな。

といふやうな、をかしな語の繰り返されるのを見て、此の作者のマンネリズムともいふべき氣障な下品な筆癖であると思つてゐるが、後に思へば、これは今の言葉でいふと、「まづ悪くはない年といふもので御座るな」と云つた風の、老人らしい口氣、改まつた中に滑稽味を含んだ老人の語

氣を寫したので、缺點どころか、寧ろ一種新式の表現法ともいふべきものであつた。同じ序文中なる

しかの如くに入道殿の御榮えを申さむと思ふ程に……

の「しかの如くに」なども、やはり同じく百五十歳翁の四角張つた滑稽味を現はす爲めに、わざと用ゐた詞で、むしろ王朝の風雅味を缺いた所を稱すべきものであらう。或は

(良房の)御兄の長良の中納言、ことの外に越えられ給ひけむ折、いかばかり辛う思されけむ。又世の人も、

との外に思ひ申しけめども、其の御末こそ今に榮えおはしますめれば、行末はことの外にまさり給ひけるものを。

といふ如き、或は

同じ帝と申せども、御後見多く、頼もしくおはします。御祖父にて只今の入道殿下、出家せさへ給へれど、

世のおや一切衆生を一子の如くはぐくみおはします。第一の御伯父にて、只今の關白左大臣、一天下をまつりごちておはします。次ぎの御をちと申すは内大臣にて左大將かけておはします。次ぎの御をちと申す

は、大納言東宮大夫、中宮權大夫、中納言など、さまざまにておはします。かやうにおはしましあへば、御後見多くおはします。

といふが如き、短い間に鹿爪らしい同語を幾度となく繰り返すので、私は、初めは、語彙の貧し

ふのである。

す同じ振分け臺詞を使つたのに、遙か後の部分に、こんなものもある。

「この侍も、いみじう興じて、侍「繁樹が女どもこそ、今少しこまやかなる事どもは語られぬ。」といへば、

妻「我れは京人にて侍らず、高き官仕なども侍らず。若くより此の翁にそひて候ひにしかば、はかしく

しき事をば見給へぬものをば。」と答ふれば、侍「いづれの國人ぞ。」と問ふ。妻「陸奥國安積の沼にぞ侍り

し。」といふ。侍「いかで京には來しぞ。」と問へば、妻「その人とはえ知り侍らず。歌よみ給ひし北の方お

はせし守の御任にぞ、上り侍りし。」といふに、中務の君にこそと、聞くもをかしくなりぬ。侍「いといたき

事かな。北の方を誰れとか聞えし。詠みたまひけむ歌はおぼゆや。」といへば、妻「その方に心も得で、お

ぼえ侍らず。たゞ上り給ひしに、逢坂の關におはして詠み給へし歌こそ、處々おぼえ侍れ」とて、

都には待つらむものを逢坂の

關まで來ぬとつげややりました。

など、いとたどくしげに語るさま、誠にたとしへなし。繁樹「この人をば人と覺えずとよ。さやうの方は

覺ゆらむものぞ。世間だましひはしも、いとかしこく侍るを取りどころにて、え去り難くおぼえ侍るなり。」

といふ。

繁樹は、その妻が中務の君のやうな高名の女歌人を知らなかつたと云つたので、妻に向つては、

「あの御方の名を知らぬといふのか。これは怪しからん、さういふ高名の御方の御名は、よく知つて居るべきものだのに。」といひ、そして若侍等に向つては、「愚妻はこの通りの不調法者で御座るが、世渡りの腕がツノ、なか／＼優れて居りますのでな、つい離れかねて居るので御座ります。」といふのを、隔てずに連記したのである。かういふ文章は、無心に讀過すれば、わけが解らなくなる嫌ひがあり、解つたところで、輕々に看過され易いものであるが、これが此の問答物語の元祖たる猿樂好きの作者の特殊なる文致であることを思ひ、また作者が、斯ういふ處を朗讀する時には、必ず、或は間を置き、或は顔を向けかへ、或は詞の調子をかへて、得意の鼻をうごめかしたことであらう思ふと、私はかういふところに、特別な深い味を見出ださずには居られぬのである。

七

『大鏡』の作者は『大鏡』に於いて、歴史を書かうと思ふと同時に、物語即ち小説をも書かうと思つたのであらう、同時に劇をも傳説集をも書かうと思つたのであらう。言ひかへれば、此の一篇に於いて、六國史と、源氏物語と、今昔物語と、戯れた人長や傀儡師の役目とを同時に演じ

ようとしたのであらう。けれども彼れが第一の誇りを感じ、之れを中心として他の凡てを統一しようと思つたものは何かと云へば、それは劇的の對話問答體で、彼れは此の體式の斬新巧妙なる活用によつて、眠れる歴史を活躍させ、顯はしにくき忌諱の真相をもほめかさうとしたのに相違ない。而して之れを仕遂げる祕策は數個の傀儡を使用し、之れを通ほして我が空想する幻影を實現するに限ると思つたのに相違ない。

謂はゆる彼れの傀儡は、大宅世繼、夏山繁樹、繁樹が妻、若侍及び記者の五人である。彼れは是等の五人をば遊はせずには間斷なく使用した。彼れが五人をば遊はせずには、譬へば名將の士卒を指揮するやうで、五人各々に其の所を得させた。そして其の使役ぶりには綽々として餘裕があつた。主役は無論、百五十歳の第一翁大宅世繼である。彼れが八卷にわたる長い史談を滔々と語り進める中に、まづ讚歎の聲を放つて無邪氣な合槌を打つものは、第二翁たる夏山繁樹である。彼れは先づ「しかく」（ヒア）と叫んで、まことに申すべき方なくこそ、興あり、面白く侍れ。など云つた。彼れのシカく！と呼ぶ所には、何となく故の貴族院の山脇玄翁を思ひ出させるものがある。世繼の説話が我が舊主の貞信公忠平に及ぶと、彼れは昂奮した態度を現はし、

まづ後の人の顔うち見わたして、それぞ謂はゆる此の翁が實の君、貞信公におはします。」

と云つて、得意氣に扇を使つた。——作者は歴史の講話の中で、その人形に悠々と芝居をさせて居るから、面白い。——世繼が九條殿師輔が飯室行きの事を話すと、

横川の大僧正の御房にのぼらせ給ひし御供には、繁樹も参りて侍りき。

など云つた。自分の妻が、高名の女歌人を知らぬといふと、「それは怪しからん、さういふ高名の人を知らぬといふ事があるものか。え、皆様、愚妻はかくの通りの不東者ですが。唯だ世渡りと身上持ちが馬鹿にうまいので、つい離れかねて居りますやうな次第で」などと、愛嬌をいふ。そして堂々たる史談の間に、これが少しも邪魔にならぬばかりか、内容によく馴染んで、話の進行を助けて居るから面白いのである。

謂はゆる生持めきたる若者は、知識に渴する注意深い物識の辯者として寫されて居る。彼れは世繼等が物識の老人だと見ると、慇懃にすり寄つて談話を求めた。老人が自分の年齢を知らぬといふと、年號を繰つて算へ出した。世繼の説話に誤りがあるか、或は月並な世間の噂話をそのまま語りでもすると、彼れはすぐ異説として自分の見聞を提出した。例へば、世繼が小一條院の東宮を辭退された事について、世間では元方の民部卿の怨靈の祟りだと云つてゐるなどと云つて、

道長の奸計に蓋をしたやうな言ひ振りをすると、彼れはすぐに

それもさるべきなり。此の程の御事どもこそ、ことの外に變はりて侍れ、なにがしはいと委しく承りたる事ども侍るものを。

と云つた「それはそれで結構ですが、此の間の消息は、私の聞く所とは大分違つて居るやうに思はれます。私は別に頗る委しく承つて居る事がありますがね。」などと、翁にも花を持たせながら、自分の所見をも披瀝したいと思ふ素振を見せると、世繼は鷹揚に、

「さも侍らむ。傳はりぬる事は、いで承はらばや。習ひにし事なれば、物の尙ほ聞かまほしく侍るぞ。などいふ。」さうも御座らう。言ひ傳へられた事とあらば、早速承りたいもので。私は史談好きで、聞き馴れて居るから、さういふ異説は尙ほの事承りたいので御座るぞ。」と、人の好い翁の聞き好きな態度に、つい釣り込まれて、若者も興に乗つて、

事の様體は、三條院のおはしましつる程こそあれ……

「事の仔細はかういふ次第で。エ、東宮の御父帝三條院御在世の中こそ、或筋の迫害の手も及ばなかつたが……などと述べ始める。と、まあ斯ういふ調子である。或は兼通が最後の除目について、世繼が「此の大臣、すべて非常の心おはしまし」などと、兼通を難じて兼家をかばふやうな

口振を見せると、侍はすぐに口をはさんで、「私はまた堀川殿（兼通）が東三條殿（兼家）の官職を奪られた事を、道理のやうに承つて居ります。私の祖父や父は堀川殿に年久しく仕へて居りましたので、その縁で事細かに承つて居りますが――」

東三條殿の官職取り奉らせ給ひし程の事は、ことわりとこそ承りしか。おのれが祖父おやは、かの殿の年頃の者にて侍りしかば、細かに承りしは……

「されば東三條殿の官職を奪られた事も、堀川殿のひがんだ御心から出た事では御座りません。真相はまづ此の通りで」などといふ。世繼も侍も無論作者の絲に引かると傀儡である。彼れは必ず藤原宗家の忌諱に觸れさうな事を正面から直言するのが安全な道でないと思ひ、之れを假想人物の問答に託するのが、明哲身を處するの道であり、楯の両面を示す所以であり、同時に叙述を面白くする所以であると思つて、此の特別な叙述描寫の方法を取つたのであらう。

八

作者は問答物語の實を擧げ、其の特別な趣致を豊かにせんが爲めに、多くの史實傳説を傀儡人物の經歷に絡むことを忘れなかつた。彼れは基經に擁立された光孝天皇の俄かの御即位騒ぎを

寫すにも、子供の折、稻荷詣からの歸るさに見た事として書いて居るが、其の書き振りも頗る活きたもので、「私の家は宮の御住居のすぐ近くであつたが、歸つて來ると、家の近所に眞黒に人だかりがしてゐるのではないか。びつくりして、さては火事かと風上を見たが煙が立たぬ。さては大捕物で、大泥棒か謀反人でもつかまつたのかと思つて、傍の人に尋ねると、式部卿の宮様が帝位に御即きなさるについて、此の騒ぎだと知られました。」といふ様な調子である。餘計な事を云つて居るやうではあるが、六國史や榮華位に馴れた目には破天荒の妙趣向であつたであらう。紀貫之が娘の鶯宿梅の逸話も、同じ調子に取扱はれて、その梅は、繁樹が京中をさがしてやうやく見出だして掘り取つて來たのであつたが、一生の失敗此の事にとゞめたりなどと云つて居る。いとをかしう哀れに侍りし事は、この天曆の御時に、清涼殿の御前の梅の木が枯れたりしかば、求めさせ給ひしに、某のぬしの藏人にていますがりし時、承りて「若き者どもは、え見知らじ、汝求めよ。」と宣ひしかば、「京まかりありきしかども侍らざりしに、西の京のそこ／＼なる家に、色濃く咲きたる木の、やうたい美しきが侍りしを、掘り取りしかば、家あるじの、「木にこれ結びつけてもて參れ。」といはせ給ひしかば、もて參り候ひしを、帝「何ぞ」とて御覽じければ、女の手にて書きて侍りける。

勅なればいとをかしし鶯の、宿はと問はどいかと答へむ。

とありければ、怪しく思召されて、何者の家ぞと尋ねさせ給ひければ、貫之のぬしの御女の住む所なりけり。帝「遺恨のわざをもしたりけるかな」とて、あまえおはしましける。繁樹今生の辱詭は、これや侍りけむ。さるは思ふやうなる木もて参りたりとて、衣かづけられたりしも辛くなりなきとて、こまやかに笑ふ。繁樹はまた、紀貫之が紀の國行きの供をして蟻通の明神の靈験を見、また貫之が歌の威徳を目のあたり見た事を語つて居る。

作者は史實を傀儡人物の經歷に絡んだばかりでなく、往々に傀儡人物をして、史實に諧謔された挿話や評言など迄を加へさせて興がつて居る。これは一つは問答對話の味はひを發揮するため、一つは例の滑稽味の添加によつて讀者の氣分を軽くするためであらう。例へば閑院の大將朝光は子まである中の美しい妻を去つて、枇杷の大納言延光の寡婦なる、年老つた醜女の許に通つた。この新しい妻は、三十人ばかりの女房に美装させて大將を送り迎へる。冬は火を澤山に埋めて薫物をして、好い香ひの寝衣を暖かにして着せる。火鉢には銀の提子二十ばかりを据ゑて、様々の藥湯をすゝめる。そして寝む時には三四人の女房が大きな熨斗を持つて來て、床の上を暖かに押し撫でて寝させる、といふ恐ろしい取持ちぶりであつたが、當の女はといふと、年は大將の母親と云つてもよい位の四十餘歳で、色はあくまで黒く、額には痘痕の花模様がついてゐて、おまけ

に髪が藻草のやうにぢぢれてゐるが、此の人が常に練色の衣に白い袴を着けて居たといふから笑はせる：といふやうな當時の公卿生活史の一面を描いた後に、

やむごとなき人だにこそ、かくはおはしけれ。あはれ翁らが心にだに、いみじき責を降らして扱はむといふ人ありとも、年頃の女どもを打ち捨て、まからむは、いとほしかりぬべきに、さばかりにやむごとなくおはします人は、不合におはすといふとも、翁らが宿のやうに侍らむやは。この今の北の方の事により、世の人にも軽く思はれ、世覚えも劣り給ふらし。

といふやうな、思ひ切つて扱卸した批評をしてゐる。更にひどいのは高貴の御身に關する重々しい記事に夫婦の間の惚け話などを書き添へた事で、彼れは道長の長女の皇太后彰子が入道された事を記した折に、世繼の妻が「妾もかういふ機會に髪をおろしたいと思ふ。」と云つたので、「それもよからうが、但しその後には、代はりに若い娘ツ子を入れるが、承知か。」と云つてやつた、などいふ事まで面白をかしく書いてゐる。

世の中の人の申すやう、大宮入道せしめ給ひて、太上天皇の御位にならせ給ひて、女院となむ申すべき。この御寺に戒壇たてられて、御受戒あるべきなれば、世の中の尼ども参りて受くべきなりとて、悦びをこそなすなれ。この世繼が妻ども、かゝる事を傳へ聞きて申すやう、「おのれも其の折にだに、白髪しほがみの裾すそそぎ捨てむとなむ、何か制する。」と語らひ侍れば、「何せむにか制せむ。たゞしさらむ後には、若からん女の童わらわ求めて、

得さすばかりぞ。」となむ言ひ侍れば、「我が姪めいなる女ひとりあり。それを今より言ひ語らはむ。いとさし離れたらむも情なき事にもぞある。」と申せば、「それあるまじき事なり。近くも遠くも、身のためにおろかならむ人を、今更によすべきかは。」となむ語らひ侍る。

これがその本文であるが、大意は「老妻が、此の事を傳へ聞いて申しますのに、「私も今まで剃髪しはつの機會がなかつたが、せめてかういふ機會になりとも、白髪しほがみの裾すそを切り捨て、そぎ尼にならうとネイ：何を御制ごせいめなさるのですか。」と申しますので「何の爲めに制せいめ立てなどをするものか。但し、お前が尼になつたら、その後へ若い美しい女おんなの子をさがして来て、可愛がつてやるばかりさ。」と申しますと「それなら丁度よい、私に姪めいが一人ある、それに是れから行つて相談をして見ませう。餘り縁の遠い女も面白くありませんからね。」と、かういふのであらう。

但しこゝで、も一つ特に説明しなければならぬのは、「白髪しほがみの裾すそそぎ捨てむとなむ」から「何か制する」へ移る所に含められた芝居しげがかりの對話の妙味である。本來この「捨てむとなむ」は、後を省略したので、お婆おばあさんが「白髪しほがみの裾すそをそぎ捨てようとなむ、思ひますが、いかゞでせう」と云はうとしたのであつたが、丁度「捨てむとなむ」まで云つた時に、翁おきなが變な薄ら笑ひをして、手でも振つて、マア止せといふ素振すぶりを見せたのであらう。そこで婆おばさんが、言ひ續けようとした

詞を中斷して「エ、變な手つきをして何故反對するんです。」と詰つたのである。即ち「私もせめて、かういふ機會に白髪の裾をそぎ捨てようとネイ……エ、何故止めるんです？」と云つたから、「何の制め立てなどをするものか。但し其の後釜には若い女の子を入れるが、承知かい。」と、かう云つてやつたといふのであつて、管々しい説明はしてゐないが、解つて讀めば實に立派な劇作家の筆を以て活描活寫をしてゐるのである。斯様なところからして、私は「大鏡」をば本物の劇（謠曲狂言等）が現はれる以前に於ける最も演劇的な文學と思ひ、「大鏡」の作者をば本物の劇作家（觀阿彌、世阿彌等）が出る以前に於ける最も演劇的な作家と思つて居るのであるが、一體彼れはどういふ所から、斯ういふ調子を、對話や身振などの微妙な影を寫すしやれた筆致を學び得たのであらうか。それは今の所はつきりと説明すべくもないが、若し横道の説明を許されるならば、かういふ猿樂氣分と其の描寫の調子とは、已に微かながら、竹取物語邊に現はれ始めて居るやうに見える。例へば『竹取』の右大臣阿倍御大人が、唐土の貿易商王卿から火鼠の裘を送つて来て、追加の黄金五十兩を請求し、其の金を賜はらば裘を返して賜はれと云つて來たのを見て、雀躍してかう云つたと書いてある。

何仰す。今金少しの事にこそあんなれ。必ず送るべき物にこそあんなれ。嬉しくしておこせたるかなとて、

唐土の方に向ひて伏し拜み給ふ。

在來の解釋は「何おぼす」と讀んで、違つた見方をして居るが、私は、これは餘りのうれしさに、俳優のやうな身振聲色をしたといふ猿樂振を寫したものであると思ふ。もしこれを後世の狂言風に譯すならば、

何と仰せられる。もう極少々の金の事ぢや。きつと送り申すで御座らう。尊や／＼と、唐土の方に向つて、

「歸命頂禮王卿様々」と云つて伏し拜まれた。

といふやうな味であらう。また、『土佐日記』などにも、やはりかういふ芝居調子の猿樂振が見えて居る。例へば、住吉の濱で暴風に逢ひ、大事の鏡を投げ入れて海神の心を和めたといふ所の、船頭との問答に、

機取のいはく、この住吉の明神はれいの神ぞかし。ほしき物ぞおはすらむ。とは今めくものか。さて幣を奉り給へ、といふに従ひて幣たいまつる。

といふ文がある。此の意味については、いろ／＼の説があるが、私は「とは今めくものか」を貫之の詞とし、前後の二句を機取の詞とし、而して「おはすらむ」から「とは今めくものか」への移りをば、一種のワタリ臺詞で、謠曲に於けるロンギのやうな掛合だと考へて居る。即ち大體の意味は、

舟人「この住吉の明神様は恐ろしい靈の神様で、例の、物が欲しくなると、海を荒らして人を威すといふ神様ですよ。この通り俄かに波風の立つたのを見ると、きつと何か欲しい物が御有りなさるのでせう。貫之「とは又當世風に食いなさるものだね。舟人「エ、だから幣を御上げなさいといふのです。」

といふので、それを貫之の才筆で、簡潔に運んで書いたのであらう。かやうに王朝の初期にも、已にこんな洒落れた劇趣味の對話振などを寫したのもあつた。しかしそれは断片的、象嵌的にほんの一鎖試みるといふだけであつたが、かういふ對話の調子や猿樂氣分を大仕掛の大作全體に纏めて現はさうと試みたのが『大鏡』であつたやうに思はれる。そして眞面目な史談に私人的の滑稽を絡み、皇太后様御入道の御勝事に夫婦同士の惚け争ひを交へる事の可否は別として、とにかく對話滑稽の趣味文致を、これ程までに表現した『大鏡』の作者の手腕は、偉いと云はねばならぬと思ふのである。

『大鏡』の作者が劇的對話の趣味に重きを置いて問答物語の本領から目を離さなかつた事は、世繼が談話の切れ目／＼に用ゐて興を添へた挨拶詞にも窺はれる。例へば、

「しかばかり契りしものを渡り川、かへるほどには忘るべしやは」とぞ詠み給へりける。いかばかり悔しくおぼしけむな。」

は、「まあどれ程残念に思召したことでせうな、ねえ皆様」といふので、聴衆に向つて同情を要める調子であり、對話問答であることを明らかに見せた詞である。或は、

「この侍従大納言殿(行成)こそ、備後の介として、まだ地下におはせし時、藏人頭になり給ふ。例いと珍らしき事よな。」

なども、「地下の卑しい身分から、すぐに藏人頭になるなんて、随分破格の、珍らしいことで、すわな。」といふ味はひで、聴衆に目を注いで確めた心持であらう。

花山院が、風流の御趣味があつて、戯畫などを面白く書かれた事を述べた後に、

「いづれもく、さぞありけむとのみ、あまましろこそ候ひしか。この中に御覽じたる人もやおはしますらむ。

「どれもこれも皆眞に迫つて、いか様と思はれましたよ。多分此の中には御覽になつた御方もおありでせうが。」などは、一寸した事ながら、舞臺を記憶し、問答物語の本領を自覺した者でなければ、書けぬ事であらう。無論是ればかりを見ては、何ばかりの手柄とも思はれぬが、他の三鏡の藝のない書き方を見た後に、之れを見ると、さすがに元祖の『大鏡』の作者は、と驚かれるのである。

其の他、或は「……とてほゝゑむ」といひ、「……などいひて鼻うちかむ」といひ、或は「皆

人見聞き給ひし事なれど猶ほ返すくもいみじく侍りしものかな。」といふ類ひ、或は老の波に、言ひ過ぎしもぞし侍ると、けしきだちて、この程はうちさゝめく。

「年のせい、言ひ過ぎがあるかも知れませんがと、一寸はにかんで、一段と聲を低くした。」といふ類ひ、いづれも段落の關節々々で、對話文學の特色を發揮し、文勢を引立てる爲めに工夫されたもので、劇的對話の本領に關する自覺なき作者の企て得ぬ所であらう。

『大鏡』の作者の對話振の文章の中には、なか／＼調子の高い、莊嚴なるものもある。例へば一寸した止めの文句に、

此の大臣の御末、かくなり。

かゝれば此の二とこの御有様、かくの如し。

といふ類ひの文句も、其の一つであるが、殊に、道長を頌し、道長の建立にかゝる無量壽院を讃歎した左の一節の如きは、最も著しき例の一つであらう。

太政大臣道長のおとゞは、太皇太后彰子、皇后宮妍子、中宮威子、東宮の御息所嬉子の御父、當代、並に東宮の御祖父におはします。こゝらの御中に、后三人並べすゑて見奉らせ給ふことは、入道殿より外に聞こえさせ給はさんめり。關白左大臣、内大臣、大納言二人、中納言の御親にておはします。さりや、聞召しあつめよ、日本國には唯一無二におはします。

まづは造らしめ給へる御堂などの有様、鎌足の大臣の多武の峯、不比等の大臣の山階寺、基經の大臣の極樂寺、忠平の大臣の法性寺、九條殿の楞嚴院、あめの帝の造り給へる東大寺も、佛ばかりこそ大きにおはしますめれど、猶ほ此の無量壽院にはならび給はず。まして餘の寺々はいふべきにあらず。大安寺は、都率天の一院を、天竺の祇園精舎にうつし造れり。天竺の祇園精舎を、唐土の西明寺にうつして造り、もろこの西明寺の一院を、この國のみかどは大安寺にうつさしめ給へるなり。しかあれども、只今は猶ほ此の無量壽院まさり給へり。南京のそこばくの多かる寺ども、猶ほあたり給ふなし。恒徳公の法住寺いと猛なれど、猶ほ此の無量壽院すぐれ給へり。難波の天王寺など、聖徳太子の御心に入れ造り給へれど、猶ほ此の無量壽院まさり。奈良は七大寺十五大寺など見くらぶるに、なほ此の無量壽院いとめでたく、極樂淨土のこの世に現はれけるよと見えたり。かるが故に、この無量壽院も、思ふに、おぼし願すること侍りけむ。

佛經の經典などから得て來た文致であらうか、異つた對照物を置きかへさし換へては、疊みかけ／＼唯だ一つの無量壽院をせり上げた趣、反覆する中に變化があり、變化の中に漸層の妙があつて、大濤の打つ様にうねりうねつて一つの目的物を巨大化した趣、莊嚴な個々の語と、莊嚴な全體の結構とが馴染み合つて、渾融一如の妙味を圓成して居る趣、まことに、大雄辯家の堂々たる大演説でも聽くやうな心地である。私は、『大鏡』の作者が、好笑、優美、壯大、あらゆる方面の長所を兼ね備へて、單に對話問答の技巧の方面だけについて見ても、ふざけ散らす可笑しさ

から、優雅なる應答、莊嚴なる宣傳に至るまで、そのいづれをも、これほど立派に寫し得たことを、我が文學史上の珍らしい現象だと思ふのである。

右の無量壽院の頌辭は對話調といふよりは、むしろ一種の演説調ともいふべきものであるが、相人が道長を相した條の左の一段の如きも、これと同じ味はひのもので、古文の中では類ひ少なき一種の名文といふべきものである。

故女院の御修法して、飯室の權僧正のおはしまし、伴僧にて、相人の候ひしを、女房どもの呼びて相せられける序に、「内大臣殿(道隆)はいかゞおはする。」と問ふに、「いとかしこうおはします。天下取る相おはします。中宮大夫殿(道長)こそいみじくおはします。」といふ。又粟田殿(道兼)を問ひ奉れば、「それもいとかしこうおはします。大臣の相おはします。またあはれ中宮大夫殿こそいみじくおはします。」といふ。また權大納言殿(伊周)を問ひ奉れば、「それもいとやむごとなくおはします。雷の相おはします。」と申しければ、「いかづちは如何なるぞ。」と問ふに、「きははいと高く鳴れど後とげのなきなり。されば御末いかゞおはしますと見えたり。中宮大夫殿こそ、限りなく際なくおはします。」と、他人を問ひ奉る度には、この入道殿を必ず引き添へ奉りてほめ申す。「いかにおはすれば、かく度ごとには聞こえ給ふぞ。」といへば、「第一の相には虎子如渡深山峯なりと申したるに、いさゝかも違はせ給はねば、かく申し侍るなり。この嶮は、虎の子のけはしき山の峯を渡るが如しと申すなり。御貌容體は、たゞ毘沙門の勢を見奉らむがやうにお

はします。御相かくの如しといへば、誰れよりも勝れ給へり。」とこそ申しけれ。

反覆、漸層、いろ／＼の趣致を備へた上に、相人の應答振と同時に、世繼の紹介振までを見せ、非常に面白い文である。

九

私は尙ほ二三の簡単な實例によつて、「大鏡」の作者が、感じの鋭敏であつた事、描寫の巧みであつた事、及び文學的素質の優れてゐた事を證明したいと思ふ。まづ初めに引かうと思ふのは、——中、關白道隆及び關白道兼の兄弟が、疫病の爲めに相踵いで歿した後、一條天皇が、定子皇后の愛に引かれて、道隆の長子にして皇后の兄なる内大臣伊周を關白に任じようとなされた。帝の御母詮子女院は、道長を關白にしようとして、帝を諫められたが、帝は之れを避けて居られた。その中に、或日女院は帝を夜の御殿に要して、膝詰の諫言を試みられた。道長は、歎きの間なる上の御局に控へて、結果いかにと固唾を呑んで待つて居る。と、そこへ女院が、やうやく帝を説得して、言質を取つて出て來られたが、目は泣きつゝ、そして口は笑みつゝ、「もう大事が成就しましたぞ」と云つて、兄なる道長と相見て微笑されたといふ事を書いた一節である。

女院は入道殿(道長)を取りわき奉らせ給ひて、いみじう思ひ申させ給へりしかば、帥殿(伊周)はうとくもてなさせ給へりけり。帝、皇后の宮を懇ろに時めかさせ給ふゆかりに、帥殿は明暮御前に候はせ給ひて、入道殿をば更にも申さず、女院をも、よからず事に觸れて申させ給ふを、おのづから心や得させ給ひけむ。いとも本意なき事に思しめしける。ことわりなりな。入道殿の世を知らせ給はむ事を、帝いみじう遣らせ給ひけり。皇后の宮、父おとど(道隆)おはしまさで、世の中を引きかはらせ給はむ事を、いと心苦しう思召して、粟田殿(道兼)にも、とみにやは宣旨下させ給ひし。されども女院の、道理のまゝの御事を思召し、又帥殿をばよからず思ひ聞こえさせ給ひければ、入道殿の御事を、いみじう遣らせ給ひけれど、女院「いかでかくは思召し仰せらるゝぞ。大臣越えられたることだに、いといとほしう侍りしに、父大臣(道隆)のあながちに侍りし事なれば、いなびさせ給はずなりにしにこそ侍れ。粟田殿(道兼)にはせさせ給ひて、これにしも侍らざらむは、いとほしきよりも、御爲めなむいと便なく、世の人もいひなし侍らむ。」など、いみじう奏させ給ひければ、むづかしうや思召されけむ。後には渡らせ給はざりけり。されば上の御局に上らせ給ひて、こなたへと申させ給はで、われ夜の御殿に入らせ給ひて、泣く／＼申させ給ふ。その日は、入道殿は、上の御局に候はせ給ふ。いと久しう出でさせ給はねば、御胸つぶれさせ給ひける程に、とばかりありて、戸押しあけてさし出でさせ給へりける。御顔は赤みぬれつやめかせ給ひながら、御口は心よくゑませ給ひて、「あはや宣旨下りぬ」とこそ申させ給ひけれ。

今まで昂奮して、涙を流し、眞赤になつて諫めて居られたのが、思ひのまゝに定まつたので、

口邊に微笑の影の漂うた様子、餘りの嬉しさに口は既にゑみながら、眼の涙と頬の紅潮とがまだ跡を収めかねた様子、悲しみと悦びとが不意に出會はした、極りのわるいやうな心持が、顔の上

影を見せた微妙な様子が、實に面白く描き出されてゐる。此處を『愚管抄』には、

いたく申されけるを、うるさくや思召しけむ、朝餉を立たせ給ひて、日の御座の方におはしまして、藏人頭俊賢をお前に召して、御物語ありけるところへ、夜の御殿の妻戸をあけて、女院は御目の邊たゞならで、いかに世の爲め君の爲めよく候べき事をかく申し候をば、開食し入れぬさまには候ぞ、この儀にさぶらはゞ、今は長くかやうの事も申し候まじ。心憂く口惜しき事に侍るものかなと申させ給ひける時、居直らせ給ひていかで是れほどに仰せられん事をば否み申し候べき。早く仰せ下しさぶらはんと、内の御けしきもさめやかになりて仰せられければ(御氣色も爽かに?)……御堂は大納言の左大將にて、この左右承らんとてさぶらひ設けておはしけるに、女院は御袖にては涙をのごひて、御目は泣き御口はゑみて、早く仰せ下されぬぞと仰せられければ、畏りて出でさせ給ひにけり。

と書いてある。泣き笑ひの條は、多分『大鏡』によつて、それに多少の變更を加へたのであらう。「御目は泣き御口は笑みて」も面白いが、やはり、『大鏡』の「御顔は赤みぬれつやめかせ給ひながら、御口は心よくゑませ給ひて」の方が拔群に秀でて、限りなき床しさがある。「目」と云はずして「御顔云々」と云つたのも面白く、御口の方に「心よく」の一語を加へたのも非常によく利

いて居る。これはほんの一例であるが、『大鏡』の作者が、事の心核を寫し、心の影を寫す上に、非凡の技倆を持つてゐたことは、之れによつても知られるであらう。

『大鏡』の文章の、力があり趣のある事、及び作者が人の性格を寫す上にも、非凡なる手腕のあつたことを示す一例として、左に大納言左大將であつた時の道長が、兄なる關白道隆の前に於いて、甥の内大臣伊周と射を争つた一段を引いて見る。

かく世の中の光にておはします殿(道長)の、一年ばかり物をやすからず思し召したりしよ。いかに天道御覽じけむ。さりながらも、いさゝか引けし御心やはわたらせ給へりし。おほやけさまの公事作法ばかりには、あるべき程に振舞ひ、時違ふることなく勤めさせ給ひて、内々には、所もおき聞こえさせ給はざりしぞかし、帥殿(伊周)の南の院にて、人々集めて弓遊ばしに、この殿(道長)波らせ給へれば、思ひかけず怪しと、中の關白殿おぼし驚きて、いみじう饗應し申させ給ひて、下臈におはしませど、さきに立て奉りて、まづ射させ奉り給ひけるに、帥殿の矢數、今二つ劣り給ひぬ。中の關白殿、又御前に候ふ人々も、「今二度のべさせ給へ」と申して、のべさせ給へりけるに、安からずおぼしなりて、「さらばのべさせ給へ」と仰せられて、又射させ給ふとて、仰せらるゝやう、「道長が家より帝后立ち給ふべきものならば、この矢あたれ」と仰せらるゝに、同じもの中心にはあたるものか。次ぎに帥殿射たまふに、いみじう臆し給ひて、御手もわななくけにや、的のあたり近くだによらず、無邊世界を射給へるに、關白殿色青くなりぬ。また入道殿射させ給ふ

とて、「攝政關白すべきものならば、この矢あたれ」と仰せらるゝに、初めと同じやうに的の破るゝばかり射させ給ひつ。饗應しもてはやし聞こえさせ給へる興もさめて、事にがくなりぬ。父大臣、帥殿に「何か射る、な射そ〜。」と制させ給ひて、事さめにけり。入道殿矢もどして、やがて出でさせ給ひぬ。

生來の負けじ魂が、引きつゞく不運にもめげず、公邊の義務は尋常に盡くしながら、私人關係に於いては一步も人に所をおかずして、常に人臣最高の境地を希望して居るといふ道長の根本性格が、抽象的の批評と具體的の實證と相待つて、浮み出でるやうに鮮かに寫されてゐる。伊周が矢二本負けて居るのに負け惜しみをして、道隆及び其の一門が衆を恃み位を頼んで無理を通さうとする處、道長が黙つて其の無理を通させながら、更に高き意味の勝利を見せる處、道長對伊周の競争がいつの間にか、道長對中、關白家の競争と變はつて、運命の暗示に怖ぢて色の青ざめた兄の道隆が伊周の二の矢を制する處、一座の白け渡つた中に、道長のみは悠々と矢を返して立ち出でる處、そして是等の事件の推移する間に、人情の機微を巧みに絡んで、短い文句の中に、活き／＼と寫し出だした處、何といふ簡潔、入神の筆であらう。殊に道長が「道長が家より帝后立ち給ふべきものならば、この矢あたれ」「攝政關白すべきものならば、この矢あたれ」と、二度叫んで、的の破れるばかりに射たといふ一方では、伊周が心臆して「無邊世界を射た」といふあたり

『王朝』文學とは、いふまでもなく、『源氏物語』『枕の草子』『古今集』『竹取』『伊勢』『土佐』『大鏡』『榮華』などを思ひ出させる平安朝四百年の假名文學のこと、「表現美」とは、これもいふ迄もなく、思想が言葉に現はされた形の美しさの意味である。この形の美しさには、單複の差別からいへば、一個一個の語に現はれた美もあるであらう、一句一節の上に現はれた美もあるであらう、一章一篇の全組織の上に現はれた美もあるであらう、方式の差別からいへば、正面描寫の美もあらう、側面描寫の美もあらう、眞直に寫した味の美もあらう、曲らせくねらせて寫した味の美もあらう。その他、明寫の美、隴寫の美、全面露出の美、一部省略の美、反覆の美、飛躍の美など、いろ／＼あるであらう。また題材の差別からいへば、自然描寫に見えた特別の美もあらう、人情描寫に見えた特別の美もあらう。その他愛慾の現はれに見えた美、道義の現はれに見えた美、戦争の現はれに見えた美など、いろ／＼あるであらう。

私はこの小論に於いて、平安朝文學の表現に關するこれらの全面を包括して、一種の組織ある説明を試みたいつもりであつたが、昨今義理のある急ぎの書きものに、隙もなく追はれて居る有

様なので、今度はやむを得ず、その中のほんの一部分、恐らく今迄世に見残されてゐたと思はれる、そしてそれは平安朝文學の理解の爲めに、可なり大切だと思はれるやうな二件だけを取り出だして、説明し例證して見たいと思ふ。

まづ序として、此の時代の文學に見えた二つの主なる表現美を説いて見る。

二

王朝文學のおもなるものに通じて最も主要なる特色をなして居る表現美の第一は、物事すべてを美しく寫し做すことで、云はゞ美化式ともいふべき一種の風流な癖である。王朝の作家はその題材として、優美なるもの、情的趣致のあるもの、例へば花鳥風月戀無常といふやうなものを選んだ。そして之れを現はすには、美しき單語を選び、また語句の結合をも、全體の組織をも優美にしようとしてつとめた。優美ならざる嫌ひのあるものをば、或ひは換質換位の手段により、或ひは省略、暗示、添加、曲折の工夫によつて、之れを美しく描き做さうとした。その委しき説明は他日に譲るが、左に掲げた二三の例が、一通り此の論を證據立てゝくれるであらう。

手をとらへ給へれば、いと馴れて疾く、

朝霧の晴れまも待たぬけしきにて花に心をとめぬとぞ見る。と公事にぞ聞こえなす。をかしげなる侍童の、姿このましようことさらめきたる、指貫の裾露げけに、花のなかにまじりて、朝顔折りて参るほどなど、繪に書かまほしげなり。(源氏物語、夕顔)

ある人のいはく、かきつばたといふ五文字を句の上にするて、旅の心をよめといひければよめる。

唐衣きつゝなれにしましあればはるくきぬる旅をしぞおもふ。とよめりければ、皆人餉の上に涙おとして、ほとびにけり。行きく駿河の國に至りぬ。宇津の山にいたりて、我が入らんとする道は、いと暗う細きに、蔦かへでの葉しけりて、物心ぼそく、すゞろなる目を見ることがと思ふに、修業者あひたり。かゝる道にはいかでかおはするといふに、見れば見し人なりけり。京にその人の許にとて、文書きてつく。

(伊勢物語)

ありとある上下、童まで酔ひしれて、一文字をだに知らぬものしが、足は十文字に踏みぞ遊ぶ。(土佐日記)

わざと多くの人に知られた文句を取り出して見たのであるが、委しい意味は解らずとも、走り読みをただけで、是等の文章が、いかにもやさしい、なだらかな、角の無い、美しいものだといふことが解るであらう。

王朝文學に通じて主要なる特色をなす表現美の第二は、正面直接の指示を避けて、奥床しく寫すことを常とした暗示、臆化の態度である。彼等は或る特別な男女の個人を指すべき場合に、之れ

を「人」と云つた。或る特別な動作を示すべき場合に、之れを「ものす」と云つた。人の固有名詞をば擧げずに、多くは官位、住所、性行、歌詞等によつて、其の人を暗示した。時には地名などにまで此の筆法を應用し、「淺間の嶽」といふべきところを、わざと「なにがしの嶽」と云つて、その微妙なる嗜みの筆致に誇つた。妙齡の養女が日々に圓熟する美貌に性の誘惑を感じて來たことを寫しては、「すくやかに親がり果つまじき御心や添ふらん」など云つた。かやうな暗示曲言の筆法の最も巧みに使用されたのは、兩性の關係成立の場合の描寫である。「源氏物語」は、源氏が空蟬に成功した場合を寫して、かう書いて居る。

人がらのたをやぎたるに、強き心をしひて加へたれば、なよ竹の心地して、さすがに折るべくもあらず。まことに心やましくて、あながちなる御心ばへを、言ふ方なしと思ひて泣く様などいと哀れなり。心苦しきはあれど、見ざらましかば、口惜しからましとおぼす。△慰めがたく憂しと思へれば、なかくうとましましものにも思すべき。覺えなき様なるしもこそ契りありとは思ひ給はめ……(帯木の巻)

拙譯を試みると、かういふことである。「譯」もことさらめて五月蠅いが、王朝の文章の或るものは、今日の吾々に對して外國語よりもむづかしく、そして之れを譯することが、やがて表現美を説明する所以ともなるので、以下煩を厭はず拙譯を試みることにする。

【譯】源氏はしきりに口説かれたが、空蟬はつれなくもてなして取合はなかつた。女は容子のしなやかな處へ、靡くまいとする強い意氣を加へて居るので、譬へば弱竹のやうな趣があつて、挽々しては居るもの、さて手折るわけにも行かぬ。と見ると、女は心中の煩悶に堪へられないのであらう、無理に迫らうとする源氏の心をたまらなくつらいと思つて、しく／＼と泣いて居る様子など、實に氣の毒である。之れを見て、源氏は可哀相とは思はれたが、同時に折角こゝまで近寄りながら、空しく手を引くのも口惜しいと思はれた。(一)で、かき口説いて、遂に相契られた。契つた後の空蟬の心は更に／＼苦しかつた。といふ事が、こゝに省略して言外に暗示されて居るのである。(二)女は悄然として愛に沈んで居る。いくら慰めても手應へがないので、源氏は云はれた。「かういふ關係になつた以上、私を他人扱ひされべき筈がないではありませんか。戀愛道の至上味は、豫期しない契りにあるので、それをこそ、まことの前世の宿縁とはいふべきでせう。」

と、まあかういふ事である。「折るべくもあらず」「あながちなる御心」は、共に性關係を實にする希望の暗示で、「おぼす」と「慰め難く」との間には、實際關係の成立つたことがすつかり省略されて居るのである。そして王朝當時の上流は、作者も之れを得意とし、讀者も之れに隨喜しつゝ理解して讀み味はつてゐたのであつた。

かゝる筋はまめ人の亂るゝ折もあるを、いと目やすくしづめ給ひて、人のとがめ聞こゆべき振舞はし給はざりつるを、怪しきまで、今朝のほど晝間の隔ても覺束なくなど、思ひ煩はれ給へば……(夕顔) 人の……

【譯】かやうな好色關係の事については、物堅い眞面目漢も、つい取りのぼせることのあるものである。けれども源氏はそれをば見苦しからぬやうに、じつと怵へて、今までは人に非難されるやうな舉動はされなかつたが、今度の夕顔に對してのみは、今別かれて來たばかりのその朝の間にもう戀しく、夜になれば逢はれる、其の晝の隔てが不安で堪らないといふ位、自分で自分がわからぬばかりに氣懸かりなので……源氏が夕顔に逢つて、今迄經驗したことのない愛欲の煩悶を感じた心持の簡短な描寫であるが、この物語が刺戟性なる消息をおく床しくばかして、どれほど淡い品のよい好感を漂はして居るかは、之れによつて察せられるであらう。

一 藤壺の宮惱み給ふことありて、まかんで給へり。上の覺束なかり、歎き聞こえ給ふ御氣色も、いといとほしう見奉りながら、かゝる折だにと心もあくがれて惑ひて、いづくにも／＼まうで給はず、内にも里にても、晝はつく／＼とながめ暮らして、暮るれば王命婦を責めありき給ふ。いかゞたばかりけむ、いとわりなく見奉るほどさへ、現とはおほえぬぞわびしきや。△宮もあさましかりしを思し出づるだに、世と共の御物思ひなるを、さてだに止みなむと、深うおぼしたるに、いと心憂くていみじき御氣色なる……(若紫) 出
【譯】藤壺の宮が、御不例によつて、御里方に御歸りなされた。源氏は、父帝が、御寵愛の御後の御病氣を不安がつて歎かせらるゝ、其の御容子を、御痛はしいと見られぬではないが、かういふ機會を取りはづしてはと、心も身に副はぬばかりにぼラツとなつて、何處へも／＼出かけられず、宮中でも、御里方でも、晝

の中はぼんやりと目を暮らして、暮れると、王命婦を追ひまはして、取り持を頼む／＼と責められた。その王命婦、どんな工夫をしたのであらう、到頭わりない仲となつて親しい關係を結ばれたが、其の結ばるゝ間さへ夢の心地で、現世の事實とは思はれぬとは、さても情ないことである。(此の一大事があつて、天地の様子がすつかり一變した)藤壺の宮はやがて、現に返つて、あゝえらい事をしたと思はれる。それを思ひ出すだけでも、一生つゞく煩悶の種である、せめて此の一度だけで止めしよう、深く決心されるにつけて、まらなくつらい氣がして、むツとして御いになる。

これは源氏が多年の宿望を遂げて、藤壺の宮に始めて親しみ奉つたところの一節であるが、其の一大祕事を、「いとわりなくて見奉る」(義理のおやこがめをとになつて相會ふといふ意)の一句で現はし、仔細は省略して、悪夢の醒めた瞬間から再び筆を起こして、「あゝ浅ましい事をしたわいと思ひ出す丈でも生涯の若惱の種だ」と云つたところ、實に暗示的臚寫の鍵を握つた描寫といふべきであらう。

私は王朝文學の表現美の最も主要なる二つは、此の美化と臚寫と、言ひ換へると、美しく寫す事と床しく寫す事と、花のやうに寫すのと霞を隔てゝ見るやうに寫すとの二つの形式であつたと考へる。その他にも委しく擧ぐれば無數にあらうし、見様によつては其の中に見出ださるゝ二百餘種の修辭の悉くが一種の表現美だとも云はれるであらうが、私がこゝに特に言ひたいと思ふのは、それらとは一寸かけ離れた二くさで、一つは極度に稚い、あどけない書き方で、「括らずに後から／＼と言ひ足す形式の表現美」とでも云はゞ云ふべきもの、他の一つは最も込み入つた、そして最も手を抜いた端折り書きの一つで、「一句を上下の掛持にする東ね書きの表現美」とでも云はゞいふべきものである。

三

第一の「括らずに後から／＼と言ひ足す表現美」とは、簡單には「句短かの追つ駈け書き」と云つてもよい。或は短句追加列叙式と云つてもよい。これは古今の文章の多くに少しづつは見出だされるが、主として『伊勢物語』の文章美の根幹を成すものである。『伊勢物語』は到る所にこのあどけない表現美を見せて居るが、例へばその第二段に、

昔男ありけり。奈良の京は離れ、この京は人の家まだ定まらざりける時に、西の京に女ありけり、その女、世の人には勝れりけり。貌よりは心なむまさりたりける。一人のみにはあらざりけらし。

といふのがある。此の「西の京に女があつた。その女は世間の女に比べて優れてゐた。姿よりは心ばへの方がすぐれてゐた。」といふ書き方がそれであるが、これは理智の發達した大人ならば、

西の京に、世の人にいたく立ちまさりて、殊に姿よりは心の優りたる女ありけり。と書くべきところで、さう書く方が普通には、複雑味があり、同時に無駄がなく、締りがあつて、一段高い文章と見られるであらうが、しかしながらあどけない稚味の面白味からいへば、この伊勢の三段切の形式には言ひ盡くされぬ味がある。堯舜時代の原始の世が、常に後世の發達した時代の理想とされるやうに、子供の世界は、大人に取つて常に一種の理想である。人間修養生活の向上は、小兒が無思慮無統一の突發行爲に始まり、分別努力して理想を追ふ統一生活に尖し、而して考へず努めずして、而も思ふまゝ爲すまゝが則に合ふ小兒還原の生活に終はるとも見られるが、文章にもそれと同じ味があつて、子供が考へず、括らず、纏めずに、思ふ事を、思ひ出すまゝに、小刻みに、途切れ／＼に並べる言葉には、大人の巧んだ文章以上の愛くるしい味はひがある。例へばこゝに一人の子供があつて、どこかの公園で親切な小母さんに逢つたとする。子供はいふであらう。

公園で小母さんに逢つてよ。きれいな小母さんよ。親切な小母さんよ、いろ／＼見せて下さつたわ。もしそれを改めて「私は今日公園で、きれいな親切な小母さんに逢つて、いろ／＼見せて貰

ひました」とするならば、それは理窟頭のませた技巧による複雑化と統一化とが、原始的の稚味をさん／＼に破壊するといふものではなからうか。無論複雑な文章、複雑の統一された文章にも、それ／＼立派な趣味と價值とはあるが、同時に此の「句讀短かな追駈け書き」にも特別の味があり、他の何物にも換へられぬ愛くるしい、表現美があるわけで、而して此の表現美を最も多量に備へて、特殊無類の美しい姿を見せて居るのが「伊勢物語」だといふのである。

私は無論この幼い表現美が「伊勢物語」の獨占美だといふのではない。けれども前後の文學、そのいづれを見ても、「伊勢物語」ほどに、此の表現美を豊かに、美しく、面白く見せたものがない。例へば「古事記」にも此の表現美はあるが、「伊勢」ほどに純なのが少なく、又到る處に一種の概括統一の技巧が施されてゐる。例へば出雲の國讓の濱に於ける國讓の談判を寫した「記」の文に、

(大國主神)又申しつらく、「又我が子建御名方の神あり、これを除きては無し。」かく申し給ふ折しも、この建御名方の神、千引石を手末にさゝげて来て、「誰れぞ、我が國に來て、忍び／＼斯く物言ふ。しからは力競べせむ。故我れ先づその御手を取らむ」といふ。

とある如き、無論是れはこれで絶大の名文であるが、伊勢式にすれば、又小刻みに刻んで、特別

の味を出せる所であらう。或は山幸海幸の神話の條の一節に、
是に其の兄火照命、その鉤を乞ひて、「山幸も己が幸々、海幸も己が幸々、今は各々幸返さむ。」と謂ふ
時に、その弟火遠理命、詔り給はく、「汝の鉤は、魚釣りしに、一魚も得ずて、遂に海に失ひてき。」と告り
給へども、その兄強ちに乞ひ微りき。故その弟、御佩の十拳劔を破りて、五百鉤を作りて償ひ給へども、
取らず、亦一千鉤を作りて償ひ給へども受けずて、猶ほかの正本の鉤を得むとぞ謂ひける。
とあるが如き、素朴な幼味はありながら、緊ぎ詞が相應に用ゐられ、又概括統一が多く加へられ
て、此の種の表現美に於ける『伊勢』の味とは大分違つて居る。

轉じて假名物語の先行或は併行の文學を見ると、例へば『竹取物語』の冒頭なる、

今は昔竹取の翁といふものありけり。野山にまじりて、竹を取りつゝ萬の事に使ひけり。名をば讚岐造鷹
となんいひける。

などには、似寄つた面影が見えるが、『伊勢』ほどには鮮かでなく、そして大體の筆致は『古事記』
を假名書き式に行つたといふ調子であり、また大體は、

この人々、或時は竹取を呼び出でて娘を我れにたべと伏し拜み、手をすりのたまへど、己がなさぬ子なれば、
心にも従はずなんあるといひて、月日を過ぐす。かゝれば此の人々、家に歸りて物を思ひ、祈りをし、願を
立て、思ひやめんとすれども止むべくもあらず、さりとも遂に男あはせざらんやとは思ひて、願みをかけた

り。

の如く、相應に繋がれ、括られ、束ねられたものである。また後世の文學では、例へば『大鏡』
などには、

同じ帝と申せども、(此の後一條天皇は特に)御後見多く、たのしくおはします。御祖父にて、只今の入道
殿下、出家せさせ給へれど、世のおや、一切衆生を一子の如くはぐくみおはします。第一の御伯父にて、只
今の關白左大臣、一天下をまつりごちておはします。次ぎの御をちと申すは、内大臣にて左大將かけておは
します。次ぎの御をちと申すは、大納言東宮大夫、中宮權大夫、中納言など、さまざまにておはしま
す。かやうにおはしましたあへば、御後見多くおはします。

といふやうな異様な味の文體があつて、一寸『伊勢物語』を思はせるけれども、似は似ながら、
文致に於いて大分異なる所があり、そして何となく、大人びてゐて、全く『伊勢物語』の稚い愛
くるしさといふものが無い。

翻つて『伊勢物語』を見ると、多少の類似はありながら、すつかり、稚さ、愛らしさの程度を
異にして、正しく古今の一品である。吾等は先づ『東下り』の冒頭を見るであらう。

昔男ありけり。その男、身をやうなきものに思ひなして、京には居らじ、東の方にすむべき所もとめむとて
行きけり。……もとより友とする人、一人二人して諸共にいきけり。道知れる人もなくて惑ひ行きけり。三

河の國八橋といふ所に至りぬ。そこを八橋といふことは、水の脚手に流れわかれて、木八つ渡せるによりてなむ八橋とはいへる。その澤のほとりの木蔭におりゐて、餉くひけり。その澤に燕子花いと面白く咲きたり。それを見てある人の曰はく、かきつばたといふ五文字を句の上にすゑて、旅の心をよめといひければよめる。

唐衣きつゝなれにしつましあれば

はる／＼きぬる旅をしぞ思ふ。

とよめりければ、皆人餉の上に涙おとしてほとびにけり。

【譯】昔、男があつた。その男が、用なき我が身だ、どうでもなれと、すつかり捨鉢の氣分になつて、こな都などに居るものか、これから東國の方へ行つて、安住の地を求めると云つて出かけた。もとの仲好を、一人二人伴つて一緒に出かけた。道案内を知つた者も更に無いので、惑ひ／＼出かけた。其の中に三河の國の八橋といふ所へ來た。其處を八橋と云つたのは、川が蜘蛛の網のやうに、縦横に流れ分かれて、それに木の橋が八つ渡してあるので、八橋とは云つたのである。其の水郷の木蔭に、馬から下りて休んで、乾飯を食べた。そこには杜若が大層風情に咲いてゐた。それを見て、連れの人が云ふのに「かき、つ、つ、ば、た」といふ五つの文字を、五つの句の上に置いて、旅の心を御詠みなさいと云つたので、詠んだ。

唐衣きつゝなれにしつましあれば、

はる／＼きぬる旅をしぞおもふ。

と詠むと、居合はせた人々が、一同乾飯の上に涙を落したので、ひからびた乾飯が、すつかりふやけてしまつた。

まづ初めの部分について見ると、その數章を、若し統べ括り、燃り合はせて書くならば、「昔男、東の方に住むべき所求めんとて、道知らぬ友一人二人と惑ひ行くほどに、三河の國八橋といふ所に至りぬ」とも云ふべき處であらう。而して、斯く統べ括ることによつて、一種の大人らしい複雜味と、簡潔味と、そして統一味とを贏ち得るであらうが、同時に原文のあどけない愛くるしさは、全く失はれてしまふであらう。此の「男があつた。東國へ行つた。一人二人の友達と一しよに行つた。道を知らぬ者ばかりが、迷ひ／＼行つた。三河の國の八橋に着いた。」といふ、巧まず、束ねずに、短い文句を継ぎ足し継ぎ足しする文致は、まさしく幼い子供等が、「私はどこそこへ行つたのよ。お友達と一しよに行つたのよ。誰れも道を知らなくつて迷ひ／＼行つたわ。其の中に八橋といふ所に出たのよ。」といふ調子そのまゝではないか、そして其處に何とも云はれぬ稚い愛嬌を見せて居るではないか。

その後の部分も、大體に於いて、やはり此の調子の連續である。「八橋へ行つた。八橋と云つたのは、木の橋を八つ渡してあるので八橋とは云つたのである。」「その澤におりて餉を食べた。そ

の澤に杜若が咲いてゐた。」旅の心を詠めといふから詠んだ。何々と詠むと、皆が感心して泣いた。」など、皆此の通りで、括らず束ねずに、追っかけ／＼ペラにして継ぎ足して居るが、それが子供が「あのね」、「それからね」、「私はね」、「學校へ行つた、學校へ行くからね」、「かう云つたでせう、さういふとね」といふ重ね詞を聞くやうで、五月蠅いといふ感じは少しも起こらぬのみか、幼稚な素朴な愛嬌に酔はされてゐる中に、印象は分厚に盛高に、ちやんと意識の上に成立つのである。この継ぎ足し、折り重ねる味は、云はゞ who, why, what, how, when, where のそれぞれを皆引き離して、並べ重ねるといふ體であるが、私は此の修辭の面白さに於いて國文學中『伊勢物語』に匹敵するものはないと思ふ。

此の點に於いて『伊勢物語』と對蹠的に、概括、複雑、統一の曲を盡くしたものは『源氏物語』である。私は『伊勢』がバラにして繰返す修辭の面白味を具體化する爲めに、『源氏』の一節を引きたいと思ふ。「末摘花」の初めに、かういふ一章がある。

思へどもなほ飽かざりし夕顔の、露におくれし程の心地を、年月経れどおぼし忘れず、此處も彼處も、うちとけぬ限りの、氣色ばみ、心深き方の御いどまじさに、氣近く懐かしかりし、哀れに、似るものなう戀しく覺え給ふ。

大意は、「いくら愛しても愛し足るといふことの無かつた夕顔が、葉末の露のやうに果敢なく消えて、淋しくあとに取り残された其の折の堪らない心地を、源氏は年月を経ても忘れることが出来なかつた。そして其の後通つて居る愛人達は、どれもこれも皆心から打とけることの出来ぬ女君ばかり、或ひは氣の勝つた嫉妬性の六條御息所のやうな人か、或ひは嗜み深く取りすました葵上のやうな人か、いづれも行儀くらべをするやうな、くつろげない人ばかりなので、それについても、残くなつた夕顔の、氣がおけず親しみやすかつたのが、しみ／＼可愛ゆく、あんな女がまたとあらうかと思ふほどに戀しく思はれた」といふことであらう。これだけの事柄と意味とが、此の絡み合つた長文句の一センテンスの中に、幾多の曲折を見せて、つめ込まれてあるのである。そして『源氏』及び、『源氏』の脈を引いた假名文の中には、此の様式が此の數倍若しくは十數倍の長さをつゞけて、一センテンスを成して居るのが、少なからずあるのであるが、かやうに長文句の複雑に絡み合つた文章を見て、『伊勢物語』の、短い、離れ／＼になつた、子供の片言のやうな文章を見ると、今更に單純なる文章美の至極の愛らしさに目をさまされる心地がするやうに思ふ。そして私はいづれをも名文と許しながら、源氏系の文を見た目で伊勢を見る毎に、葛の藪をぬけ出でて、開けた野原に土筆の生ひ出でたのを見るやうな心地がするのを覺えるので

ある。五、
尚ほ二三の例を引いて見る。

昔男、武藏の國までまどひ歩きけり。さてその國なる女をよばひけり。父はこと人にあはせんといひけるを、母なんあてなる人にと心づけたりける。父はなほ人にて、母なん藤原なりける。さてなむあてなる人と思ひける。この婿がねによみておこせたりける。住むところなん、入間の郡みよし野の里なりける。

何處で？ 誰れを？ 誰れが？ 何故に？ 如何に？ をば、悉く例の離れ／＼に切つて、追つかけ／＼繼ぎ足して行つたので、これは『伊勢』の中の、必ずしも優れた文ではないが、とにかく愛らしさは格別で、單純なる文章美の一味を見せて居る。

昔女はらから二人ありけり。一人は賤しき男の貧しき、一人はあてなる男の徳ある、もちたりけり。賤しき男もたる、十二月の晦日に、袍を洗ひて手づから張りけり。志はいたしけれど、さる賤しきわざをも習はざりければ、袍の肩を張り破りてけり。せん方なくて、たゞ泣きに泣きけり。

【譯】むかし二人の女の姉妹があつた。一人は身分の卑い貧しい男を夫にもち、一人は身分の貴い富有の男を夫に持つた。賤しい男を持つた方の女が、十二月の末押しつまつてから、夫が正月の着料にと、上の衣を

自分の手で洗つて張つた。出来るだけの注意はしたが、かやうな下賤な業を仕馴れてもゐなかつたので、その上の衣の肩の所を、つい張りそこねて破つてしまつた。何とも仕様がなないので、唯だ泣いて泣いてゐた。

要點は「十二月の晦日」以下であるが、「志を致して張りたれども習はぬこととて、張り破りて泣きゐたり」と、つゞけて束ねても書けるところであるが、それを「手づから張つた。張りそこねて破つた。せん方なさに唯だ泣いてゐた。」といふ風に「即ち「張つた。破つた。泣いた。」と引き離して別々に書いたので、斷叙、列記、追つかけ書きの味が出てゐて、何とも云はれぬ面白さを見せたのである。

次に、八十一段なる惟喬親王が水無瀬の宮に於ける櫻狩の一章を擧げて見る。

むかし惟喬の親王と申す皇子おはしましけり。山崎のあなたに水無瀬といふ所に宮ありけり。年毎の櫻の花盛りには、その宮へなんおはしましける。その時、右の馬の頭なりける人を、常に率ておはしけり。時世へて久しくなりにければ、その人の名忘れにけり。狩は懇ろにもせで、酒を飲みつゝ、やまと歌にかゝれりけり。今狩する交野の院の櫻殊におもしろし。その木のもとにおりゐて、枝を折りて、かざしにさして、上申下みな歌よみけり。馬の頭なりける人のよめる。

世の中にたえて櫻のなかりせば

春の心はのどけからまし。

となんよみたりける。

ざつと譯して見ると、

昔、惟喬親王といふ皇子が居させられた。山崎の向うに水無瀬といふ所がある。そこに其の親王の別荘があつた。親王は櫻の花盛りには毎年極つて其處へ御出かけなされた。其の時にはいつも右馬頭の某といふを御連れになつた。さあ、その某の名は、もう大分年経つたので忘れてしまつたが、狩の方には心も入れず、酒を飲みく／＼やまと歌を詠みにかゝつた。此の邊に到る處櫻の花だが、只今狩して居る交野の渚の院の櫻が、殊におもしろい。其の木の下に、馬から下りて並んで、花の枝を折つては頭にかざしつゝ、お供の上中下悉く歌を詠んだ。

といふことであらうが、不用意のころ／＼並べが、連立して不思議の光景を見せて居るところが、いかにも面白い。珠ならば緒に貫かぬ眞珠白珠、鳥ならば海中の花彩列島、畫ならば繪具を投げつけたやうに大膽に打附けて、そして遠く離れて見ると、繋がり合ひ浮き立つて、生き／＼と其の物に見える印象派の繪といふ味である。

昔左兵衛の督なりける在原の行平といふ人ありけり。その人の家によき酒ありと聞きて、殿上^{とのうへ}にありける人飲まんとして來りけり。左中將藤原良近といふ人をなん主賓^{まじりやくざ}にて、その日はあるじまうけしたりける。情ある人にて瓶に花をさせり。その花の中にあやしき藤の花ありけり。花のしなひ三尺六寸ばかりなんありけ

る。それを題にて歌よむ。よみ果てがたに、あるじの兄弟^{はなむ}なる、あるじまうけし給ふと聞きて來りければ、とらへて詠ませける。もとより歌のことは知らざりければ、すまひけれど、強ひてよませければ、かくなん。

咲く花のしたにかくるゝ人おほみ

ありしにまさる藤のかけかも。

表現美の問題である。暫らく意義の内容を離れて、文句の並びや、續き離れや、調子の上だけを味はつて見るだけでもよいが、此の短い、可愛ゆい、文句の、離れ／＼にきれいに並んで、描つてゐる所に、一種無類の味があるではありませんか。

六

かういふ味の表現美は、國文學の上では、流星の如く『伊勢物語』に現はれ、やがて流星の如く其の影を隠しました。『伊勢』以前の國文學、例へば『古事記』や『日本紀』や、風土記や、祝詞や、宣命には、その種子とも見れば見らるべき文致が、ほんの薬ほど介在して居るといふだけで、特にそれとして見るべきものがありませんでした。例へば『古事記』の

昔、新羅の國主の子、名は天の日矛と謂ふあり。この人參渡りけり。參渡りける故は、新羅の國に一つの沼

あり。名を阿具沼といふ。此の沼の邊りに、ある賤の女晝寝したりき。此の如きは、一種の類似を認むべきものではありません。後の文學では、『大和物語』は『伊勢』と同型直系のものでありながら、此の一義に於いては、殆んど其の先行文學の風格を失つてしまひました。『枕の草子』は簡と勁との上に於いては、『伊勢』と類似して居りますけれども、繼足書きの稚味は殆んどありません。『土佐日記』は最も多く『伊勢』の衣鉢を傳へて居るものらしく、此の特殊の表現美に於いても、處々にそれらしき面影をちらつかせて、例へば

昔、安倍仲麻呂といひける人は、唐土にわたりて、歸り來ける時に、船に乗るべき所にて、かの國人、馬のはなむけし、別かれ惜しみて、かしこの詩作りなどしける。あかすやありけん。二十日の夜の月出づるま、でぞありける、その月は海より出でける。これを見て、仲麻呂のぬし……

の如き、伊勢そつくりともいふべき表現であるが、しかしながら量に於いても、質に於いても、とても『伊勢』と比べらるべきものではありません。曾だに王朝の文學に於いてのみならず、鎌倉以後の文學に於いても、量と質との兩方に於いて言ふに足るべき此の表現美の證據を見せたものが、まづ無かつたかと愚考いたします。即ち『伊勢物語』に見る此の短文句の稚い追っかけ書

きは、美しい活きた例證の相應な分量を見せて居るといふ意味に於いて、まづ『伊勢』のみを光らした空前絶後の現象ともいふべきもので、文章として見れば、此の點だけでも、『伊勢』は國文學の中に絶對獨自の地位を占むべき値打があると思ひます。造化の最も可憐なる製作ともいふべき子供の言葉の中には、太古以來始終其の姿を現はして、人類社會に微笑破顔の愉快な空氣を漂はしてくれただけの特種表現様式が、國文學の唯だ一時代の一部の作に、唯だ一度其の面影を見せてくれただけでも、吾等の悦びと感謝とに値するものであらうと思ひます。

私は此の奇妙な、不思議な、ちっぽけな、子供々々した表現美、之れを文學に於ける特殊の表現美といふべきものであるか否か、殊に王朝文學の表現美の中の特殊獨自のものとして數へるに足るべきものであるか否かについて、再三の考慮を拂ひました。そしてそれをば異を立て奇を衒ふ嫌ひがありはせぬかとも考へて見ました。けれども、已に、美しく言ひ現はし、床しく言ひ現はし、簡潔に言ひ現はし、詳細に言ひ現はし、古風に言ひ現はし、新風に言ひ現はし、國風に言ひ現はし、外國風に言ひ現はし、なだらかに言ひ現はし、ぎくしゃくと言ひ現はし、格式正しく言ひ現はし、自由放漫に言ひ現はす、といふやうないろ／＼の言ひ表はし方を、一つの表現美といふべくんば、短い文句を離れ／＼に並べ、一緒に統べ括るべき事を追っかけ／＼言ひ足すといふ

言表法をも、一種の表現美といふに於いて、何等の不合理はない筈だと考へた所から、もう一つは、此の表現形式がまだ、何人にも説かれなかつた事を、此の表現美の爲め、又之れを包蔵する『伊勢物語』の爲めに惜しむ心から、此の未熟な考を、ざつと取りまとめて見たのであります。

以上で、取り残されたる王朝文學の表現美の第一に關する説明が終はりました。私は次ぎに、第一よりは少し複雑な、そして説明に大分骨の折れる第二の表現美、自ら名づけて、「くわんかみ銀懸式表現」と稱する表現美を説明して見たいと思ひます。

七

次ぎに私は「一句を上下の掛持にする束ね書き」の表現美、假りに名づけて「たは銀懸式表現」といふ表現美について説明して見たいと思ふ。銀懸式と名づけたのは、鎖の鎖が前の輪に懸かり、同時に後の輪に懸かつて居る如く、或る一句が同時に前後の兩句に懸かつて、一身にして二役を兼ね、上を承くるよと見る瞬間に、下を喚び起す轉身滑進の妙味を見せるからで、これは恐らく日本文に特有のものであらう。そして此の表現は一舉にして、上下を繋ぐ急速なる活動の爲めに、往々にして人目に觸れず、又しばしば文脈を紊すが如くにも見えて、讀者を惑はすものであ

るけれども、もとく日本語の特性から自然に生まれ出でたもので、一種の修辭様式と見るべきものであらうと思ふ。

日本語は孤立語 (isolating)、曲折語 (inflectional) に對して、附着語 (agglutinative) と稱せられる語群の一つに組み入れられるが、國語の附着性は、氣紛れづきともいふべき特別念入りのもので、テニヲハといふ肢端の吸盤の作用によつて、蛇の手の如く八方に絡み着いて、轉回振折いろくの曲姿を現出する。讀者は修辭學に謂はゆる雙頭文、雙尾文の變態組織を知られるであらう。雙頭文とは主語を客語として繰りかへす文のことで、例へば

禮節といふは、貴き人をば慎み敬ひ、賤しき人をば侮らず、同じ位の人をば、人を先だて、我れはへりくだるを禮節といふ。(伊勢貞丈、貞丈雜記)

といふ類であるが、世界のいづくに、かやうな奇怪なる形の文があらう。若し漢文にて、

孔子者聖人者孔子也

といひ、英文にて

Columbus is the great navigator is Columbus,

と云つたならば、殆んど一笑にも附せられぬであらうに、それが日本文では「是れは兵衛佐頼朝

とは我が事也」「御事の國里は、いづくの人ぞ」といふが如き文が公認せられて、謠曲の名文の一種と許され、

餅菓子はうまい物は餅菓子だ。

といふが如き文章が、「餅菓子はうまいもので、實にうまいものは餅菓子だ」といふ二義を端折り寄せた、味な曲姿の文章として迎へ容れられてゐるのである。

雙尾文とは主語に屬する働き詞を、再び客語の後にくり返す文のことで、例へば

速須佐之男命の言したまはく、然らば天照大御神に請して罷りなむと言し給ふ。(古事記)

といふ類であるが、世界の何處にこのやうな不思議な形の文があらう。若し漢文にて

老子曰大道廢有仁義曰。

といひ、英文にて

He said "I will go" said.

と云はゞ、誠に好笑噴飯の種であらうが、我が國ではこれが寧ろ國語法の常規と視られて居るのである。而して是等の珍らしい現象は、主として國語の本具する氣の多い附着性によるものであるが、鑲懸式表現も、之れに類似した附着性の現はれに外ならぬ。

八

謠曲の「善知鳥」の中に、

とても渡世を營まば士農工商の家に生れず、又は琴棋書畫をたしなむ身ともならず。

といふ一節がある。生前に殺生を事とした獵師が、地獄に墮ちて、前世の業を悲しみ悔ゆる詞であるが、意味は言ふまでもなく、「とても渡世を營まば士農工商の家に生るべきに、士農工商の家にも生れず、又琴棋書畫をたしなむ身ともなるべきに、琴棋書畫をたしなむ身ともならず」といふことで、作者は「生れず」「ならず」の後の句の中に、「生るべきに」「なるべきに」といふ前の句を含蓄させたのに相違なく、又恐らく同じやうな句を繰返すよりも、むしろ省略することによつて、含蓄餘意の修辭美を贏ち得ると思つたのであらう。それは、謠曲は各個人が銘々別々に読み捨て忘れ去るべきものではなくして、無数の人によつて謠はれ聞かれ耽味賞翫せらるべき性質のものであることによつても、容易に推測せらるべきことであるが、此の一事によつても、此の變態文章が、當時の有識階級に愛でられたこと、少なくとも、是認せられたことが明らかである。

狂言の「止動方角」に、「定めて御用もあらば、御召し候へ」といふ文句があるが、「これは定めて御用も御ありでせうが、もしあらば御召下され」といふのであらう。また同じ狂言の「伯母酒」の一節に、

人に酒を振舞はせらるゝならば、たんのうする程飲ませもなされいで、杯を収めさせらるゝは、近頃寄いとで御座る。

といふ文句がある。これも無論、「たんのうする程飲ませらるべきに、飲ませもなされないで」といふべきを略したので、ほど謡曲と同じく、多くの人の口に向け、耳に訴へて繰返し賞翫せらるべき狂言に、かやうな變態文章の怪しまれずに存在して居るのは、此の文體が當時の人に面白いと思はれた爲め、少なくとも耳障りではないと思はれた爲めであらう。

私が「鑲懸式表現」といふのは、此の種の文章を指すのである。私は「懸詞」「秀句」の一體にも此の種の表現を認めて居る。例へば、江戸時代の川柳に、

盆前に誰れかは金をかさぎのはした錢でもほし合の空。

といふのがある。此の狂歌に「かさぎ」(貸、鵠)及び「ほし合」(欲、星)の、二つの秀句があるが、かりに後者だけについていふと、此の「ほし」の一語は、上を承けては、「端錢でも欲し」と

いふ願望の意味となり、下につゞいては、牽牛織女の二星が天の河で逢ふといふ會合の意味となるので、口疾に読み進む場合の讀者の心持を形容すると、ホシの二音が、先づ「端錢でも」につづいて、「はゝあ、一文二文の小錢でも欲しいといふ事だな」と思ふその瞬間の直下に身を轉じ、「合の空」とつゞいて、「オヤ、二星が七月七日に天の川で邂逅ふといふのか」と思はせるのである。チャムバレン氏は之れを蝶番語 (Pivot word) と呼んで居る。一つの蝶番が柱にも扉にも附いて、兩方を連結し七居るやうに、一語が其の有する二義によつて上下の二句を繋ぐことを云つたのであるが、此の鑲懸式表現にも丁度之れに似たやうな趣がある。之れに似て、之れを少しく長くし、複雑にしたやうな姿がある。前の「善知鳥」の例でいふと、「士農工商の家にも生」の一句は、上の句を承けて読み下す時には、「士農工商の家にも生るべきに」といふ意味だと豫想して辿つて来るが、読み進む間に忽ち大飛躍の大端折を試みて、頭の中で「士農工商の家にも」の繰返しを吞み込み、すぐに「家にも生れず」の意味につづけて、一段の意義を完了せしめるのである。これは、飛躍とも、端折とも、横逸にも、脱落式の送迎ともいふべきものであるが、とにかく此の中間の一句の氣の利いた續け工合、端折り加減一つで、一桁の文句をおるぬいた電光石火の飛躍送迎の出来るのは、我が國語作用の一不思議と云はねばならぬ。

此の脱落的送迎、飛躍の連接、鑲懸式表現の影は、大昔の『古事記』『日本紀』の文章より現代の口語に反んで、引きつゞき見出だされるが、その最も多く現はれたのは平安王朝の假名文學である。王朝の作家は此の曲奏について、合法不合法などを考へるまでもなく、日常茶飯の事として、氣にも留めずに用ゐたのであらう。同時に手取早さを取柄として何心なく調法しただけで、改まつては、些の修辭意識をも感じなかつたのであらう。『大鏡』にかういふ文がある。

小一條院、我が御心もてのかせ給へることは、これを始めとす。

これは教明親王が藤原道長の壓迫に堪へ切れずして、自ら進んで皇太子の御位を辭させられたことにつき、太子が自ら進んでの御辭位は、國史上之れを以てはじめとするといふ意味の記事であるが、明らかに鑲懸式の端折り書きで、普通の文法からいへば、云ふまでもなく「我が御心もてのかせ給へるが、太子が御心もて位を退かせ給へることは、これをはじめとす。

とあるべきところである。おもふに當時廣く行はれた文章意識が、『大鏡』の作者に、怪しまずして此の不思議な文を書かせ、讀者をして怪しまずに、之れに隨喜せしめたのであらう。同じ『大鏡』に、またある。

(濟時の左大將は)かくやうに、いみじう心ありと思したりし程よりは、よしなし事し給へり。

これは、濟時がかやうに自分では、えらく深慮があると己惚れてゐたが、その己惚れの程度に比べては、下らぬ、わけのわからぬ事をされた。といふことで、普通ならば「心ありと思したりしが、おぼしたりし程よりはよしなし事し給へり」と二重に云ふべき所を端折つたのである。また同じ『大鏡』に、

(安子皇后は)これのみにもあらず、かやうなる事ども、いかに多く聞こえ侍りしかど、大方の御心はいとひ

これは、後の嫉妬沙汰は、こればかりではなく、かういふ種類の事が、どんなに多くあつたであらう、それは随分澤山あつて噂に上つたけれども、大體の御心持は非常に寛大で、「いふので、普通ならば、いかに多く聞こえ侍りけん、多く聞こえ侍りしかど」などいふべきところを括つたのである。「いかに多く聞こえ侍りしかど」などは、今日も心づかずによくいふ文致で、一見物に成らぬ片言のやうではあるが、考へ様によつては、大端折の無邪氣さの中に、云はれぬ愛嬌のある修辭である。

九

此の種の例を、試みにもう少し竝べて見る。「竹取物語」に、かぐや姫が勅使に逢ふことを拒むところを、かう書いて居る。

これを聞きて、まじかぐや姫きくべくもあらず、國王の仰事を背かば、はや殺し給ひてよかしといふ。これは、「國王の仰事を背かば殺さうとや、よし然らばはや殺し給へ」といふべきを端折つたのであらう。「伊勢物語」の東下りに、

なほ行きく、武藏の國と下總の國との中に、いと大きな川あり。それを隅田川といふ。

とあるのは、常識文法より見て、合法的には、行きく、武藏の國と下總の國との中に至りぬ。

とか、或は

行き行けば武藏の國と下總の國との中に、いと大きな川あり。

とかの、いづれにかすべきところで、是れは多分、行きく武藏の國と下總の國との中に、いと大きな川あり。武藏の國と下總の國との中に至れば、武藏の國と下總の國との中に、いと大きな川あり。

なる川あり。

と二重に繰返すべきを、一重に端折つたのであらう。又同じ物語に、

昔男女片田舎にすみけり。男官仕しにとて、別かれを惜みて行けるまゝに、三年來ざりければ、待ちわびたりけるに、又いと懇ろに言ひける人に、今宵は逢はんと契りたりけるに、かの男來たりけり。

とあるが、これは奉公の爲めに他國へ出かけた夫が三年経つても、歸つて來ぬので待ちわびて困りぬいてゐると、そこへ懇ろに言ひ寄つて來た男があつたので、仕方なく愛を許した。ではいよ／＼今夜は逢はうと約束して、逢つて共寝してゐたところへ、夫が歸つて來たといふ意味で、合法的に書き整ふれば「今宵は逢はんと約束りて、同衾りたりけるに」と、「ちぎり」の二義を書きわけて、二重に繰返すべき所を、端折りがきに括つたのであらう。私は此の表現法をば、二重にすべきを一重に端折るといふ意味によつて、久しく「二重一重」の式と呼び、又は「端折り書き」「括りがき」と呼んで來たが、一二の例だけでは、無理な、こじつけの解釋のやうにも見えるが、數を集むれば、一種當然の歸納で、又一種の可なりに面白い表現形式として許されべきものであると信じて居る。

『枕の草子』の名高い「草の菴玉のうてな」の段に、

主殿司來たりしを、また追ひかへして「たゞ袖をとらへて、東西せさせず、乞ひ取りもて來ずは、文を返し取れ」といまして、さばかり降る雨のさかりにやりたるに、いと疾く歸り來たり。

といふ一節がある。意味は頭中將等が、清少納言に手紙を送つたが、使に立つた主殿司が、其の手紙をおき放しにして歸つて來たのを、又追ひ返して、袖をつかまへて有無を云はせず、返事を貰つて來い。もし返事が貰へなくば、此方からやつた手紙を取り返して來いと、嚴重に言ひつけてやつたといふので、「乞ひ取りもて來ずは」は、必ず「乞ひ取りもて來、もし乞ひ取りもて來ずは、文を取り返し來れ」と二重にすべきを端折つて、段取ぬきの躍進振を見せたのであらう。

『和泉式部日記』に

かくて女、風^をにや、おどろくしうはあらねと、惱ましうすれば、「いかにく」と問はせ給ふ。よろしうなりである程に、いかにぞと問はせ給ひたれば、「少しよろしうなりに侍れば、しばし生きて侍らばやと思ひ給へつるにぞ、罪ふかう。

といふ一節がある。圈點の前後は、多分、少し快くなつたところへ、帥宮様から御見舞があつたので、「少し快くなりましたが、快くなると、もう少し生きてゐたいと、つい思はれますので、我れながら罪深く思はれます」といふのであらう。即ち「少し宜しうなりに侍り、少しよろし

うなりに侍れば、しばし生きて侍らばやと思ひ給へつ」といふべきを、一つに端折つたのであらう。

10

轉じて『源氏物語』の須磨の卷、左大臣の北の方大宮から源氏への消息に、

いと夜深う出でさせ給ふなるも、さま變はりたる心地し侍るかな。心苦しき人のいぎたなき程は、しばしもやすらはせ給はで」と聞こえ給ふ。

といふ一節がある。大意は

この通り夜深の中に御歸りなさるといふ事を承るにつけても、娘(葵上)の存生中は、さうでもなかつたのと、すつかり様子の變はつた、情ない心地があるのであります。それに氣の毒な母のない子が睡んで居る中は、暫らく御出立を御見合はせあつて、御父子尋常に御對面の上、ゆつくり御名残を御惜しみあつて、御立ちもあるべきに。一寸の御猶豫もなく御立ちあるのは御情なく」など申上げられた。

といふことで、點を打つた所は、暫したりとも猶豫はせ給ふべきに、暫しもやすらはせ給はで」といふべきを端折りがきにしたのであらう。

此の表現法の最も多く用ゐられたのは『源氏物語』で、巻毎に可なり多くの例を見せて居り、またこれが『源氏』の代表詞姿の一つであるかのやうにさへ思はれるので、尙ほ數則の例を引くことにする。蓬生の巻に、

(源氏は)只今は兵部卿の宮の御女より外に、心わけ給ふ方もなかななり。昔より好き、いしき御心にて、等閑に通ひ給ひける所々、皆思ひ離れにたんなり。ましてかう物はかなき様にて、藪原に過ぐし給へる人へば、心清く、我れを頼み給へる有様と、たづね聞こえ給ふこと、いと難くなむあるべき。

といふ一節がある。末摘花の叔母大貳の妻が、末摘花に源氏を思ひ切らせようとして、源氏を悪しざまに言ふところで、大意は、

源氏の君は、昨今、紫上より外には愛人といふものが無いといひますわね。あの君は、昔から色好みの御性質で、手あたり次第好い加減に女を設けなすつたが、その女達をば、みんな手を切つてしまはれたといふではありませんか。まして此の通り有り甲斐なしの様子をして、荒れ果てた屋敷に住んでゐる貴女を、「操を立て、物堅く待つてゐてくれたのがうれしい」など云つて、訪ねて来て下さる氣遣があるもんですか。

といふことであるが、「好き、いしき御心にて」の一鎖の文脈の味は、必ず「例の道樂氣分で滅茶、苦茶に通はれたが、その滅茶に通ひ馴れた女達をば、片はし思ひ離れられた」といふ心持であらう。

即ち「等閑に通ひ給ひけるが、その通ひ給ひけるところ、いしきをば」と重ねべきところを、端折つたのであらう。そして何といふこともなく無駄なしに運ぶ手つ取り早さの味を加へたのであらう。

松風の巻にかういふ一節がある。

御遊びありける序に、今日は六日の御物忌あくる日にて、「必ず参り給ふべきを、いかなれば」と仰せられければ、こゝにかう泊らせ給ひにけるよし聞召して、御消息あるなりけり。

大意は、主上が宮中で管絃の御遊びのあつた序に、今日は主上が六日間の御謹慎の果つる日として、「必ず源氏の姿の見えべき筈だが、どうしたのであらう」と仰しやつたので、かく／＼と、此の大井の御山莊に御泊りの由を奏聞すると、それを聞召して、此の御便りを賜はつたのである。といふことであるが、「かう泊らせ給ひにける」の前後は、必ず「かう泊らせ給ひにけるよしを奏聞すると、その由を聞召して」と繰返すべきところを端折つたのであらう。

玉鬘の巻に左の一章がある。

少貳任果て、上りなむとするに、遙けきほどに、異なる勢なき人は、たゆたひつゝ、すが／＼しくも出で立たぬ程に、重き病して、死なむとする心地にも、この君の十歳ばかりにもなり給へるさまの、ゆゑしきまで

をかしげなるを見奉りて、我れさへ打すて奉りて、いかなる様にはふれ給はむとすらむ……夕顔の忘れ遺兒の玉鬘を伴つて筑紫の任地に下つてゐた太宰少貳が、任期が満ちながら都に上り得ぬ中に、病を得て、死に臨み、玉鬘を見捨て、逝くことを悲しむ所で、大意は、

其の中に、少貳は、任期が満ちて都に上らうとはしたが、都へは道が遙かなり、自分に特別の勢力はない、勢力の無い者が、うっかり上つて、途中で間違でもあつてはと、用心しつゝ、怖いくで、さつぱりと思ひきつて出立もしかねて居る中に、大病を煩つて瀕死の境に臨んだが、死期に近い苦しい心地の中にも、姫君がもう十歳にもなれた様子の、恐ろしいまで可愛らしいのを、つくぐと見て、あゝ母君には後れ、父君には顧みられぬ此の姫君を、自分までが、うち捨て、世を去つては、まあどんな境遇に零落なざることであらう。

といふのであるが、點を打つた二個所の、隠された文章の味は、「道は遙かにして我れに異なる勢なし、異なる勢なき人はと躊躇ひつゝ」「重き病して死なむとせしが、死なむとする心地にも」と、重ねていふべきを端折つたのであらう。

行幸の巻に左の一節がある。

内大臣「侍ははいと悪しかりぬべかりけるを、召しなきに憚りて、承り過ぐしてましかば、御勘じやそはまし」と申し給ふに、源「勘當は、こなたさまになむ、からしと思ふ事多く侍る」など氣色はみ給ふ。

感情の衝突もあつて、暫らく遠々しくなつてゐた源氏と内大臣とが、詫びかたぐの挨拶を交換してゐるところであるが、大意は、

内大臣が、「御伺ひ致さでは濟まないところでしたが、もし御召しのないのに遠慮して、今日伺はぬやうな事があれば、更に罪を重ね、御叱りの種を加へるところでありました。」と申されると、源氏は「いや、罪は手前の方にあるので、手前の方にこそ却つて心苦しいと思ふ事が多くあるのです」と、改まつた挨拶に及ばれた。

といふ事であるが、「こなたさまになむ」の一句は、上に對しては「勘當は」を受け、而して下に對しては「からしと思ふ事多く侍る」につづくのであらう。即ち「こなたさまになむ」は、一句にして二度の勤めをして居るので、前の一度は「罪はこちらにこそあれ」といふ意で纏まり、後の一度は「こちらにこそ辛いと思ふ事多かれ」といふ意でまとまるのであらう。それは「勘當はこなたさまになむ」とつづくのは云ふまでもないが、「侍る」が「なむ」を受けて、第二段の係結を完うして居るところを見ると、文法の關係から見ても、また、「こなたさまになむ」辛しと思ふ事多く侍る」とつづくことが明らかだからである。

真木柱の巻に、左の一節がある。

好いたる人は心から安かるまじきわざなりけり。今は何につけてか、心をも亂らまし。似げなき戀のつまなりやと、さましわび給ひて、御琴かき鳴らして、懐かしう、弾きならし給ひし、爪音、思ひ出でられ給ふ。

源氏が夕顔の忘遺兒で、わが養女なる玉鬘に切なる戀を感じ、あきらめようと思ふがあきらめ得ず、戀の逆上をさまし兼ね、自ら慰めんとして琴を弾すれば、生憎と女の爪音が思ひ出されるといふ意を寫したところで、大意は、

戀する人といふものは、自ら求めて苦しむので、とても思ひの休まるひまのあるものではない。源氏は「これからは、何に關係つて、こんな切ない苦しみに心を亂さう。吾等の戀は養父養女の間の成らぬ戀！ あゝ、似合はしからぬ戀の係合ではある」と、迷ひののぼせを冷さうとされたが、冷しかね、思ひに堪へかねて、琴を掻き鳴らして、懐かしく弾き鳴らされると、慰むかと思ひの外、却つて玉鬘の懐かしう弾き馴らされた爪音が、生憎と思ひ出されるのであつた。

といふのである。こゝに二つの鐵懸式表現があるであらう。一つは「冷しわび給ひて」で、これは「戀の逆上をさまさうとされたが、冷しかねて、琴を掻き鳴らす」と繰返すべきを端折つたのである。他の一つは、「懐かしう弾きならし給ひし」の一句で、これは「源氏が御琴を引き寄せて、懐かしう弾き鳴らし給ふと、すぐに玉鬘の懐かしう弾き馴らし給ひし、爪音が思ひ出された」と、二重に繰返すべきところを、一句の掛持に略したのである。そして改まつて考へると、いかにも

やゝこしく不自然なやうであるが、それが無駄なしにつゞいて、ちやんと解つて、間に合つて、そして面白いのだからよいのである。言葉の幸はふ大和言葉の不思議の一つであらう。

若菜の卷の下に、かういふ文句がある。

(紫上) 今年は三十七にぞなり給ふ。見奉り給ひし年月の事なども、哀れに思し出でたる序に、「さるべき御祈りなど、常よりも取り分きて、今年は慎み給へ。……などのたまひ出づ。

源氏が、最愛の紫上が三十七歳の厄年を迎へられたについて、懇ろな注意を寄せられるところで、大意は

紫上が今年三十七歳になられたについて、源氏は、相契つて三十年、久しく連れ添うて來られた、其の間のことどもを、しみくと連想された序に、「厄年を迎へられたについては、然るべきは祈禱などをば、不斷よりは特別に營んで、そして不斷よりは特別に今年に御注意なさい」と仰しやつた。

といふのである。此の「常よりも取りわきて」の一句が、同時に上下につゞいて、鐵掛、蝶番の役をつとめて居ることは、特に言ふまでもないことであらう。

同じ若菜の下に、
誠まことに我が心にも、いと怪あやしからぬ事なれば、近ちかく、なか／＼思おもひ亂みだるゝ事も勝かるべき事までは思おもひもよら

といふ文句がある。拍木右衛門督が、源氏の北の方なる女三の宮に心を懸けて、善くない事だから、近づいては却つて心配を増すであらうが、それまでは豫想しなかつたといふ事を寫したところで、大意は

柏木は大恩の源氏の妻、女三の宮に愛を感じるなどは、自分で考へて見ても、甚だ怪しからぬことであるから、宮に接近しては、慰むどころか、却つて心の悩みも昔以上に勝るべきを、悩みの勝るべき事までは思ひよらなかつた。

といふのである。この「勝るべき」が上下の蝶番をなして、「思ひ亂るゝことも勝るべきが、その勝るべきことまでは思ひもよらず」とつゞくことは、文脈を一筋に辿つて、

我が心にも、いと怪しからぬ事なれば、思ひ亂るゝ事までは思ひもよらず。

とつゞけては、文章をも、思想をも成さぬことを見ても、明らかに知られるであらう。

夕霧の巻に次ぎの一鎖がある。
御座みまの奥の少しあがりたる所を、少し引き上げ給へれば、これにさし挟み給へるなりけりと、嬉しうもをこ

がましようも覺ゆるに、うち笑みて見給ふ。

夕霧が、北の方の雲井雁が、嫉妬の餘りに奪ひ取つて隠した更衣の手紙を、やう／＼茵しんの下に發見したところで、大意は

と見ると、女君が坐つて居られた御座みまの奥の方に、少しふくれてゐる所がある。少し引き上げて見られると、そこに挟んでおいたのであつた。あゝ、こんな所に挟んでおいたのかと、嬉しくもあり、同時に馬鹿らしくもなつて、にっこりしながら読んで見ると、……

といふのである。これを後世ぶりなる普通の一筋讀みにして、「引き上げて見ると、こゝに挟んでおいたのかと、嬉しくて」といふ風に讀み取つては、辻褄も合はず、さっぱり面白くもないので、これは、どうしても、二重にすべきを一重に端折る、許された修辭法の鎖懸式表現と解すべきであらう。

もう一つ『堤中納言物語』の第一篇「花櫻折る少將」の中に、次ぎの一句がある。

日さしあがる程に起き給ひて、昨夜のところに文書き給ふ。「いみじう深う侍りつるも、道理なるべき御氣色に、出で侍りぬるは、つらさもいかばかり」など、青き薄様につけてやり給へり。

これは背景をなす前後の事情の説明にも及ばぬが、此の鈎かぎの間なる手紙の文の意味は、

昨夜は大分夜深い中にお別かれして歸りましたが、夜深う歸るのも無理ならぬ出て行けかしのお待ち遇に、披
ろなくお暇した次第で、私に取つては、つらさもいばかり、よろしく御推量下さい。

といふのである。やゝこしい文章ではあるが、「夜深う侍りつる」が前後に對し二度の勤めをなし
て、「歸りし時刻はいみじう夜深う侍りつるが、夜深う歸るも道理なる冷遇」といふ風に取りねば
ならぬことは、明らかである。

一一一

以上、私は我が國文に特有なる、異風の、やゝこしい表現形式について、多過ぎる程の引例を
なした、そしてやゝこし過ぎるほどの説明を試みた。讀者諸子は必ず、前には、變な、無理な、
物好きな、そして一向面白くも、美しくない事を言ひ出したものだと思はれたであらうが、引
きつゞけ、折り重ねた例證によつて、多少は成程これも一味だ、日本には不思議な文法、修辭法
もあるものだと思つたであらうと思ふ。私はさしあたりその程度の御諒解を得れば満
足するので、他日之れを『源氏物語』その他の古典に應用して、成程これは彼等に對する正しき
解釋味讀の一つの管鍵だと合點して下されば、更に大きな名譽と思ふのであるが、最後に國文學

の中、此の不思議な表現の最初の現はれと思はれる文章を引いて、此の講を了へたいと思ふ。

それは『古事記』の中にある雄略天皇の御製で、天皇が大和の吉野の小室岳に獵をなされた時
に、帝の御腕に蛇がつくとすぐに蜻蛉が飛んで来て、其の蛇を喰つたので、その蜻蛉の手柄を
めて詠ませられた大御歌である。

三吉野の 小室が岳に、しゝ伏すと 誰れぞ、大前に申す。』安見知し 我が大君の、しゝ待つと 吳床に
いまし、白服の 袖着具ふ、手胼に 蛇かき着き、その蛇を 蜻蛉はや食ひ、かくの如 名に負はむと、空
見つ 倭の國を、蜻蛉洲とよ。

私は曾て之れに對して拙い現代語譯を試みたことがある。それは左の通りで、大體このやうな味
であらう。

三吉野小室に、猪鹿あまた 隠れ伏せりと 奏せしは誰れぞ。』さらば向うて、鹿猪待たんと、吳床に倚つ
て 白妙の、衣紋つくるひ 袖つくるふ、 折もこそあれ 我が手胼に、 蛇が喰ひつく、その蛇を、すか
「さす蜻蛉が 喰ひ殺す、かく早喰ひて 君の仇、早く報いては 嚴し名を、蟲ながら 晴れて負はんと、
天 國の名を 蜻蛉の島と、呼ぶいはれ まさに如此なり。

拙い譯ながら大體の意味は想像されると思ふが、當座の問題は最後に近い「その蛇を、蜻蛉はや

喰ひ、かくのごと、名に負はんと」の數句である。意味は諸説まち／＼だが、愚考では、これは天皇が、日本の國號をも蜻蛉といひ、此の蟲の名をも蜻蛉といふ所に興を催されたので、つまり「他日國號と同じ名を持つた蟲が大功を立て、少しも恥ぢずに鶯々と此の名を負ふであらうといふので、(即ち、蜻蛉の今度の手柄を豫想して)國の名をも蜻蛉洲と呼んでゐたのだといふことであらう。而してこの意味に取る理由は、「蜻蛉はや喰ひ」の一句を、上の句下の句の兩方に掛けて、「その虻を蜻蛉がすばやく喰つたが、かやうにすばやく喰ひ大功を立て、此の國名を負はんと解釋すべきである」と愚考する所にある。私は、此の「蜻蛉はや喰ひ」の一句を鑲懸式と見ることによつて、此の御製を、自然に無理なく解釋し得ると思ふのであるが、同時にこれが、我が國文に此の表現形式の現はれた最初の姿であると思つて居るのである。

一三

此の鑲懸式表現は、注意して見ると、いろ／＼の方面に現はれてゐる。そしてそれは氣づかぬところに顔を出して居るので、おやく／＼と驚くことも屢々ある。例へば狂言によくある

などは、二程なく彼れの私宅に來た、彼れの私宅はこれで御座る」と折り重ねていふべきを、端折つて擦り合はせたのであらう。狂言の「二千石」に

おのれは主の聲を聞き紛ふならば、不奉公といふものではあるまいか。おのれは主の聲を聞き紛ふやうな者は、忠實な奉公人とは云はれまいぞ」といふべきを端折つて、「主の聲を聞き紛ふ」の部分に、一舉にして對上、對下の二役を勤めさせたのであらう。軍記物などによくある「ければ」「ければ」を連發する調子の文章、例へば『平治物語』の

爰に録田が下人八町次郎とて、大力の剛の者、早走りの手きあり。この者三河守(平頼盛)の聞こゆる早馳の名馬に兩鎧を合はせて馳けられけるに、少しも劣らず追ひゆきて、兜のてへんに熊手を打ちかけんと、續きて走りければ、頼盛も兜を打ち傾け打ち傾け、あしらはければ、五六度は掛けはづしけるが、終にてへんに打ちかけて、えいやと引けば、三河守既に引き落されぬべう見えられけるが、帶きたる太刀を引き抜きてしと切り、熊手の柄を手本二尺ばかり置きて、づんと切つて落されければ、八町次郎のけに倒れてころびけり。京童これを見て、あはれ太刀や、あ、切れたり、三河殿もよく切つたり、八町次郎もよく駈けたるりとぞ感じける。

の如き、殊に點を打つた所の「走りければ」「あしらはければ」の如きは、本來ならば、熊手を

打ちかけんと、續きて走りければ、頼盛も兜を打ち傾けあしらはれたが、あしらはれければ、五六度は掛けはづしけるが」と繰り返して、授受の關係を具備さすべきところであるが、急迫の呼吸を寫し出だす爲めに、「あしらはれ」の一句に二役を演じさせたのであらう。今の人、殊に子供などの言葉にも、此のやうな語尾の揃つた句を連ねるのを聞くことが度々ある。例へば

甘いもんだから、澤山たべたもんだから、お腹をこはしてしまつた。

といふ如きも、本來は「うまいものだから澤山たべた、澤山たべたのでお腹をこはした」といふべきを、鑲懸式に端折つたと解釋すべきであらう。或はよくいふ

おれは、好きだよ、おれは。

といふ風の繰返しなども、「おれは好きだよ、おれは好きだよ」の下略とも考へられるが、同時に寧ろ「おれは好きだよ、好きだよおれは」の鑲懸式端折とも解釋すべきであらうと思ふ。これらは王朝文學に見出ださるゝ特別表現美の説明に對する、序ながらの添言であるが、此の表現形式が可なりに廣く多く行はれてゐること、それに一種の面白味のあること、而してそれを無意識ながら最も多く最も面白く用ゐたのが平安王朝の文學であることは明らかであると思考する。

最初にも云つた通り、王朝文學に見出ださるゝ表現美は、おもなるものだけを擧げてても數種は

あり、委しく擧ぐれば二百種、三百種にも上るであらうが、こゝには「主要」といふ事を標準にせず、「珍」「奇」「新」「先人未言」といふ事を標準にし、一つは不束ながら年來ひそかに考へて來た事を取り纏めて、同好諸子の是正を得ることを楽しみにし、年わかき讀書子たちが古文學讀破の参考に、幾らかでもなることを望外の仕合せとして、けだるい講説を長々と試みたのである。そして文義の理解を前提とせずには、微妙な表現の呼吸の理解を期待することが出來ぬと思ひ、一つは難解なる古典の解釋に對する一つの榮にもなれかしと思つて、煩瑣な現代語譯式の解釋までを添へたのである。讀者諸子の心ひろき御諒解を乞ふ。

(昭和二年稿)

鎌倉時代の軍記に於いて新に姿を見せた文體はいろ／＼あるであらう。一般的には、先づ新興武人を寫すに適した強い調子がある。分けて云へば、漢文式の莊麗な調子や新しい俗語、武人語の粗樸な調子などがそれであり、また總括的にはそれらの多くの調子が、分かれ別かれにならずして仲よく調和渾融して居るのがそれであらう。けれども是等の諸要素は王朝末期の文學、例へば『今昔物語』などに於いて、已にその萌芽を見せ、のみならず時としては可なりな進歩した姿をも見せたものであるが、是等に對して、鎌倉の軍記に於いて始めて現はれ、しかも程なく完成されたのは、七五調を中心とした短歌の要素の挿入である。言ひ換へれば散文要素と律語要素との調和である。

二

短歌の起原は遠く遙かである。けれども短歌が上三句、下二句に二分して詠まれたのは、近江朝以後のことであつた。短歌の五句三十一字は、本來先づ五、七の第一句第二句を讀みつゞけ、

次にまた五七の第三句第四句を讀みつゞけて、最後に七音の一句を加へたもので、五七五の初三句を讀みつゞけて上の句となし、後の七七を讀みつゞけて下の句としたものではない。例へば本朝歌謠の最初と云はれる須佐之男命の八雲立の歌は、

八雲立ついづも八重がきつまごめに、

八重垣つくるその八重がきを。

と讀んだものではなくして、

八雲たついづも八重がき、

つまごめに八重がきつくる、

その八重がきを。

と三段に接離して讀んだものであつた。此の接離の關係は神代の太昔から『古事記』『日本紀』などの歌謠の全部に及んだものであつたが、柿本人麻呂あたりから、短歌の讀みつゞけ方が後世振に變はつたのであらう、『萬葉集』に入ると、長歌、旋頭歌等が昔のまゝに五七、五七と讀みつゞけられてゐるにかゝはず、短歌だけは、後世風に「五七五」「七七」と歌はれるやうになつた。此の推移の間に七五調といふ新しい調子が生まれ出たのである。但し、奈良朝では此の七五調

五調との融和がいかに困難なる事であつたかが想像される。

四

『平家物語』に於ける七五調の使用は、數に於いて、機會に於いて、風致に於いて、すつかり『保元』『平治』とその趣を異にした。『平家』の作者は、殆んどあらゆる機會に於いて、無數に此の調子を用ゐたが、それは實に落ちついた、整つたものであつた。散文的な前後の文句とびたりと馴染んで、少しの乖離をも感じさせぬものであつた。また七五それ自身の間にも變化があつて耳に障らず、而して前後の文章全體に對しては、何とも云はれぬ和らいだ美しさと、變化曲折の面白さを與へるものであつた。殊に面白いのは、それと氣づかれぬ七五調が隨處に潜在して、光を翳みつゝ、一種の親しみある空氣を漂はしてゐることで、形式の上から見た『平家』の面白味の一半は、此の物いはぬ七五調の働きに歸すべきであらう。

要するに『平家物語』の作者は、隨所に無數に七五調を融用した。而してそれをば全く自家藥籠中のものとして、めつたに七五調顔をさせなかつた。こゝに『平家』の七五調の偉大なる成功の鍵が潜んでゐる。『保元』や『平治』や後の『太平記』等に於いては、七五調が七五調顔しつゝ、

傲然として獨立不遜の面目を見せてゐる趣がある。それは作者に彼等を抑へて周圍に馴染ませる支配力が無かつた爲めであらうが、『平家』にはその遺憾が更に無く、大抵の七五は、唯々として作者の命を奉じつゝ、我を立てずにおとなしく散文の間に伍してゐる。尤も時には七五の特色を存分に發揮して見せることもあるが、それも潮時が來れば、作者が傀儡の糸に引かれて、おとなしく影を潜めてしまふ。しかもそれは唯だ七五だけのことではない。「五七」もあり、「七七」もあり、時としては「五七五七七」の短歌が全容を顯はすこともあるが、大抵はそれと氣づかせずに、散文の間に融け込んでしまつてゐる。讀者は之れを聞いて、或は誇張の、或は認識不足の空論と思はれるであらう。けれども『平家』の實際を見ると、先づ劈頭の

祇園精舎の鐘の聲、諸行無常の響きあり、沙羅双樹の花の色、盛者必衰の
ことわりを顯はす。奢れ
る者も、久しからず、唯だ春の夜の夢の如し。

からして、その通りではないか。此の最初の純七五調の六句、即ち「祇園精舎の」から「花の色」までは、多分當時盛んに行はれた和讃、今様の句立に倣つたものであらう。けれども之れを讀む大多數は、恐らく、和讃とも、今様とも、また七五とも氣づくまい。かやうに「七五」に光をつつませ、讀者に七五と氣づかせずして、唯だ其の口調、句立の面白さに恍惚たらしめる。これが